
神殺し

雷禅 神衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺し

【Zコード】

N9783G

【作者名】

雷禅 神衣

【あらすじ】

裏社会の最深部にある「魔界」その魔界で繰り広げられる「魔界NO.1」の座を争う狂人と化した殺人鬼たちの壮絶な死闘。

1・神殺し「ウル」

仕事が終わった後に乗るエレベーターと言つのは実に心地悪い。何処かでシャワーでも浴びれば古鹹の香りに包まれて気分も良いのだが

生憎とそのような時間を持たないこの男は、いつもこの血生臭いエレベーターの個室が嫌だった。

男が押した先は地下4階。エレベーターは起動の音を静かに響かせ下へと向かった。

男は革ジャンのジッパーを下に降ろすと、真っ白だったTシャツが真っ赤に染まっているのを見て、口元を歪ませた。

無論、それは自分の血ではない。これはあくまで返り血であつて男は無傷だ。

革ジャンの内ポケットは改良されており、小型の斧や鉈、サバイバルナイフなどが納まっている。

そのどれもが血で染まつており、ポタポタとエレベーターの床に滴り落ちた。

床には以前にも同じように血が落ちた跡がいくつも残されており、どれも赤と言うよりはドス黒く染まっている。

もはや床は本来の色彩を失つてあり、床からも血生臭い異臭が漂つている。

見飽きた光景だが、この光景こそが男の仕事を象徴する証でもあった。

エレベーターが目的の地下4階を告げると、鋼鉄の扉が開いた。

男はすぐ目の前にある緑色のドアを開き、中に入った。

「お疲れさん、ウル。仕事はどうだった?」

「まずまずだ。目的は達成した」

「そうみたいだね。わざわざ銀行の口座に約束の金が全額振り込まれていたよ。

それにして相変わらず酷い姿だね」

「俺の見た目はお前の心中と同じだろ？紅」

「アハハ、まあそうだけだね」

男の事を「ウル」と呼んだこの青年の名は「矢吹 紅」（やぶき くれない）歳は27歳とまだ若い青年だ。

目鼻立ちの整つた美青年で、髪の毛はセミロング。ブラウンに染めた髪の毛は潤いがあり

背後から彼を見ると男なのが女なのか判別が付かない姿となる。頭脳面積でいつもパソコンと向かい合つてあり、殺し屋を背負うウルの良きパートナーだ。

そして「ウル」と呼ばれたこの大柄な男の本名は「鉄 麗」（くろ がね うるは）歳は34歳。

紅は麗のうるを取つてニックネームの「ウル」と彼を呼んでいる。

「それで今回は何人殺つたんだっけ？」

「20人だ」

「わお！後11人殺つてたらギネス更新だつたね」

「そりなのかな？」

「そうだよ、惜しいな～もつと殺せば良かつたのに」

「俺は依頼主のターゲットしか殺らない。それが殺し屋の信念つて もんだ。ちょっとシャワーを浴びてくる」

そう言つとウルは別の部屋から着替えを持ち、浴室へと消えて行つた。

とても尋常ではない会話だが、紅とウルは「そういう世界」にいるのだ。

光溢れる表の世界とは似ても似付かぬ裏の世界。

そう、彼ら裏社会ではこの世界の事を「魔界」と呼び合つてゐる。

一般的に裏社会と言えば闇の売買やヤクザ、暴力団などが挙げられるが

紅やウルのいる世界は、それよりも更に極悪な世界。魔界に比べた

らヤクザや暴力団など子供のよつたな存在に過ぎない。裏社会を「悪」とするのなら、魔界は「魔」である。

既に人間である事を超越し、残虐な行為に対し何の抵抗を持たなくなつた狂人たちが始めて踏み込む世界

それが「魔界」である。

この魔界では殺人など日常茶飯事だ。そもそも人を殺す事に悪など感じるはずも無く、人間が蟻を踏み潰すのと同じようにそして人々がゴキブリを殺すのと同じように、人間を殺す事は日常の常だつた。

正常な人間社会に存在する秩序も無ければ優しさもない。そこにあるのは残虐の一文字だけだ。

そんな魔界の頂点に君臨するのがウルなのだ。彼は魔界では「神殺しのウル」と呼ばれており

同じ魔界の殺人鬼たちから恐れられている。ウルが目の前に現れる事、それ即ち「絶対的な死」を意味する。

ウルの手に掛かり、生き延びた人間は誰一人存在しない。

「神殺しのウル」と言う異名は「神さえ殺しかねない」と言う表現から付けられた名である。

そんなウルを支える良きパートナーの一人が紅であり、彼もまた魔界では恐れられている存在だ。

もう一人パートナーがいるのだが、今は席を外しているらしかつた。

「金額はどのくらいまで膨れ上がつた?」

シャワーから出てきたウルが紅に聞いた。

「総金額136億。そろそろ銀行の口座を増やした方が良いかもね。あまり金額が大きすぎると怪しまれる。

ちなみにこの金額を得るためにウルが殺した人間の合計は・・・3

98人だね」

「まだ398人か、意外と少ないんだな」

「アハハ、表の世界ではもう列記としたシリアルキラーだよ。だか

ら余計にギネスを狙つて欲しかつたんだよね」

「簡単に言うなよ。殺る方は苦労するんだぜ」

「嘘だあ、いつも笑つて殺すくせに」

「ハハハ、それより警察の方はどうなつてゐる」

「調べてみるかい？」

「ああ」

紅は目の前にあるパソコンに居直つた。

画面には警視庁のサイトが開かれ、そして本来アクセス出来ないページへ飛んだ。

そこには全国で起つた殺人事件に関する情報がリアルタイムで更新されるといふ

警視庁内部の人間のみがアクセスできるページだつた。

優秀な頭脳を持つ紅のハッキングによつて成せる業だ。高度な知識を持つ紅にとつて

警視庁の規制サイトにアクセスすることなど動作も無い事だつた。

「あつた、これだね」

紅は画面の一部分を指で示した。そこには「20人殺し」と打ち込まれており、事件に関する詳細が掲載されていた。

「やっぱり魔矢が上手くやつたんだろうね、ウルに関する情報はひとつ得られて無いみたい」

「20人殺しの容疑者に関する田撃情報、未だ無し。犯人像見当付かず・・・か」

ここで言われる「魔矢」（まや）と言つ人間こそがウルを慕つ最後のパートナーである。

「警察も俺の存在には気付けないか。まあそつだろう。魔矢は警視庁の警視総監だからな」

「凄い話だよね。本来人を守るべき警視総監が、実は魔界の住人なんてさ」

「ま、だからこそ俺たちの存在は闇に葬られる」

「まあね。魔矢には感謝しなきや」

「人が居ないところで感謝されても嬉しくないな」

突然部屋のドアが開いたかと思うと、そこには魔矢が立っていた。

「魔矢。今日はもう仕事は終わりなの？」

紅が聞いた。

「ああ。いくら警視総監と言えどある程度帰りの時間を制限しなきややつてられんからな」

魔矢は少々疲れた様子で言った。

「お疲れだつたな、ウル」

「ああ。俺の痕跡は残つてなかつただろ？」

「20人殺しの件だな。勿論だ。俺が現場に到着したときには既にお前は去つた後だつたし証拠も一切無かつたから、事件調書を書き換える必要も無かつたさ。その辺はさすがだな。

んで、今回の殺しでいくら入つたんだ？」

「今回だけで3億入つた。なんせ20人と言つてタラメな数だつたんでな。それ相応の金額を提示した」

「そうかい。それはそうとお前、先日東京の指定暴力団（山村組）の連中を殺つただろ？」

「そうなの？それは初耳だけど

紅がウルを見て言った。

「ああ、あの連中か。そうだ、俺が殺つた。気に食わなかつたもんでな」

「何が気に食わなかつたんだ？」

「あの連中、都心で年寄り相手に恐喝をしてたんだよ。ムカツと来てね」

「魔界の神殺しの異名を取るお前が、年寄り一人に同情したのかよ「俺は子供と年寄りは好きなんだ。なんだ？殺つてまずかったのか？」

「仕事以外であまり殺しをするなよ。特に山村組ほどの巨大な組織を潰すと、他の組の連中が舞い上がるんだ。？」

いよいよ自分たちの時代が来たつてな感じで。しかもお前、かなり残虐なやり方で殺つたよな？」

「なになに、どう殺したわけ？」

「別に普通さ。首を同体から引き千切つて舌を引っこ抜いた。ただそれだけのことさ」

「うへえ～痛そう」

「まつたく頼むぜ。今度暴力団を殺るときは、俺に一声掛けてくれ。揉み消すのが大変なんだ」

「分かつたよ、すまんすまん」

「ところでお前たち、この二人組みを知つていいか？」

魔矢はそう言うと一枚の写真を取り出し、ウルと紅に渡した。写真には二人組みの男が映つている。

一人は身長190cmほどの男で筋骨隆々のモンスターでヴァンパイアにも見える。

分厚い胸には、鎖を食いちぎる大虎の刺青が刻まれ、背中には赤い女郎蜘蛛が、大きな蜘蛛の巣に乗つている刺青が施されている。髪はぼさぼさで目はギョロ目。大きな口に、鋭い牙。その姿は、まるで野生の大虎を思わせる重量感と威圧感を放つている。

もう一人は対照的で紅のような美青年だつた。身長は175cmほどでその美貌は小悪魔的だ。

すつきりとしたショートヘアに白い素肌。背中から右肩にかけて、怪しげな蜘蛛の巣の上に止まる黒い蝶の刺青があり左の乳首には黒い茨の刺青があるようだ。

ウルはまつたく見覚えが無く写真を紅に渡した。紅の知らないようで首を傾げている。

「この二人がどうかしたのか？」

ウルが魔矢に聞いた。

「その二人はお前のファンだそつだ」

「ファンだつて！？」

紅が叫んだ。

「左側に映っている筋骨隆々のモンスターはバイパー（白虎）と言う男。」

右側に映っている美青年は鬼武と言う男だ。一人とも最近魔界に入った新参者だが、なかなかの殺人鬼たちでな。ウルのやつた20人殺しの現場に、ウルが去った後に訪れている姿を目撃されている。

どういう経緯でウルの存在を知ったのかは不明だが、お前とは一度会つてみたいと話していたらしい」

「ほう」

ウルはあまり興味を示していない様子だつた。

「それでこの二人はどんな殺しをやるの？」

紅だけは興味を持ったようで魔矢に聞いた。

「バイパーの方はウルと似ていて、武器よりも素手で相手を殺す事が好きみたいだな。

特に自分よりも強そうな相手や屈強の男を相手にする性格らしい。鬼武に関しては詳しい詳細はあまり無いんだが、時折対空ミサイル・スティングガー FIM-92Aを持ち出したりロケットランチャー振り回す事があるらしい」「なんだかハチャメチャだね」

「だからこそ魔界に入れたんだろう。この二人はウル、お前を尊敬しているらしい」

「そうかい」

「あれ？ウルは興味無さげだね」

「ま、この二人組みが神殺しのウルに喧嘩を売らない事を祈るよ。尊敬しているらしいからその心配は無いだろうけどな」

「でもどうするの？ウル。もし何処かでこの二人と出くわしたら、殺る？」

「別に。俺は依頼主のターゲットを殺す事が仕事だ。関係の無い人間まで巻き込む気は無いが・・・」

「無いが？」

「その一人の出方によつては変わつてくる」

「要するにちよつかい出さなければ何もしないと言つわけだな」

「そうだ」

「じゃあもし普通に話し掛けってきたら?」

「その時は普通に話し返すだけさ」

ウルはそう言つと立ち上がりドアへと近づいた。

「何処行くんだ?」

「次の仕事だ。殺しの依頼はもう一件あつてな。そろそろ時間なんだ

だ

「次は何人殺るんだ?」

「今回は8人だ。じゃあな

そう言つとウルは様々な武器が仕込んであるジャケットを羽織り、
出て行つた。

「ウルを尊敬する一人の男か。僕はちょっと興味あるな」

紅が楽しそうに言つた。

「ウルは相変わらず一匹狼だな」

「うん。それが神殺しのウルたる由縁だからね

ウルは今日も動き出す。

その先に殺戮と言つ一文字が待つてゐる「地獄の最終地」へ・・・。

END

今日はウルも魔矢も出掛けている。

外出の理由は最近魔界に入ってきたパイパー、鬼武両名の動向を探るため。

だが「神殺しのウル」の異名を取るウルが重い腰を上げ、この一人の動向を探る気になつたのには訳があった。

「魔界へ侵入してくるのはパイパーと鬼武の一人だけではなさそうだ」

この情報を持つてきたのは魔矢だつた。

魔矢の話によると、パイパー、鬼武の両名の他に、「等々力 薫」、「鮫島 聖」と名乗る二人の人間が

パイパー、鬼武サイドには存在し、連中が徒党を組む可能性が強いらしい。

別に連中が仕掛けてこない限り何をするわけでもないのだが、慎重派の魔矢はこの四名に神経を尖らせている。

事実上、この話が真実ならまた厄介な殺人鬼たちが増え、さらに数を増やし徒党を組みかねない。

そうなるとその分だけ「神殺し」の地位を狙う殺人鬼たちが増えるという事だ。

最も、紅からすればウルを倒せる人間など存在しないと思っている。何故ならN.O.-1が存在するという事は、当然N.O.-2、N.O.-3と続く存在があるからだ。

その存在を撃破し、ウルまで辿り着く可能性は極めて低い。ましてやN.O.-2とN.O.-3を殺すのは不可能だと断言できる。何故ならN.O.-2とN.O.-3は・・・・。

「あれえ～ま～た奇妙な連中がやつて來たな」

ヘッドフォンを耳に当てたままの紅が一人呟いた。

ヘッドフォンはこの建物の周辺に設置している盗聴器から流れている音声で

紅たちの居るビルから半径200メートル四方の会話を盗聴できる。ヘッドフォンから流れてきた声は以下のようないい話だつた。

「ここがウルのいるビルだな」

「ああ、そうだ。でも本当に殺るのか？」

「当然だろ？ウルを殺れば神殺しの異名は俺のものだからな」「自信はあるのかい？」

「勿論さ。俺を誰だと思ってんだ？元陸軍軍曹だぜ」「さて、じゃあ突入とするか」

会話はそこで途切れた。どうやらウルが不在だと言う事を知らないらしい。

今現在このビルにいるのは紅ただ一人だ。

「しあうがないな～ウルも魔矢もいないし、暇潰しで遊んであげようかな」

紅は満面の笑みを浮かべてモニターをオンにした。

そこには完全武装を施した機動隊のような男たち、合計8人がビルへと近づいている姿が映し出された。

その8人の中に一際背の大きな男が映っている。どうやらこの男が先ほど喋っていた軍曹らしい。

「うへへ、なんだか楽しくなってきたぞ！！」

紅は「トラップ」と書かれたボタンを押した。

「ああ、ここまで辿り着けるかな？」

武装した集団はビルの中に入り、エレベーターのスイッチを押した。ウルの居る階はこのビルの地下4階。そこに神殺しのウルがいる。男たちはエレベーターが下りてくるのを持った。

やがてエレベーターのドアが開くと、突然ビル内に不気味な声が響いた。

「勇敢な戦士たちよ、今日は諸君とゲームがしたい。俺は地下4階

で君たちを待つていい。

来れるものなら来てみるが良い」

その音声は機械によつて変えられ、誰が喋つているのか分からなかつた。

「今のはウルか！？」

「だらうな、ふざけやがつて。まあいい、乗るぞ」

武装集団は銃を構えながらエレベーターに乗つた。

「へへへ、第一トラップ始動だ！？」

地下4階でモニターを見ながら紅は呟いた。

男たちの乗つたエレベーターは静かに下へと下がつていぐ。それでも常に何が起こるか分からぬため隊員は緊張している。

そして地下2階へ辿り着いた時だつた。

突然エレベーターの天井部が開き、開かれた穴から五匹のドーベルマンが落ちてきた。

「な、なんだ！！！」

「うぎやああああ！！！」

「くそつたれ！！！」

ドーベルマンたちは狂犬と化しており、目に付く全ての男たちに噛み付いた。

慌てた男たちは咄嗟に発砲するが、エレベーターと言つ狭い個室の中でターゲットが定まらず、銃弾は仲間に命中した。

「くそ！！！」

軍曹は身を屈め、持つていた銃で応戦する。だが他の仲間たちは噛み殺されたり、仲間同士で撃ち合つたりと無惨な姿を晒した。

エレベーターの個室は血塗れになり、人間の死体と犬の死体が無数に転がつた。

地下3階へ辿り着いたときには、8人中5名が死亡した。

「なんてこつた・・・」

「やっぱり無謀だつたんだよ、ウルに喧嘩を仕掛けるなんて・・・」

「俺たち殺される・・・」

「泣き言を抜かすな！ウルは俺が殺す」

軍曹のみが平常心を保っているようだつた。

やがてエレベーターは地下4階へ辿り着き、ドアが開いた。目の前の壁には紙が貼り付けており、こんな事が書かれていた。

「火の用心」

軍曹がそれを目にした次の瞬間、天井に開いていた小さな穴から凄まじい勢いで火炎が放射された。

「ぎやあああ！！！」

「ぐつわあああ！！！」

軍曹だけが床に腹ばいになり難を逃れたが、他の二人は炎に包まれてしまつた。

「くつ！これも罷か！！」

火炎の熱に耐えられなくなつた軍曹は、たまらず緑色のドアを開け、中に入つた。

「やあ、よくここまで辿り着けたね」

「お前はっ！！」

そこにいたのはあまりにも清楚な美少年だつた。これが神殺しのウルなのだろうか・・・。

「お前がウルか？」

「違うよ。ウルは出掛けているんだ。僕は単なるお留守番」

「こんなことしやがつたのはお前か」

「そうだよん。楽しかつたでしょ？」

「ふざけるな！！」

「あれえ～良いのかな～僕にそんな口の利き方して～死んじやうよ

～ん

「クソガキが！！！」

軍曹が銃を構えた時だつた。紅は一瞬ニヤリと笑みを浮かべ、右手に持つていた遠隔装置のボタンを押した。

「ぐはあああああああつ！！！」

紅がボタンを押した瞬間、軍曹の両側にあつた壁から夥しい数の槍

が飛び出し、軍曹の身体に突き刺さった。

「うはあ～痛そつ」

「ぐううう・・・」

軍曹に刺さった槍の数は計8本。その全てが致命傷裂けているが、もはや軍曹は立ち上がれないほどのダメージを迫っていた。

「ウルを殺すために来たみたいだけど、無駄だつたね。君たちがウルに挑もうなんて100年早いよ」

「ううう・・・」

「僕を倒せないんじゃウルは程遠いな。あ、そしそう知つてる? N〇・1はウルだけど

その下にはN〇・2、N〇・3つて続く人が居るんだけど、誰だか知つてる?」

紅の言葉に軍曹は首を捻った。そんな人間が居るなんて初耳だつた。
「N〇・3は僕たちの仲間の魔矢。そしてN〇・2は・・・・・
まさか・・・軍曹の目にニヤリを笑う紅が映る。だがもはや軍曹に抵抗する力など残つていない。

「魔界N〇・2の殺人鬼は、僕なんだよ。神殺しのウル・・・そして僕の名前は・・・処刑の紅だ。相手が悪かつたね」

「処刑の紅」・・・・軍曹には聞き覚えがあつた。

覚えている限りの記憶では、処刑の紅が人を殺す際は必ず処刑の道具を使うという。

その道具は全て現実世界で使われた品々で、中世ヨーロッパの物から東南アジア系の物まであると言つ。

「さあ、処刑の始まりだ！！！アハハハ！！」

一体いつ持つたのか、紅の手には巨大なノコギリが握られていた。この小さな身体でこんな巨大なノコギリを持つとは尋常ではない。紅は蹲つている軍曹の身体から服を脱がせ、全裸にすると、別の部屋から両脇を横に固定された鉄棒を持ってきた。

そして軍曹を軽々と持ち上げると、身体を逆様にし、両足を紐で括りつけ、軍曹を逆さ吊りにした。

「これから何をするか分かるかな?」

軍曹はゾッとした。もはや全裸になつてゐる上に逆様に吊り下げら
れ二二ふ。底見る出でなー

この場合、どのようにノックギリを使うかは容易に想像が付いたからだ。

「このノゴギリを君の股間に当てる、ギガギガしたひづりなるだらうね～」

「…………さへひめせ…………ひめせ」

君の身体は絶対真っ二つ最高だよね！ 嘸呼たまらなくなつた

頭から鋸引きするまつが、剛として苛烈のよつに懲られるが、実は

それは相手への思いやりとも言えた。

というのも、頭から引き始めれば、囚人はすぐに絶命することが出来たが、股間から引き始めた場合はそうではなかつたからである。

1) 犠牲者の両足を開き、胸部を下方に位置せらる」として、出血の速度を緩めることができる。

2) 頭が下方になる事で、血液が脳に流れ込み、脳への酸素の供給を活発にする。

3) 以上により、痛みを鋭敏に感じさせる一方で、来るべき死を引き延すことができる。

以上のような理由からその苦痛は極限とせられるのが、この「ゴギツ刑」なのである。

「じゃあ行くよ。イツツ、ショータイム!! イエーイ!!」

「やめろ――――――があああああああああ――――――」

軍曹の股間にノコギリが突き刺さり、それが左右に揺さぶられる。

凄まじい血しぶきが上がる中、ノコギリは更に加速し、股間から下腹部へと移動する。

「つはあ～痛い？痛いよね？」「メンネ～痛くして　だけど僕に喧嘩を売るからこうなるのさ」

「あああ・・・ぐうがあはあ・・・」

「そおら、もう一息だよ　」

ノゴギリが軍曹の首まで到達したとき、既に軍曹は息絶えていた。やがてノゴギリが頭部を切断すると、軍曹の身体は真っ二つに切断された。

異臭を放ちながら血や内臓がこぼれる。

「アハハ、楽しかった。やっぱり殺しは良いよね」

紅は頬に飛んだ血を一舐めすると、口元を大きく歪ませ「シコヒ微笑んだ。

紅がアジトで軍曹の惨殺を楽しんでいる頃、ウルと魔矢はとある現場に辿り着いていた。

「こりや思つていた以上だな」

魔矢は一面に広がる血の海を見渡し呟いた。ウルは表情一つ変えず残つていた武器弾薬の回収をしている。

「ざつと数えても12人は居るな。まあ、いずれも魔界では最下級レベルの殺人鬼たちだが・・・」

魔矢は既に息絶えている死体を見てそう言つた。

「殺つたのは噂のあの連中か？」ウルが聞いた。

「パイフーと鬼武に間違いない。お前ほどではないとは言え、なかなか残虐だな」

「フン、この程度なら誰でも出来るけどな」

「それはお前だからこそ言える」とだろ」

「ハハハ！まあな」

現場に残つている弾痕や傷跡から判断するに、この殺人鬼たちは四方八方に攻撃を仕掛けている痕跡がある。

それはターゲットが一人ではなかつたと言う証拠である。

パイフー、鬼武に加え「等々力 薫」、「鮫島 聖」両名の存在があつたかどうかは未だ不明だが少なくとも一人ではなかつたはずだ。

「新参者にしちゃあ、ずいぶん手荒だな。殺し慣れてる連中のようだ」

「何故分かる？」

魔矢が聞いた。

「殺り方の手順が良い。これだけ派手に殺りあつて置きながら、連中の足跡は残つていない。

それに死体を見る。獣に引き裂かれたような跡があるが、全て致命

傷を的確に捉えている」

ウルの言つたとおり、死体には全て致命傷となる傷が無数に残つており、どれも鮮明だつた。明らかにプロの仕事である。

「なるほど、さすがに最下級殺人鬼じや手に負えなかつたわけか」「だろうな。ほとんど秒殺で決つただろう。この分じや中級の連中

でも手に負えんかも知れないな」

「安心しろ、その辺はもう手は打つてある

「あれをやるのか？」

「勿論。これは魔界のいわば儀式だからな」

魔界の儀式・・・それは魔界へ足を踏み込んだ者全てに「えられる試練。

ここ魔界では殺人鬼のレベルも大きく分けて4段階に別れている。まず最下級レベルは魔界で最も地位の低いレベルで、魔界に足を踏み込んで日の浅い殺人鬼たちがこの階級である。

その上は中級レベル。このレベルになると規定があり、魔界に踏み込んで2年以上の者で

尚且つここ魔界で5人以上の殺人鬼を殺した経験を持つ者たちがこのレベルにランクされる。

そしてその上が上級レベル。このランクは魔界に入った年数は関係ないが

魔界で10人以上の殺人鬼を殺した者だけが得られるランクだ。

更にその上を行くのが最上級レベル。魔界に8年以上生息する人間で尚且つ一度に10人以上の殺人鬼を相手に出来る者がこのランクに位置する。

大きく分けるとこの4段階に別れる。

そしてそんな最上級レベルの更に上を行くのがS級レベルである。このS級レベルは魔界に10年以上生息する人間で、一度に15人以上の人間を瞬殺する事が出来

尚且つ武器や弾薬、そして格闘や武術をもマスターするものだけが得られるレベルだ。

このS級レベルになると、S級以下のレベルを持つ者たちを自分の仲間にする事が許されている。

今のところ魔界ではウル、紅、魔矢の3人のみがこのS級レベルを取得している。

つまり事実上、魔界で高レベルにランクしているのはN・1のウル、N・0・2の紅、N・0・3の魔矢だけなのだ。

そして魔界で行なわれる新参者への儀式とは「祝いの宴」である。システムは至つて簡単。魔界に新参者が入ってきた際、最上級以上の殺人鬼たちが

新参者たちに刺客を差し向けるというシステムである。

差し向ける殺人鬼たちのレベルは、撰ぶ側の好みによつて変化するが一般的には最下級か中級を多く利用する。人数も2・3人と割りと少数だ。

今回、新参者たちであるパイフー、鬼武たちの刺客は魔矢が担当する事になつてている。

「こ」の有様を見た限りでは連中に最下級と中級では手に負えないだろつ。

そうだろつと思つて予めそれ以上の階級10人を差し向けておいた「魔矢が静かに言った。

「振り分けはどうなつてんだ?」

「上級レベルの殺人鬼が9人。そして最上級の殺人鬼が1人だ。これだけの数が居れば、例え撃退できても無傷では済まないだろ?」「そこに「等々力 薫」、「鮫島 聖」とか言う連中が加われば、なんとか倒せるだろ?」最も手を組むかどうかは連中が決める事だが

「そうだな、パイフーと鬼武の一人だけでは少々苦しいだろ?」

「さてさて、連中のお手並み拝見と行こうか。ひょっとしたらN.O. 4はあの連中になるかも知れないからな」

「フフフ、さすがに俺までは倒せないだろ？ うて？」

魔矢はニヤリと笑いながら言った。

「万が一お前がやられるような事があれば俺や紅も動く。まあそもそもN.O. 4に屈くかどうかも分からんけどな」

「いずれにしてもどうなるかが楽しみだ」

「もう刺客は差し向けたのか？」

「ああ、今頃探し回っているだろ。時期始まるさ、祝いの宴がな」

「じゃあ特等席を取りに行こうぜ」

「そうだな」

二人は闇の中へと消えて行つた。

魔界炎上・・・・いよいよその火蓋が切つて降ろされる・・・・。

END

4 ～もう一つの出会い～

魔界の郊外にある古のダウンタウン。そのダウンタウンの様子を一望できる高台で

ウルと魔矢は望遠鏡である二人組みを眺めていた。

二人の視線の先にいるのは、想像以上の強さを誇るバイフーと鬼武の姿だった。

10人もの殺人鬼たちを送り込んだのは決して間違いではなかつた。何故なら望遠鏡の先では既に7人もの殺人鬼たちがあつさりと殺され、無惨な姿となつてゐるからだ。

「こ」の分じゃヨシミと洋一も時間の問題だな」

望遠鏡から目をさずに魔矢が言つた。

「残りの一人は誰を送つたんだ？」

「ミスター」だ

ウルの問い掛けに魔矢が静かに答えた。

「ほう、」に向かわせたのか。これは面白くなりそうだな」

「ああ。他の殺人鬼たちは楽に始末できても、」までそう行くとは思えんからな」

魔矢がそう言つた瞬間、視線の先にあつた建物から巨大な炎が上がつた。

「ヨシミと洋一はオダブツだな」

ウルがにやけながらそう言つた。

「ま、あいつらじゃ無理だらうな。だが、果たして」までそう上手く行くかな」

魔矢の目は真剣さを保つてゐる。

「最上級レベルでも」はその中級に位置する殺人鬼。連中がどうやつて戦うか見物だ」

ウルも楽しそうに望遠鏡で眺めている。

「さて、いよいよ」のお出ましだぞ」

鮫島 聖が魔界に降り立ち、ダウンタウンで」と出会いつい30分前、
鮫島 聖はある場所で奇妙な少年と出会っていた。

「お兄さん ずいぶん物騒な刀持つてるね」

「ああ?」

振り返るとそこにはまだあざけない少年がニコニコ笑いながら立っていた。

目鼻立ちの整つた青年だが、見よう見よでは少年のようにも見える。

「なにか用か? 小僧」

「サメジマ セイさん・・・だよね?」

その瞬間、鮫島 聖の身体に緊張が走つた。彼はたつた今魔界に下りたばかりで、誰とも会つていない。

にも関わらず自分の名前を知つているとはど? 事なのか・・・。

「小僧、なんで俺の名前を知つてやがるんだ?」

「お兄さんだけじゃないよ。そつちの刀さんも知つてる。妖魔刀・鬼三さんでしょ?」

「バカな! 何故知つている! ?」

今度は鬼三が喋つた。

「お兄さんたちの事はいろいろと調べさせてもらつたよ。勿論、あつちで戦つているパイフー・鬼武の事も知つてているけどね。でもパイフーと鬼武にはウルと魔矢が興味を持つたみたいでさ。僕一人になつちやつて退屈しているんだ」

「ウルに魔矢だとつ! ジヤ、ジヤあお前はまさか・・・・」

鮫島 聖の額から嫌な汗が流れた。その同様は妖魔刀・鬼三にも伝わっている。

「自己紹介が遅れたね。僕の名前は矢吹 紅。この魔界でN.O. - 2の人間さ。通称【処刑の紅】」

そんなバカな・・・・鮫島 聖の脳裏にそんな言葉が浮かんだ。

魔界に降り立つて早々、まさかその魔界のノ。・2が自分の目の前に現れようとは、誰が想像するだろ？

（じょ、冗談じゃないぜ・・・いきなり紅かよ・・・）

鮫島 聖の思想が大きく乱れた。

「フフン まあまあそう警戒しないでよ。別に殺しにきたわけじゃないからさ。僕はお兄さんの持っている刀に興味があるんだ」

「鬼三に？」

「うん。妖魔刀・鬼三・・・小ぶりな刀身だけど、名の由来の通り、鬼を三匹、縦に重ねて一気に斬りおとすことが出来る。

その切れ味は、最高にして、残忍、かつ、慈悲深い。鬼三に斬られし犠牲者は、腕が、脚が、胴体が吹き飛ぶ様を見て初めて斬られた事実を、思い知らされる。そんな、高貴で野蛮な鬼三は、まさに【鬼】を、【魔】を切り裂くべくして、生まれた。徳川家光の時代に創られし、無敵の切れ味を誇る古い刀・・・でしょ？」

「若いのに良く知ってるな」

鬼三が答えた。

「うん。勉強したからね」

「そうだとしたら何だというんだ？」

今度は鮫島 聖が言った。

「実は僕も刀が好きなんだ。でね、僕と手合わせ願えないかな？と思つてるんだよね」

「手合わせだと？お前刀なんて持つてないじゃないか」

「あるんだな」これが。ジヤジヤーン！」

そう言うと紅はどこに隠していたのか一本の刀を取り出した。

「さて問題です。この刀の名前はなんでしょう？」

「あれは・・・まさか！？」

「どうした、鬼三」

「フフン、分かるかな？」

紅の取り出した刀を見て、鬼三の様子が変わった。

「聖よ、まずいことになつたぞ」「なにがだ？」

「あの小僧が持つてゐる刀。あれは伝説の名刀【天叢雲剣】（あめのむらいくもつるぎ）じゃ……」

「天叢雲剣だとつ……！」

「ピンポーン、さすが刀さんだね」

紅は相変わらず一口二口している。

鬼三は静かに語り始めた。

【天叢雲剣】……、三種の神器の一つで草薙剣・都牟刈の大刀・八重垣剣とも称される

スサノオ（須佐之男命）が出雲国で倒したヤマタノオロチ（八岐大蛇、八俣遠呂智）の尾から出でた太刀で、天叢雲という名前は、ヤマタノオロチの頭上に常に叢雲が掛かっていたためとしている。その破壊力は神をも碎く威力と称され、後に出てくる【正宗】【菊一文字則宗】、更には聖剣工クスカリバーをも凌ぐと言われる伝説の名刀だ

「そんなバカな、どうしてあんな刀をコイツが……」

「まあいろいろあつてね。廻り廻つて僕が手にしているわけさ。どう？僕と戦つてみない？交えるだけで良いから」

「どうする？鬼三」

「良く考えて行動する事だ。あいつは殺さないと言つていた。ここでヤツの機嫌を損ねるのは賢いやり方ではない」

「やるしかないのか……」

鮫島 聖は正直怯えていた。相手が悪すぎる。だがしかし、その一方で刀を持つ者として「戦つてみたい」と言つ
武士の信念のようなものが芽生えているのも事実だった。
天叢雲剣である以上、相手にとつて不足は無い。

「そうだ、お兄さんたちつて茨木童子のこと探しているんでしょ？」

「そ、そんなことまで知つてゐるのか！？」

「まあね。僕、茨木童子に関する情報ちょっとだけ知つてゐるんだけ

どな～例えばどの辺にいるとかあ～」

「お前とやり合えば教えてくれる・・・・と言つわけか」

「い」名答。お兄さん頭良いね

「良いだろ？ 我が名刀【鬼三】の破壊力、とくと味わうが良い」

「フフン、そうこなくつちやね」

鮫島 聖は妖魔刀・鬼三を構え、紅は天叢雲剣を構えた。

「いざ、尋常に・・・」

「勝負！？」

それはまさに一瞬だつた。互いの刀がわずかな衝撃と共に交じり合い、中央で火花を散らす。

二人の姿は一直線上に平行移動し、やがて止まつた。

「うへへ、さすが鬼三。こりや痛いや」

紅の右手、手の甲がバツサリと裂け、血が流れていた。だがしかし、負傷したのは紅だけではない。

「天叢雲剣・・・凄まじい破壊力・・・だ・・・」

致命傷には至らなかつたが、鮫島 聖の左脇腹に細長い亀裂が入り、血が流れた。

両者痛み分けである。

「ありがとう、いやあ～斬られるのつて痛いよね。でも楽しかつた」「楽しいとは言えないが、正直ここまで威力とは思わなかつた」

鮫島 聖の額から流れる汗は止まらない。

「そうそう、茨木童子のことだけ、僕の知つている情報によると茨木童子は魔界の鍋蓋と言う場所に良く現れるつて話だよ」

「魔界の鍋蓋？」

「そう。文字通り魔界の蓋の部分。蓋の下は地獄。ここ魔界の最北端にある魔界と地獄を繋ぐ境界地の事さ」

「魔界と地獄を繋ぐ境界地・・・そこに茨木童子が・・・」

「まああくまで情報だから正確さには欠けるけどね。んじゃ、ありがとう。また今度遊んでね」

そう言いつと紅は片手を振つて去つて行つた。

魔界と地獄を繋ぐ境界地、茨木童子、そして矢吹 紅・・・・。

宿敵が増えそうな予感に駆られながらも、鮫島 聖は魔界の鍋蓋へと向かつた・・・。

END

昨日の深夜から降り続いている雨が止む気配は無かった。所々に出来た水溜りに雨が水溜りを作つて群れているのを見ると、魔矢の身体は唸りをあげるように痛み出した。

「こうも雨が続くと疼くな」

左手で右肩を擦りながら、そこに体温が通つていない事を確認する。今や金属で出来た魔矢の右腕は雨に弱い。いくら錆びない特殊な金属を使つているとは言え、雨の口は古傷が痛むのだ。

目的の店に辿り着くと、魔矢は店のドアを開け中に入つた。

「いらっしゃい。あら？ 傘持つてなかつたの？」

「ああ。そのうち止むだろうと思つてね」

「昨日の深夜から降り続いているのに、いつか止むだらうて？」

「変かな？」

「そんなこと無いけど、これ使って」

そう言つと店のマスターと思われる女は魔矢にバスタオルを投げ渡した。

「すまんな」

魔矢は受け取つたタオルで身体を拭つた。おかげで水分は拭い取る事ができた。だが血の臭いだけは拭えるものではない。

「また殺つたのね」

女は魔矢を見ずに言つた。

「これが仕事だからな」

「ウルと紅は元気？ 相変わらず一ノ口しながら殺つてるんだろうけど」

「紅はそんな感じだが、ウルはそうでもないさ。ヤツは無愛想で有名だからな」

「座つて。いつものヤツで良い？」

「ああ」

魔矢はそう言うとカウンターの席に腰を降ろした。

女の名前は「由佳」ここ魔界でバーを経営する数少ない女だ。

魔界には女の殺人鬼も数名存在するが、由佳は殺人鬼ではなく、一般人である。

だが由佳は決して正常な人間とも言えない。

「あんな光景」を目の当たりにして平然としていた女だ。やはりどこか狂っているのだろう。

懐かしさが漂う中、魔矢は由佳と出会った日の事を思い出した。

それは今から9年前、まだ魔矢が魔界で最上級レベルだった頃に由佳と出会った。

当時、まだウルと親密な関係ではなかつた魔矢は「神殺し」の異名を取るウルと殺り合つた。

無論、神殺しの肩書きは尋常ではなく、明らかに魔矢は圧されていた。

ほとんどダメージを与える事さえ出来ず、どうにか攻撃だけを防いでたのだが、それでも殺されるのは時間の問題だつた。

魔矢は自分が殺られるとは思わなかつた。不思議な感触だがウルは自分を殺さないだろうという確証を感じ取つていたのだ。

だがその戦いの最中、ウルではない別の殺人鬼たちが魔矢を狙い始めていたのだ。

殺人鬼たちはウルと戦つた事で弱つた魔矢を殺す計画を密かに練つていたようだ。

魔矢が次の攻撃に備え、裏路地に差し掛かつたとき、無数の殺人鬼たちが魔矢の前に現れ襲い掛かつた。

余計なダメージを恐れた魔矢は一気に勝負を決めるつもりだつた。金属と化した魔矢の右腕から様々な武器が火を噴いた瞬間、路地から由佳が現れたのだ。

「危ない！！」

そう思つたときには既に遅かつた。

殺人鬼へと向けて放つた武器の一つが由佳の腹部に命中、己の血と殺人鬼たちは全員死亡。だが由佳だけはまだ息が合った。

魔矢は由佳に駆け寄り、とりえずの応急処置を施した。

「刺されると痛いのね」

全身血塗れになりながらも、由佳は笑いながらそう答えた。そんな光景を見ていたウルは魔矢にこう言った。

「殺人鬼が人を助ける・・・。奇妙な事があるもんだな」

ウルも何かしら感じるものがあつたのだろう。それだけ言い残し去つて行つた。

由佳の部屋で魔矢は看病を続けた。元々魔矢は関係の無い人間を巻き込んだり、無益な殺生を好むような男ではない。

何の罪もない由佳に攻撃を与えてしまつた事に深い罪悪感を感じていた。

だが眠りから覚めた由佳は、魔矢の罪悪感とはかけ離れた事を口にしたのだ。

「刺されたときの痛みがわかつて良かつたわ」

その日以来、由佳と魔矢はどうやらとも無く理解し合い、その関係は今まで続いている。

「貴方のような人間がどうして魔界に？」

いつぞやそんなことを聞かれたのを覚えている。

「それにその右腕、普通じゃないよね」

その質問に魔矢はこう答えた。

「こう見ても家族がいたんだ。妻と子供。それはどこにでも有りそうな家庭だつたけど、幸せだつた。

だけど警視総監と言う仕事上、恨まれる事もあつてね。たまたま俺が関わつた事件の犯人に強い恨みを買ったのさ」

「それだけで魔界へ・・・つてわけじゃないんでしょ？」

「殺されたのさ」

「殺された？」

「ああ、その犯人に家族をね」

「・・・・・」

「俺は警視総監と言う職務に就きながら家族を守れなかつた。家に駆けつけたときには既に遅かつた。

その後どうにかして犯人を捕まえたが、許せなくてね。警視総監でありながらヤツを射殺した。

この腕はその償いつてやつさ。魔界に入る前、知り合いの精密士に腕を改造させた」

そう言うと魔矢は右腕を由佳に見せた。

魔矢の右肩は付け根から全て剥ぎ取られており、無数の武器が隠せりわば「倉庫」のようなものだつた。

その金属は特殊なオリハルコンと言う金属で出来ており、自らの意志で動かす事が可能だつた。

「オリハルコン・オロチ、それがコイツの名前だ」

オロチには様々な銃器がセットされている。小型の自動小銃からシヨットガン。マグナム、小型バズーカ。ミサイル、ナイフ、鎌、斧、鉈・・・ありとあらゆる武器が納まつてゐる。

「貴方が鬼眼きがんと呼ばれる由縁が分かつたわ。銃の腕前は魔界一だものね」

どんなに遠く離れた場所からも明確に標的を射抜く眼。それはまさに鬼さえも射抜く眼と呼ばれ

殺人鬼たちの間で、魔矢は「鬼眼の魔矢」と呼ばれ恐れられている。

「はい、これ

我に返つた魔矢の前にグラスに入ったマティニーが置かれた。由佳が微笑ながらこつちを見ていた。

「ありがとう」

「そう言えばあの話知つてる?」

「あの話？それってパイパーと鬼武の事かい？」

「いえ、違うわ」

魔矢はウルと紅、そして由佳にはパイパーと鬼武の話をしている。そのため彼女がそれを知っていてもおかしくない。

「蘇つたらしい……そんな噂を聞いたんだけど」

「蘇つた……まさか！？？」

魔矢の額から冷たい汗が流れ落ちた。

「蘇つた」この一言で魔矢には一つ心当たりが合つた。もはや一度と思い出したくない黒い過去である。

しかしその黒い過去は魔矢だけに留まらない。それはウルや紅にも、いや魔界全体にも同様の事が言えるだろう。

この話を聞いたらさすがのウルも表情を変えるだらつ……。

「バカなつ！ ヤツが蘇つたと言つのか」

「あくまで噂よ。姿をみた連中はまだ誰もいないわ

「有り得ない……あの時確かに抹殺したはずだ。調べる必要が有りそうだ」

「大丈夫よ、きつと。噂だもの」

「君も知つているだろ？ ヤツを抹殺するのに俺たちがどれほど苦労したか。

俺と紅は全治半年の半ば半殺し状態。あのウルですら重症を負わされた相手だ。いくら噂と言つても鵜呑みに出来ん」

そう言うと魔矢はマティニーを一気に飲み干し、店を出た。

「何処行くの！？」

「ヤツの事、調べてみる。ウルと紅にはまだ言つなよ。何か分かつたら俺から話す」

降りしきる雨も気にせず、魔矢は飛び出して行つた。

「もし、万が一ヤツが蘇つていたとしたら、魔界は……」

魔矢の脳裏に浮かんだ「ヤツ」の姿。

その姿は魔界全土を覆い尽くすかの「」とも勢いで大きくなつた
つた・・・。

END

6 ジ 新たな刺客、聖魔剣士

都内某所にある関東地方最大の指定暴力団「山村組」の本拠地では、朝からずつと銃声と悲鳴が鳴り響いていた。

「ぎやああああっ！！」

「なんなんだよ、コイツはっ！…」

「うぎやああっ！…」

組員たちは自分たちに襲い掛かる男に発砲を続けた。だが銃弾は尽く外れ、一発も当てる事ができなかつた。

それだけならまだ良かつた。当たらないだけで済むのなら死ぬ事はないのだから。

その男は発砲した瞬間に相手に懷に飛び込み、持つていた刀のよつな剣で斬り捌いて行く。

その度に悲痛なまでの悲鳴と断末魔が上がり、切り刻まれた部分が切斷され鮮血が飛び散つた。

「なんや、こんなもんかいな山村組つちゅうのは」

男は慣れた手つきで剣を振り下ろし、組員最後の一人となつた男をバラバラに切り裂いた。

「ひいっ！」

「みいけた！組長はんやな？」

「や、やめろ、来るんじやない！…」

「来るな言われても無理やな。ワイはあんさんを殺しに来たんや」「来るな！…」

組長は男目掛けて発砲した。しかし弾丸が彼に当たる事はなかつた。

「山村組もこんなもんかいな。けつたいな名前の割にはじつつ弱いわ」

「ぐはあっ！」

男は組長の首を掴み、そのまま持ち上げた。巨漢の組長を軽々と持ち上げて居る。だがその手に力を込める事はしなかつた。

組長は自分を持ち上げる男を見た。

全身黒い服を纏つた金髪の男。身長は一八〇センチくらいはあるだろつか、田鼻立ちの整つた顔をしている。

顔立ちから察するに年齢は20代中頃だね。まさかこんな幼い顔をした男に血の組を落とされたとは想像もしていなかつた。

男の後ろには無惨にも惨殺された有に200を超える組員のバラバラ死体がそこら中に転がつてゐる。

組長は思わず息を飲んだ。数秒後には自分も同じ姿になるのだから。

「お、お前は一体、誰なんだ・・・・」

「ワイか? これから死ぬヤツに名乗つても意味あらへんと思つが、まあええ。教えたるわ。

「ワイの名前は焰 羅刹ちいとくらい聞いたことあるやN?」

「羅刹! - 羅刹だとつ! - ま、まさか、関西地区最強の暴力団「野山組」を一夜にして壊滅させたあの・・・・」

「ハハハ! やつぱ知つとるな。そつその羅刹や」

「ど、どうしてあんたがこんな事を・・・・」

「悪靈退治や。お前らみたいなじつ悪い連中を始末するのがワイの仕事や。警察なんて当てに出来へん。

あの連中はしょっぴいて満足しているらしげ、ワイはそれじゃあかんねん。殺さな氣が済まんのや」

関西地方で最強と謳われていた野山組の壊滅は事実上、暴力団の消滅を意味してゐる。

羅刹は現場に和紙に「羅刹」と書いた紙を残して去つてゐる事が知られており、警察でも羅刹の行方を捜しているのだ。

「これで関西と関東を制圧したわけや。ワイに適う者なんておらへん。せやからワイが支配者になるんや」

「あ、甘いな・・・・」

「なんやとつ! - 」

「お、俺はお前よりも数倍強い連中がウヨウヨしてる場所を知つてい

るや」

「ほほほ、ワイより強いやつが「」の世にゐるやかいな

「いる・・・確実に・・・」

「んで、そこは何処やねん?」

「ま、魔界だ・・・」

「魔界やとつ!アホか!ワイは死んでないで

「」の裏社会の更に裏側、そしてその最深部に魔界と呼ばれる邪悪な世界がある」

「嘘やない・・・みたいやな」

羅刹は組長の目が笑つていなことを瞬時に悟つた。むしろ魔界と言つ言葉に恐怖している感もある。

「た、確かにお前は強いだろ!。だがそれはあくまで「」の裏社会でに過ぎん。魔界に行つたらお前など小物に過ぎんわ!..」

「ほほほ、「」つ興味あるな。んで?誰がワイより強いつて?」

「神殺しのウル・・・・」

「神殺し・・?・・・」

「いくらお前が強くてもウルには勝てん。ウルは魔界の頂点に君臨する邪悪なる神だ」

「そりやええわ。神殺しのウルか。ええねええね、そういう話、めつちゃ燃えるわ!..」

「バカなヤツだ、行つてそして殺されて来い!お前など適う相手ではない・・・があああああつ!..」

羅刹は持つていた剣を組長に刺した。

「余計な事は言わんでええねん。しかしええこと聞いたで、魔界か。へえ~」

「魔界は・・・・裏社会とは比べ物にならん極悪さ・・・か、覚悟するんだな」

「ケケケ!!神殺しのウルか。んじゃ、そのウルを殺ればワイが支配者や!..」

「ぐがああああつ!..」

「さて、そろそろ殺しにも飽きたさかい。死んでもらうで
羅刹はそういうと持つていった剣を持ち上げた。

「冥土の土産に教えてやるわ。この剣は聖魔刀と言つてな、西洋の
聖なる剣エクスカリバーと

日本の魔剣、草薙の剣の両方を併せ持つ聖なる魔剣や。お前も他の
連中と同じ姿になつてもらうで！！」

羅刹は聖魔刀を振り上げ、組長の口に刺し込み、そのまま天高く押
し上げた。

「ぐがががああああつ！」

そして次の瞬間、組長の首が同体から離れた。

「人呼んで聖魔剣士。ワイに勝てる人間などこの世におらへんのや
山村組の本拠地から銃声と悲鳴が止んだ。

「魔界か・・・ケケケ・・・神殺しのウル。ワイがその首取つた
る！！」

この日、都内某所、山村組本拠地で、組長を含めた組員、合計20
1人の惨殺死体が発見された。

どの死体のバラバラに切断されており、警察当局では身元判明まで
少なくとも半年は掛かる見込みである事を発表した。

尚、殺害現場の一角には白い和紙に「羅刹」と書かれた紙が見つか
つた事から

数日前に起こつた関西地区の指定暴力団組員惨殺事件の犯人と同一
人物である可能性が極めて高いと判明した。

しかし、関西地区で犠牲となつた178名と、今回の犠牲者201
人、合計379人を

たつた一人の人間が殺したという前例は無く、ギネスブックに名を
連ねる世界史上始まつて以来の大残虐と任命された。

聖魔剣士 羅刹・・・新たな敵が今、魔界に降り立つ。

E
N
D

7 → 全てを無へ

魔界最南端、忘れられた孤島「煉獄」

魔界の中央部から南へ離れる事およそ7800km。

「血の池地獄」と呼ばれる小さな池を渡り、「絶海」と言つ巨大な大海原の最果てで「煉獄」は静かに浮かんでいる。

島の面積は東京23区ほどの広さを誇り、豊富な自然に恵まれている。

だが文字通り島であり、魔界の都市部から離れている事も手伝つて、この島に生息する殺人鬼は誰一人いない。

それどころか生物の類は一切存在しないのだ。

それには大きな理由があった。

この島の北部にそびえたつ「煉獄山」は兼ねてより火山活動が活発な山脈で、常にマグマが島全土に流れている状況である。

高熱のマグマによって溶かされた土地には塵一つ残らず、全て焼き尽くされてしまい

後に残るのは溶岩石くらいなのだ。動物や小鳥などが必要とする虫なども誕生しない。

水は全て海水のため、存在する生物といえばバクテリアやプランクトンなどの微生物のみだ。

ましてや人間が生きられる環境ではない。

そんな静かで忘れられた島「煉獄」で、ある変化が起こっていた。

この島に生物が生きられない理由はもう一つある。

この煉獄は島の端から端まで「封印布」と呼ばれる布で覆われている。

それはまるで何かを封印した後のような形跡があり、それに恐れをなして人が住むことを拒絶しているのである。

その封印布は7年前までは無かった。

そつ、「あの出来事」は7年前に起こったのだ。

そしてこの煉獄には「あれ」が封印されている。

煉獄山火口の奥深くで「それ」は確実に再生を始めていた。摄氏數千度を誇るマグマの中で、身を寄せ合つように蘇生を繰り返している。

散りばめられた肉片を探すように、この世に存在する全ての憎しみが集結し始めている。

そしてその憎しみこそが「それ」を形成する最も重要な要素だった。憎しみ、怒氣、殺意、腐敗・・・凄まじいまでの負の感情が流れるマグマの中を傍若無人に行き来しているのが分かる。

やがてその負の感情は人間の形となり、醜い醜態を作り上げていく。基盤となる同体が形成されると、それなりの思考回路が芽生え、考えるという行為が可能となる。

「それ」の脳裏に浮かんだのは真っ暗な闇と、自分を封じ込めた三人の男の姿だった。

その中でも特に長身で無表情の男だけは鮮明に記憶している。

「それ」はこの男によつてこんな場所に封印されたのだ。

その男は「神殺し」と言つた。そう、「神殺しのウル」である。

その存在そのものが憎しみだけである「それ」にとって、まさか自分が敗北する姿など想像もしていなかつた。

しかし現に「それ」はこの男たちの手によつて封じられたのだ。そう思うと元からある憎しみが更に加速する感触を覚え、興奮が抑えられない。

そして「それ」は自らの意志を持ち始め、やがて名前を考える。魔界で壮絶な死を遂げた人々の憎しみが集結した姿。それが彼の姿であつた。

そのため彼の姿はとても人間とは思えないほど醜悪だ。

苦痛に歪んだ無数の顔、夥しい数の眼球と口。腐敗の進んだ肉体に

歪な手足。

そつ、それは魔界でウルたちに殺された何千と言ひ殺人鬼たちの集合体だった。

彼は煮えたぎるマグマの中から起き上がった。

考える思考も、正義も悪も、全て感じる事のない破壊の神。

ただただ自分たちを死に追いやったウルたちに復讐を誓う悪魔の姿。

燃え盛るマグマの炎が、彼に再び血と殺戮の衝動を宿した。

「我が名はゲノム・・・全てを無に返し者・・・」

END

8 ジ血を吸う聖魔刀。刀に魅せられた人斬りの素顔

永久の無「ゲノム」がこの世に蘇つた頃、一人の男が魔界に到着していた。

男は腰に聖魔刀と呼ばれる邪悪な刀を携えており、黒い服装を装っている。

黒いジャケットの背中には「聖魔」と書かれた刺繡が施されており、通常の人間でないことは明らかだつた。

「まったく、情報屋から魔界への道を書かせたはええけど、こんな『ごつ遠い』とは思わんかったで」

男の名は「羅刹」つい今しがた魔界へ辿り着いた新参者である。

「それにしても物騒な世界やな、死体がゴロゴロあるやないか」

羅刹の歩いている道には殺人鬼によつて殺された人間の死体が山のようにならうに転がつっていた。

無論、それが蘇つた「ゲノム」の仕業である事は知る善しも無いが。
・・・

「あかん、腹減り過ぎて死にそうやわ・・・」

羅刹が向かつている先は魔界の中心部。ウルを始め、紅や魔矢、鬼武やパイフー、鮫島たちが生息する地区である。

勿論、当の羅刹は右も左も分からぬ状況なのだが、殺人鬼が殺人鬼を呼ぶのだろう。

羅刹の足は自然と中心部へ向かつているのである。

それでも羅刹は自らに忍び寄る狂気には気付いていた。先ほどから誰かに付けられてゐる気配を感じている。

それも一人や一人ではない。数にすれば数十単位の人数になるだろう。

「ええ加減出てきたらどうや? おるのは分かつてゐるで」

羅刹がそう言うと、有に30を越す殺人鬼たちが至る所から現れた。

「なんや偉い歓迎ぶりやな。そないワイが来たの嬉しいんか?」

「馬鹿を言つたな！お前、誰の許可を得て魔界に来た！？」

「入るのに許可なんて要るんか？面倒な世界やな」ワイのスマイルで十分やろ」

そう言つと羅刹は冗談交じりでニッコリと微笑んだ。

「この中心部へ続く通称「死神通り」は我らが主、魔矢様が仕切っているエリアだ。勝手に通る事は許さん」

「魔矢？ああ、そう言えば情報屋から聞いた名前やなあかん、ど忘れしてもうた」

「魔矢様はここ魔界でN.O.の座に着くお方だ」

「ああ、そんなんゆうてたな。よう知らんけど」

「貴様！！」

一人の殺人鬼がそう吠えると、他の殺人鬼たちは持つていた武器を取り出し、身構えた。

「ほほう、ワイと遊ぼう言つんか、ええよ。ちゃんと手加減したるから」

「小僧・・・・かかれ！！」

一番最初に飛び掛つたのは10人。どの殺人鬼も羅刹の上空に舞い上がり、上から攻撃を仕掛けようと飛び上がる。

しかし、聖魔刀を操る羅刹に取つて、上空は自らが支配する絶対的な領域である。

「聖魔刀・・・・暫！？」

「ぐはああつ！！」

「ぎやああつ！！」

羅刹が刀を振り上げた瞬間、刃が奇妙に変化し、上空にいた殺人鬼10人に斬りかかった。わずか一瞬で10名の首が宙を舞つた。

「い、今のは・・・・」

「聖魔刀は便利な刀や。地上からの攻撃、上空からの攻撃、真正面、背後、斜め上、下。

その角度によつて自らの意志で変化する頭のええ刀や」

多勢に無勢・・・そんな言葉など当てはまらない状況がそこにあつ

た。

「な、なんなんだ、お前は・・・」

「ケケケ、神殺しのウル言づやつがあるんやろ？その首取りに来たんや」

「バ、バ力な！–ウ、ウル様の首を・・・そんなんこと出来るわけが・・・」

「ああもう面倒や、死ね」

「えつ！」

「うぎやあああああああああああつ！–！」

目の前で閃光が走った瞬間、聖魔刀はまたもやその姿を変え、生き残っていた20人に襲い掛かった。

刀は津波のようにうねり、殺人鬼たちの身体を歪曲しながら切断して行つた。

30人の殺人鬼たちを殺すのに要した時間はわずか40秒だつた。

「あかん！腹減つてると手元が鈍るわ！こりやはよ何か食べんとやバイで」

殺した殺人鬼たちなど気にする様子も無く、羅刹はひたすら歩き、一軒のバーらしき店を見つけた。

店の前には「本日のおすすめメニュー 北京ダック」と書かれている。
「あつたあつた！良さげな店やんか！–大人な雰囲気がええね～インテリジョンスなワイにピッタリやん！」

羅刹、実にユニークな男である。

「邪魔するでえ～！」

「いらつしやいませ」

中から若い女の声が響いた。カウンターの裏に日本風な美女が立つており、羅刹を迎えた。

「うひやああつ！めつちや好みや！–可愛ええやんか！なあなあ、名前なんて言うん？」

「えつ！あ、あのう・・・由佳と言いますけど」

「由佳ちゃん！–ええ名前やんか！」

羅刹はそう言つと身を乗り出し、由佳の手を握つた。

「ええな～ええな～若い子は。お肌ツルツルや～」

「あ、あの～、困るんですけど」（＾＾・）

「由佳ちやん、何歳？二十歳くらい？今度ワイドトークセミヘン？

絶対損はさせへんよ」

空腹は一体どこへ行つたや～り・・・・。

「え、えつと・・・・歳は21歳で、そのデートはちょっと・・・・」

「ええ～なんでやねん～彼氏あるん？」

「まだそういう関係じゃないんですけど、そうななりそうな人が居るには・・・・」

「どこおるー？昼間つから彼女に寂しい思いをす甲斐性なしの男はどこにおるーー！」

「ええつと、実は貴方の後ろに・・・・」

「えつ？なんやで」

羅刹が後ろを振り返つたその時だつた。

「おわつ！――」

突然目の前で巨大な光が走つた。それが銃弾である事はすぐに理解できた。

「甲斐性なしで悪かつたな」

そこには魔矢が立つていた。

「なにすんねん！ワレ！死ぬとこやつたぞ！――」

「当たり前だ。殺す氣で撃つたんだからな」

「なんやと、この金属男！――」

羅刹は魔矢のオリハルコン・オロチを見てそつ言つた。

「金属男・・・・？・・・・フフフ・・・・」

「何笑つてんだ、由佳」

「金属男つて、なんか表現がおかしくつて」

「へへん、笑つてくれたで。ワイの勝ちやな」

そういう問題ではないと思うのだが・・・・。

「死神通りで俺の手下を殺つたのはお前だな、焰 羅刹」

「コイツは自分を知つてゐる。しかし羅刹はその事には驚かなかつた。何故ならこの男こそが魔界N.O.-3の魔矢だと分かつたからである。

「へえ～ワイの事知つとるんか。お前が魔矢やな？」

「一応な。山村組惨殺事件に関西の野山組殺害事件の犯人は貴様だろ、羅刹」

「エライ詳しいやんけ。お前何者や？」

「これでも警視総監と言つ仕事をしていてな。貴様の起こした事件のせいで、俺の苦労が増えちまた。

ギネスブックに名を連ねる犯罪を犯したのは結構だが、あまり魔界で良い氣になるなよ」

「フン！ワイはN.O.-3なんて興味無いんや。神殺しのウルさえ殺されればそれでええねん」

「貴様がウルを？・・・・身の程を知らんようだな」「確かめてみるか？お前のその身体で」

「後悔するぞ、鬼眼の魔矢を敵に回したこととな」

「上等や…！」

「あのう、やるなら外でやつてね。店壊されちゃ商売上がつたりだから」

聖魔剣士 v/s 鬼眼

いよいよその戦に灯がともる・・・・。

END

一仕事終えたウルは自分たちのアジトのあるビルの前に立つとそのまましばらくな立ち尽くし、周囲を眺めた。

路肩に転がっている死体の数が日に日に増えているような気がする。もつとも魔界でノ・ノ・ノの実力を誇り、同じ殺人鬼たちから「神殺し」と恐れられるほどの人物である。

別に死体が幾つ転がつていても動じるわけでもないのだが最近、魔界の様子が変わってきてるよう思える。

「また始まるのか……」

ウルは誰にとも無くそう呟くと、エレベーターに乗り込んだ。ウルには分かっていた。魔界の空気が変化している事も去ることながら

その根源が誰にあるのか、その詳細まで分かっている。

魔矢は自分や紅に隠しているようだが、「あれ」が蘇った事は、他の誰よりもウルが分かっている。

「あれ」とは……即ち「ゲノム」の事である。

ウルにゲノムの存在が分からぬはずがない。何故ならゲノムの基盤となつた人物はウルの母親なのだ。

そしてその母親を手に掛けたのは、他の誰でもないウル自身。降りて行くエレベーターの中で、ウルは過去の事を思い出した。

ウルが魔界でノ・ノ・ノの実力を誇るのには分けがあった。

それは人並み外れた強靭な肉体と強さ以外にも理由があり、その理由こそが母親であるゲノムを抹殺した理由もある。

何も最初からウルが狂人のような人間だったわけではない。ウルも他の人間と同じように

母親の母体で生命を培い、産まれて来た極普通の人間だったのだ。

だがそれはあくまで「普通に産まれていれば」の話である。

ウルの母親、つまりゲノムの家庭環境は最悪だつた。

ウルは決して望まれて産まれた子ではなかつた。親の勝手な事情によつて仕方なく産まれた生命だつたのだ。

そのため母親と父親、果てには親族たちの激しい贊否両論が日々の生活中で繰り返され

母親のゲノムは常日頃から親族や夫に対し、激しい憎しみを抱いていた。

「いつか後悔させてやる」「殺してやろうか」

そんな事を思うのはもはや日常茶飯事だつたのだ。

母親のゲノムは「不潔」「淫乱」「売春婦」と罵られ、いつしか自分の居場所を見失つた。

そして積もりに積もつた不平不満は、夫殺害と言う最悪の行為によつて終止符を打つたのである。

その時の光景を、ウルは母親の母体の中で見ていたのだ。

母親がナイフで夫の首を切断し、道端に投げ捨てた光景を・・・。

仕方なくウルを出産する。その時の母親はそう思つていたのだろう。ウルの方も母体の中で散々母親の憎しみを味わい、もはや正常な男児ではなかつた。

ウルが産まれる際、上げたのは産声ではなく悲鳴だつたのだ。

「スベテヲハカイスル・・・・」と言う悲痛なまでの断末魔。

出産直後からウルは既に邪悪な存在だつたのだ。

母親から発せられた憎しみを一身に受けた小さな殺人鬼。それがウルである。

幼少時から既に人を殺める術を覚えた。

成人になる頃には、自らに害を加えんとする存在を全て抹殺していだ。

そしてウルが魔界に入る直前、母親であるゲノムをこの手に掛けた。

のだ。

「育ててもらつた恩を忘れたのか！！」母親が絶命する際、そう言い放つた。

「誰も育ててくれなど頼んでない」そう言い切つたウルは母親の肉体をバラバラに切断したのだった。

「これで済むと思つなよ、親不孝者・・・いつか、いつかお前を殺してやるからな」

ゲノムはそう言い残し、絶命した・・・はずだった。

それから数年が過ぎて、魔界でゲノムが蘇つた。それが今から7年前の事である。

どういうわけかゲノムはウルたちに殺された魔界の殺人鬼たちの死念をかき集め

世にも恐ろしい姿となつて蘇つたのである。

人間とは思えない醜い姿。身体中にいくつも顔があり、手があり足がある。

有に100を超える殺害された殺人鬼たちの眼球と口。

そしてそれに見合つた数の脳味噌と心臓。

蘇つたゲノムのターゲットはウルであった。

ウルは仲間の紅、魔矢とともにゲノムの抹殺に打つて出た。

しかしゲノムはウルたちが想像していた以上に強靭な強さを誇り、3人は大怪我を負つた。

1週間にも及ぶ激闘の末、ようやくゲノムを魔界最南端、忘れられた孤島「煉獄」に封印。

この激闘によつて紅と魔矢は意識不明の重体にまで追い詰められ神殺しと称されたウルでさえ、全治半年と言う重症を負つた。それだけゲノムの力は強大であったということだ。

あの激闘から7年が過ぎた今、ゲノムが再びこの魔界に蘇りつつある。

最近魔界で起こっている不吉な現象は、ゲノム復活を意味する何よりもの提示である。

あれから7年の歳月が過ぎ、かき集める殺人鬼たちの死念は前回よりも更に協力であることが予想される。

あの時はどうにか犠牲者を出さずに済んだ。だが今までそう上手く行くとは限らない。

最近魔界に降り立った鬼武、パイパーの両名に加え、まだ明確な素性が掴めない鮫島聖の存在。そして焰羅刹。

この3名に自分たちを加え今現在、合計7人の強者が揃っている事になる。

ウルは誰とも組むつもりは毛頭ないが、計画的な魔矢の中にはこの7名が徒党を組むと言うプランが既に存在するだらう。でなければゲノムは倒せない・・・そう思っているからこそ、魔矢はゲノムが蘇った事をウルに直接伝えないのだ。

言つたところでウルがそのプランに賛同するとは考えられない。

ウルには魔矢の計画などお見通しだった。

だがしかし、魔矢の着眼点は適格だ。更に強さを増したことを考えると

前回のようにウル、紅、魔矢の3人のみで食い止められる可能性は極めて低いのだ。

ゲノムはそんな甘い相手ではない。こちらの想像を遥かに超える強さを誇る。

それと同時に、犠牲者が出ないと言う保証もないのだ。

今は一人でも多くの人手がいる。しかも強者と言う絶対的な条件を満たしている人間の手が。

今になつてどうして魔矢が鬼武、パイパーの一人に神経を尖らせていたのか、その理由が分かる。

恐らく魔矢は先のことを見越してこの一人に目を付けたのだろう。
いずれゲノムが蘇る事を想定して、あえてこの二人を歓迎した・・・
。 そう考えるのが妥当だろう。

そして素性の掴めない鮫島 聖に紅が付いた事実も、きっと何かし
らの意図があつたに違いない。

焰 羅刹に関しても同じ事が言える。

「 まつたくどいともこいつも、勝手な連中ばかりだな」

ウルは戻った部屋の窓から外を眺めた。

死体こそごろごろ転がっているが、ウルはこの魔界が好きだった。
自分の居るべき場所であり、帰る場所もある。

そんな魔界を、ゲノムの良いようにさせるわけには行かない。
何故なら、邪悪なる神は一人で十分なのだから・・・。

「 そろそろ動き出す時期か」

「 神殺しのウル」 満を持していよいよ始動である。

END

モニターの前で凄惨な殺戮シーンを見ていた魔矢とウルは、その映像を見て少々驚いた。

何故ならモニターにはあつさりとやられたミスターＬが映っているからだ。

「まさかここまであつさりやるとはな」

魔矢は予想外と言う表情でそう言った。

実はミスターＬの着ていた服には映像を盗撮できる小型のCCDカメラを付けて置いたのだ。

それによってパイパー、鬼武、そしてＬとの戦いを魔矢とウルはずっと見ていたのだ。

「しかし便利だな、ヴァンパイアと言つのは、再生能力まで持つてるとは想像もしなかつた」

やはり意外そうな顔でウルが言った。

「これで事実上あの一人・・・いやミスターＬをやつたのはパイパーだからな。ヤツが魔界N.O.-5になる」

魔界でN.O.-4の実力に程近い集団が存在するため、パイパーはN.O.-5という事になる。

「白虎のヴァンパイアか、あの攻撃力は確かに驚異だが・・・・・」
「俺には届かん・・・そう言いたいんだろ?」

魔矢がにやけてそう言つた。

「別にそうとは言つてないぜ」

「顔に書いてあるさ」

「そうかな」

その時、アジトの扉が開いた

「たつだいま～」

「紅」

入ってきたのは紅だつた。鮫島と傷み分けた手には包帯が巻かれて

いる。

「どうだつた、鮫島とか言う男の方は？」「魔矢が静かに聞いた。

「ううん、想像以上に強かつたね。まあ僕も本気じゃなかつたけど、おの兄さんも本気じゃなかつたからね。

両方ともガチで勝負したらどうなるだろ？」「ワクワクするな」「傷追つて置きながらワクワクか、お前らしいな」

ウルがそう言うと紅はニツ「リと微笑んだ。

「そつちはどうだつたの？ミスター」は？さすがに相手にあの一人も無傷じゃ済まなかつたでしょ。

死んじやつた？それとも重傷？」

「意外なほどあつさりカタが付いた。勝敗はあの一人に上がつた」「ほへえ～ホントに！？じやああの一人は魔界NO.5じやん

「いや、今はな

「今・・は？」

珍しくウルが口を開いた。

「最近、また魔界に新しく入ってきたやつがいる。名前は焰羅刹。かなりのツワモノだ」

「ウル、お前知つていたのか」

「ああ、ギネスを更新した大残虐劇だつたらしいからな、それなりに知つている」

「ホムララセツ・・・変な名前」
紅はニコニコと笑つた。

「さて、俺はそろそろ行くぞ」

そう言つとウルは立ち上がつた。

「あれえ～何処行くの？」

「仕事さ。裏社会で暗躍しているブローカーを暗殺してくれと以来があつてな」

「今回の報酬はいくらだ？」

「5千万だ」

「5千万！？うひやあ～ねえねえ今度新しい刀買つて良い？」

紅が哀愁漂う目で哀願する。

「お前この前も買つたばかりだろ」

「良いじゃん、お願ひ！」

「う～ん・・・分かつたよ。無駄遣いだけはするなよ

「わ～い！ありがとう！」

そう言つとウルは「やれやれ」と言つた表情で出て行つた。

「さて紅、俺たちも出かけようか」

「ん？遊びに行くの！？」

紅は子供のような笑顔になつて言つた。

「会いに行くのさ、新たに誕生した魔界N.O.-5にな

「まつたく鬼武のヤツ何やつてやがる」

魔界東部にある雑居ビルの一角。ミスター」との激闘の後、改めて自分たちの住居を探していったバイフーと鬼武はこの雑居ビルの一角にあるアパートに住み着く事となつた。しかし何の整備もされていない、ましてや管理人など居ないボロアパートである。当然ながら建物も古ければ食べ物も無い。そこでバイフーと鬼武は一人で分担して部屋の整備に取り掛かっていた。

バイフーは部屋の整備、そして鬼武は食料の調達に出掛けたのである。

「チツ！それにしても切断した腕の治りが遅いな。いくら再生するとは言え落としたのはまずったかな」

しによつて傷つけられ、切断を余儀なくされたバイフーの腕だが、ヴァンパイア特有の再生能力によつて復元した。

だが当初からあつた腕の感触に戻るにはそれなりの時間が掛かるようで、新たに再生された腕はまだしつくり来なかつた。

「鬼武のヤツビ」まで行つてやがるんだ。クソッ、腹減つたぜ」
今日もパイフーの胸には鎖を食いちぎる大虎の刺青が光つてゐる。
ちょうどパイフーが部屋の整理を終えたときだつた。

「ピンポーン、ピンポーン」

「あん？ なんだ呼び鈴なんて付いてたのか、この部屋」

「ピンポーン、もしもーし、居ますか～」

「あんだよ、まつたく。どこのどいつだ！…」

どうやら誰か来たらしい。呼び鈴が付いている事は知らなかつたが、
明らかにドアの向こうに人が居るようだつた。

「誰だよ！？」

「あ、いたいた。宅配便で～す」

パイフーがめんどくさい口調でそつと、少年のような声が返つて來た。

「バカ言うんじゃねえよ！この魔界に住所なんてあるか！それに俺らはたつた今着たばかりだつつの」

「じゃあ、ピザのお届けで～す」

明らかにバカにしている。

「ナメてんのか！ノヤロー！…」

頭にきたパイフーはドアを開けた。

そこにはまだあどけない表情の少年がいた。

「なんだ、このガキは。俺様になんか用か？」

そうは言いながらもパイフーはあまりにも美しい少年に目を奪われた。言葉にするのも困難なほどの美貌の持ち主である。

「別に用つてわけじやないんだけどさ、挨拶くらいして置いた方が良いと思つてね」

「挨拶？ バカじやねえの。初対面でいきなり挨拶つてか？ 俺たちとは関係ねえだろ」

「それでもないさ」

どうやら居るのは少年だけではなかつたらしい。少年とは別の声が聞こえた。

見るとそこには大人の男が立っていた。

「魔界へようこそ。まさか俺たちを知らないとは言わないだろ？ うな？」

「ああ？ 言つてる事がよく分からねえな」

確かにどこかで聞いたことのある声である。だがそうしても思い出せない。

「じゃあこう言えばきつと思い出すよ。ねえ、魔矢」

「ま、魔矢！ て、てめえ、まさかM・・・・」

「（）名答、会うのは初めてだよな。俺が音羽魔矢だ。こつちは矢吹紅。名前くらいは知つているだろ？」

パイマーの背筋に冷たい汗が流れた。

「バ、バカな・・・な、なんであんたたちがここに・・・・」

そしてパイマーは心で思う

（嘘だろ、なんでこいつらが俺たちの所に来やがるんだ。冗談じゃねえぜ。こんな時に限つて鬼武がいねえ・・）

「ミスター」を撃破するとは、大したもんだ。その後腕は大丈夫なのか？」

「な、なんで知つてんだよ、その事」

「へへへ、実は」の服には盗撮用のCCDカメラが着いていたんだよ。だから一人が戦つているのずっと見てたのさ」

紅が微笑みながら言つた。

「ケツ！ あんたたちに盗撮の趣味があるとは知らなかつたぜ」
（クソ・・・どう考へても不利だぜ。こつちは俺しかいねえ・・せめて鬼武がいれば・・）

「見事な戦いぶりだつたよ。ウルも褒めてたぜ。久しぶりに骨のある連中だつてな」

「余裕じゃねえか、そのウルは居ないようだが」

（鬼武がいれば俺が魔矢を、鬼武が紅を。2対2になるが・・い、いや・・・勝てるかどうかも分からねえか・・）

「ウルは仕事に出てるよ～ん」

「んな」とはびうだつて良じぜ。何の用だ！？殺るつもりなりやつてやんせ！！」

しかしパイパーは内心恐怖している。鬼武が居るのであればまだ違つたが、今は一人である。

おまけに相手は魔界N.O.-3とN.O.-2が揃つてゐる状況だ。いくら屈強のパイパーとは言え勝算は皆無である。

「ずいぶん威勢が良いな。その震えは武者震いか？」

「う、うるせえ！？」

「今日はね、お兄さんたちに伝える事があつて来たんだよ」

「伝える事？」

「そうだ。」を倒した褒美みたいなもんだ。喜べ、お前たちは現在魔界N.O.-5に位置されている

「俺たちがN.O.-5・・・・・」

「ああ、ずつと」がN.O.-5だつたからな。その「」を倒したんだ。今度はお前たちがそのランクだ

「その事を伝えようと思つてね～」

「だが氣をつけろよ。N.O.-10から5までの立ち位置は割りと入りやすいランクだからな。

お前たちが5になつたのは既に魔界中に知れ渡つてゐる。これからは昼夜問わず氣を付けた方が良い

「何に気をつけろつてんだよ」

「つまりお前たちの首には賞金が掛かつてると言つ事だ。この魔界には賞金を狙つたバウンティハンターも存在する。

俺たちのように誰も手が付けられないほどのランクになれば狙われる事もないが

N.O.-10から5までの間は格好の標的だ。出歩くときは注意した方が良いぜ

「N.O.-10から5までの間つていつも流動的なんだ。移り変わりが激しくてさ。

あまり注意を怠るとバウンティハンターに殺されちゃう。バウンティ

イハンターも結構強いんだよね」

バウンティハンターがこの魔界に存在するとは初耳だつた。

「フン！人の心配よりも自分たちの心配した方が良いんじゃないかな？俺たちがいつあんたらに牙を向くか分からぬからな」

ここまで来るとパイフーももはや引っ込みがつかない。

魔界に来る前は「ウルたちには関わらない」と思つていたが、こちらとしてもナメられるわけには行かない。

「ああ、俺たちはいつだつて良いんだぜ。狙つてみるか？魔界NO.4の座。そして3・2・1を」

「くつ！・・・・」

「こいつ見えても僕たちチョー強いよ。僕たちからしたらしなんて「ノミだからね」

不覚にも」との戦闘中、鬼武を人質に取られてしまった。それは明らかに一人の采配ミスであり迂闊だつたところ。

「ゴミ」と言い切られた相手にパイフーは片腕を切断している。これが魔矢や紅が相手だつたらと考へると

もはや背筋が凍り付くななどと言つ言葉さえ生温い。

しかしパイフーにしろ鬼武にしろまだ強さに關しては発展途上国に過ぎない。

言い換えればこの先いくらでも強くなれるといつことだ。

「それだけ言いに来たんだ、邪魔したな。相棒にもよろしく伝えておいてくれ」

「バイバイ」

締め切つたドアを背中に、パイフーの両肩は上下に揺れ動く。呼吸が乱れていいるのだ。

「魔界」・・・侵入当時は勢いも確かにあつた。しかし実際に来て見ると、やはり想像を絶する世界である。

そこは呼んで字の如く「魔の世界」であつた・・・。

E
N
D

11 ツワモノたちの夢（2）

「なんだか口クな物が無いな」

魔界に一つしかない「コンビニ」にやつて来た鬼武は、陳列されている品物を見て落胆した。

ここ魔界でもコンビニはある。それに金だつてあるし、食べ物もある。

いくら殺人鬼の巣窟とは言え元は普通の人間である。

バケモノでもない限り、普通の人間と同じ食料を口にするのだ。先日パイニーによつて惨殺されたしの持ち物の中に財布があり、擊破した際こつそりと頂いていた。

そのおかげで割りと巨額な金額の金が入り、こつして食料の調達に来たのである。

今頃パイニーは新しい住居で部屋の整理をしている頃だろつ。出来れば魔界初日くらい豪勢なものが食べたいのだが、陳列されている品物はどれも幸薄いものばかりだつた。

「それにしても殺人鬼たちが買い物かごぶら下げて買い物するつてのは滑稽な姿だよな」

鬼武殿、君も人の事は言えないと思うが・・・。

「パイニーはきっと人肉とか血液のジュースとかが良いんだろうけど、売つてるわけないし。

しうがない、トマトジュースで誤魔化すかね」

鬼武は周囲を見ずにドリンクのコーナーへ向かつた。

「どれにしようか・・・つてイテツ！！」

その時、何か硬い物が頭にぶつかつた。

見るとそこにはパイニーに負けじと長身の男が立つており、鬼武と

同じようにドリンクを取ろうとしていた。

「コラ、兄ちゃん！ 危ないでしょ、ボケつとしてんじやねえよ」

「ん？ ああ、すまんすまん」

「まつたく今頭に当たったものはなんだ」

「ああ、ジャケットのコレか。悪いな、俺のジャケットはいろいろ武装しているもんで」

「まつたく、歩く凶器かい！！人の事言えないけど・・・つてちょっと兄ちゃん」

「ん？ なんだ？」

「なんだよ、それ。シリアルばっかじやねえか
見ると男の力ゴにはシリアルばかり・・・いや、シリアルしか入つていなかつた。

「これから仕事だからな。適度に食べて置かんと・・・」

「アホかっ！ だつたらもつと肉食え、肉！！シリアルばっかじや成長しないぞ」

「これ以上成長しても困るんだが」

男はパイフー同様の長身である。

「もつと栄養のあるもん食えよ。つたく長い間男娼なんてやつてるから気になるんだよな、そういうの」

「まあ仕事の前の小事だ。腹八分目がちょうど良い」

「そんなもんかね～」

ふと気になる事があった。どういうわけか他の殺人鬼たちは、この男を見るなり道を開けていくのだ。

その表情には恐怖の色さえ浮かんでおり、人目で怯えているのが分かる。

コンビニの店員ですらこの男の対応にはかなり緊張しているようだけ見えた。

「ありがとうございました」

会計を済ませて外に出ると、そこにはあの男が立っていた。

「今日は相棒はどうした？」

「ああ、あいつなら新居で部屋の整理してるよ」

「ほほう、ヴァンパイアでも掃除はするんだな」

「つたりまだる、意外と綺麗好きなんだぜ、俺たちは」
このとき鬼武は気付かなかつた。どうして相棒がいる事をこの男が
知つてゐるのかを・・・。

そしてその相棒がヴァンパイアである事をどうして知つてゐるのか
を・・・。

「魔界へようこそ。じゃあな」

「えつ、今なんて・・・・・」

男はそれだけ言い残し、去つて行つた。

鬼武はようやく氣付いた。

おかしいではないか、どうしてあの男が相棒の存在を知つてゐるの
か。

ましてやヴァンパイアである事を何故知つてゐる・・・。

黒髪でスポーツ刈り、黒皮のジャケットに長身の身体。ジャケット
の中には無数の凶器・・・。

「ま、まさか・・・・・あいつが・・・・」

鬼武は理解した。何故他の殺人鬼たちが道を開け、その表情に恐怖
が浮かんでいたのか。

あの男が「神殺しのウル」だと氣付いたとき

鬼武の両手から荷物がこぼれ、ボタボタと地面に落ちて行つた。

「俺は・・・殺されてもおかしくない状況だったのか・・・」

鬼武の表情から血の気が失せた。

END

金属音の交じり合ひ音、そして鳴り止まない銃声。地上を駆け回る音は、既に3時間以上も続いている。

「くそつ！」

魔矢はオリハルコン・オロチを休む事なく使い続け、既に疲労はピークに達している。

「ちょこまかと素早いヤツだ」

マシンガン、バズーカ、ライフル、マグナム。もはや有りとあらゆる銃撃を行なつてゐるが決定的なダメージを得るには至つていない。羅刹も無傷ではないが負傷はしてゐる。

だが致命的な攻撃を与えられないと云つ事実は、魔矢にとつて大きな不覚であり予想外の出来事だった。

しかしそれは羅刹に取つても同じである。

自慢の聖魔刀だが、魔矢に決定的なダメージを与える事は出来ていない。

いつも寸でのところで交わされ、そのわずかな隙に魔矢の砲弾が飛んでくる。

無論全てを交わすことは不可能で、羅刹は数発の直撃を受けている。致命傷を避ける形だからまだ動けるが、体力にも限界と言つものがいる。

物陰に隠れて銃弾を補充しながら魔矢は羅刹の動きを田で追つた。

「冗談じゃない、魔界NO.3の俺がこのザマとはな・・・認めたくは無いが、あの羅刹とか云つ男

相当な強さだ。この俺が明らかに圧されてる」

だがその羅刹も魔矢に対しても同じような事を思つてゐた。

「チツ！魔界ノ。・3かい、確かにめちや強いわ。あかんで、このまま持久戦にもつれ込んだら不利や。

せやかで迂闊に飛び込んだらアウトやしな。魔界か、あの組長はんの言つていた事は本当やつた。

ノ。・3でこの鬼神の強さやつたら、ことへはどんだけ強い言つねん」

羅刹は肩の傷を拭いながら魔矢に近づいた。

「よう、金属男。そろそろケリ付けようや

「そうだな、いい加減飽きてきたぜ」

「行くで。この一撃でキメたるさかい」

そう言つと羅刹は信じられない高さまで跳躍し、持っていた聖魔刀を振り上げた。

「冥土の土産に見せたるわ。これが聖魔刀の奥義、形無し夢幻陣！？」

そう叫ぶと羅刹は聖魔刀を自分よりも更に上空へと投げた。

「な、なんだ」

「受けてみいや！！」

魔矢が上空を見上げた瞬間、聖魔刀は無数の光の矢に変化し、隕石のように落卜してきた。

「うわあつ！」

それはまるでメテオのようだつた。無数の夥しい光の矢は魔矢だけを目掛けて落下する。

もはや避け様がなかつた。魔矢は羅刹の形無し夢幻陣の直撃に合い、後方へと吹き飛んだ。

「ぐつ・・・・・」

「ケケケ、どうやワイの奥義の味は。ナメたらあかんで」
ジリジリと羅刹が魔矢に近づく。魔矢の身体からは煙が立ち上つており、その肉体はもはや傷だらけだ。

「これで終いやな。ワイの勝ちや！..！」

「さあ、それはどうかな」

「な、なにつ！ぐはあああつ！！」

魔矢の腕が光つた瞬間、オリハルコン・オロチから無数の刃が飛び出し、羅刹の身体を切り刻んだ。

「な、なんやこれは・・・まるでカミソリや・・・」

「奥義の披露感謝する。これが俺の奥の手、オリハルコン・滅だ」

「ぐうがあああああつ」

オリハルコン・オロチから飛び出した無数の刃は羅刹の身体を持ち上げ、止め処なく切り刻んでいる。

やがてその刃も元に戻ると、羅刹の身体は地面に叩き付けられた。

「ワ、フレエ・・・ふざけた真似しようつて・・・」

「ぐう・・・」

もはや一人とも満身創痍だつた。魔矢も羅刹も血塗れで動く事もままならない。両方が地面に倒れ起き上がる事さえ出来なかつた。

「はい、一人ともそれまで」

「由佳！？」

突然の女の声に魔矢が驚いた。見るとそこには由佳が立つており、やれやれと言つた表情でこちらを見ていた。

「これ以上闘つても意味無いわ。両者痛み分け。引き分けよ」

「あかんで由佳ちゃん。これは男の勝負や。勝敗ははつきり付けんと氣味悪いで」

「死にそうな顔して何が男の勝負よ。意味の無いことはしても意味が無いでしょ」

「せやかでどつちが強いかハツキリせんと・・・」

「五月蠅い！！」

「ヒイイイ！由佳ちゃんが怒つた！！」

「こんな時までユーモアのある男だ。」

「しかし、勝負はまだ付いていない」

魔矢がいち早く立ち上がつた。

「あまり由佳を困らせるもんじやないぞ、魔矢」

ハアと溜息を付いた由佳の隣から一人の男が現れた。

「ウル！？」

「なつ！ウ、ウルやてつ！！」

羅刹は目を見開きウルと呼ばれた男を見つめた。

「魔矢、急用が出来た。急いで来い」

「どうしたんだ」

「ゲノムが出た」

「な、なんだとつ！」

「今紅が様子を伺っている。急いで合流するぞ」

「お前知っていたのか・・・ゲノムが蘇った事を」

「当然だ。お前は何かと策を練っていたようだが、ずいぶん前から知っていたぞ」

「何もかもお見通しつてわけか」

「まあな。行くぞ」

「ああ」

「ちいと待てや、おのれら！？」

「羅刹、貴様まだ」

羅刹は血塗れになりながらも立ち上がった。

「ワレが神殺しのウルかい。ちようどええわ、探す手間が省けたわ！
その首、ワイが貰つたで！！」

そう言つと羅刹は負傷をもろともせず、ウルに襲い掛かつた。

「ま、待てウル！そいつは俺の敵だ、手を出すな」

「手を出すなと言われても・・・」

「シャアアッ！」

ウルは羅刹の攻撃を避けながら言つた。

「まったくどいつもこいつ勝手な連中ばかりだ」

ウルの眼差しが鋭くなつた瞬間、羅刹の腹部に激しい激痛が走つた。

「がはあああつ！、な、なんや、今のは・・・」

それはウルの繰り出したボディブローに過ぎなかつたが、あまりにも速過ぎて羅刹の目に映らなかつたのである。

「行くぞ、魔矢」

「あ、ああ・・・」

ちょうどその時、明らかに羅刹の身体から放たれる氣のよつたものが変化した。

「おのれら・・・・・ゲノムだ、紅だ分けの分からん事言いやつて、ワイは無視かい。

お前らみたいな連中、ワイは一等ムカつくんじやあー?」「な、なんだ!」

「!!」

「がああああああつ!」

それはまさにキレた形相であつた。だがしかし、どうも様子がおかしい。羅刹の白目が赤く染まつていくのだ。

「こいつ、ただの人斬りじやない!!」

ウルが叫んだ。

「」名答や。聖魔刀は單なるワイの趣味に過ぎん。ワイの本当の姿はこれや!!

羅刹がそう叫ぶと、身体中の筋肉が一回り大きくなり、体格が増した。

「バカな、こんな事が・・・・」

魔矢は驚きで動けなかつた。

「こいつ、バーサーカーだ!!」

バーサーカーとは狂戦士のこと。何らかの異状によつて敵味方の区別が付かなくなり

相手が死滅するまで戦い続ける地獄の戦士である。

「ピンポーン。せやけどワイのバーサーカーは狂つてないで。力が上がるだけで敵味方の区別は付くんや」

「ほう、なかなかのもんだな」

ウルは至つて平常心だった。特に臆する事も無い。

「神殺しのウル、覚悟せえや!!」

「良いだろ、相手になつてやる。だが俺が直接相手をする前に口いつらと闘つて勝つたら、いつでも相手になつてやる

ウルはそう言うと、口で軽く口笛を吹いた。

すると何処からとも無く真っ黒なフードを纏った3人の人間たちが現れ、ウルの周囲に立ちはだかった。

「なんやそいつらは」

「こいつらは魔界で4番目の実力を持つ戦士たち。こいつらに勝てたら俺たちのアジトに来い。

場所は由佳から教えてもらえ。 いつでも待ってるぞ」

そう言うとウルは身体を翻し、紅の待つ場所へと走り出した。

「羅刹、貴様との決着はいざれ必ず・・・・」

魔矢もそう言うと霧の中に消えて行つた。

「ケツ！ どいつもこいつも敵前逃亡かい！ まあええわ。 後で由佳ちゃんから教えてもらうさかい」

「その由佳ちゃんって言つて止めてくれる？」

「じゃあ由佳タン」

「殺すわよ？」

「ヒィい！ 由佳タンがまた怒った！！」

そう言つた瞬間、フードを被つた男たちが羅刹に奇襲を掛けてきた。

「ワイの強さを見て惚れるかも知れへんで」

「それはまず有り得ない」

「一瞬で片付けたるわ！！」

バーサーカーと化した羅刹と、フードを纏つた男たちの死闘が始まつた・・・。

END

「アタタタ、痛いで、由佳タン！もつと優しくせな～」「何言つてんのよ、男のくせにだらしない」

「せ、せやかで、めちゃ痛いねん」「我慢しなさい、介抱されてるだけでもありがたいと思つてよね」

「あかん、あのフードヤローどもには勝ても、由佳タンには勝てそうにないわ」

「あのや、その由佳タンつての止めなさい。普通に由佳で良いから」「ええ～そんな呼び捨て～。ワイらそんな関係になるんやな～」由佳は何も言わず黙つてゲンコツを羅刹の後頭部にぶちかました。

「アタタタ！～ジョ、ジョークやねん、イツツ・ジョークや」

寝そべり、由佳に介抱されながら羅刹は冗談を言つた。

「せや、なんでワイの事助けてくれるん？」

羅刹にはフードを着た男たちを倒した後の記憶がなかつた。魔矢との死闘で既に重症だつた羅刹だが、ウルが連れて来たN.O.4のフードたちは何とか撃退できたのだ。

その後で気絶したのだろう。ほとんど記憶が残つていなかつた。

「貴方があの連中を倒した後、ウルと魔矢が紅君を連れて戻つてきたのよ」

「なんやてつ～、戻つてきたんかい！」

「そう。介抱してやれつて言つたのは魔矢なのよ」「なに～ますますよう分からん連中やな、敵を助けるつてどないやねん」

「そろそろ、魔矢から言伝があるの」

「な、なんや～！」

「お前とのケリは必ずつける。それまで誰にも殺されるなよ～～～だつてや～」

「「」つづムカつくわ～～あんのヤロー、間違いなくワイの方が有利だつてや～」

やつたで

「そうでもなかつたじやない。貴方だつて限界に近かつたでしょ」「そ、そやけど、まあなんちゅつか、もつええわい」

「フフ」

羅刹は横たわつているから見えなかつたが、きつと笑つた由佳の顔は可愛かつたに違ひない。

羅刹は勝手にそう思つた。

「良い勝負だつたとは思うけどね」

「次は必ずワイが勝つでえ！関西人は『冗談言つても嘘は言わへん』『だと良いけど』まあ例え魔矢に勝てたとしても、紅君には無理ね」

「紅君？そいやウルつてやつもそんな名前口にしどつたな」

「矢吹 紅。ここ魔界でN.O.-2の実力者。見た目はそんな風には見えないんだけど」

由佳は苦笑いを浮かべた。

「魔矢がN.O.-3で紅がN.O.-2つてこたあ、紅は魔矢より強い言う事か？」

「そうよ。で、その上がウル」

羅刹は魔矢との死闘を思い出した。羅刹は今まであれほど手強い相手と戦つたのは初めてである。

無敗だつた羅刹が初めて敗北を身近に感じた相手だ。その魔矢よりも強い紅とは一体・・・。

そしてあの神殺しウルである。ウルと拳を交わしたのはほんのわずかな時間だけだつたが

羅刹は本能的に感じ取つていた「コイツはあかん」と。

ある程度の強さを誇る人間なら、自分よりも強い相手を前にしたとき、本能が危険信号を送るものだ。

その危険信号がほぼマックスに近い状態で羅刹の本能に走つた。

認めたくは無いが、とてもじやないが太刀打ちできる相手とは思えない危険信号。それをウルから感じていた。

「一体どんなヤツなんやろか・・・」

「凄く可愛い感じの子よ」

「か、かわええ！？なんや魔界のN○-2はかわええのかいな！」

「ええ、きつと余つたらビックリするわよ。はい、これで終わり」

「どうやら傷の手当が終わつたらしく。由佳の手が羅刹の身体から離れた。

「おおきにーホンマ助かつたわ」

「良いよ、一れべりいしか出来ないしね」

「ところでおつと頼みがあるなんけど・・・」

「なに？」

「なんか食わせてくれへん？ホンマは向か食べよつ思ひで由佳ちゃんの店入つたんや。

「あかん、もうワイ餓死しそつやわ・・・」

「まったく、何から何まで世話が焼けるわね」

由佳が下に降りて行つたのを追つようとして、羅刹も下の階にある店に下りた。

「ほへえ～魔界には似合わないほど綺麗な店やな～」

「当然客はいない。羅刹を介抱するために由佳は一時的に店を閉めているのだ。

入り口のドアには「close」と書かれた立て札が下がつている。

「ちょっと大丈夫なの？まだ横になつていたほうが」

「厨房から由佳が顔を出してそう言つた。

「大丈夫や、寝てるほうが身体に悪い氣がするねん」

「じつとしていられないタイプ？」

「どつちか言うたらそつやな」

すると由佳が「ふ～ん」と言いながら出てきた。手には皿が乗つており、北京ダックとライスがある。

「うはあ～！これやこれー店の前のオススメに北京ダック書いてあつたからな

「まあ今日のオススメと言つ事で」

「治療してくれた事に感謝しつつ、いただきませーー。」

「どうぞ」

よほど腹が減っていたのだ。羅刹はガツガツ食べ始め、瞬く間に平らげてしまった。

「ウマイ！？」つやええ嫁さんになるべしや？「ワイの嫁にならんへん？」

「イヤ」

「そんなん真正面から否定せんでもええやんか～」

「アハハハ・・・・とこひで御代払えるんでしようね？」

「へつ？」

「へつ？じやないわよ。お金！北京ダックとライス代、あんたまさか・・・？」

「ああ、御代な、そ、そりや払えるで、待つてひ。確かここに・・・か・・・・」

・

羅刹のポケットから出でたのは100円玉のみだった。

「あ、あかん・・・ワイ、文無しや・・・」

「良いで胸ね、あんた！！」

由佳が両手の骨をボキボキ鳴らしている。

「いや、違うねん！つうか、魔界でも金払うんかいな。ワイは知らんくて、その・・・」

「この食い逃げ男！！」

「わ、わあああ！――ちやうで――ワイ逃げてへんよ――」

拳を振り上げた由佳が襲い掛かる。

「か、勘弁してえな～」

無一文だった羅刹はこの後由佳のもう攻撃に合い、ふんだりけつた

りだった。

勿論、由佳も本気で攻撃したわけではなく、おふざけが半分と言つ感じではあった。

とは言つもののこのまま帰すわけに行かず、羅刹は由佳の命令で

店の手伝いをする事になった。

ひとまず羅刹は由佳の店の隣にあるボロアパートを占拠し、定住をどうにか確保した。

「手伝えばそれなりのアルバイト代は払ってあげる」
そんな由佳の優しい一言にすがりつく形になつたわけだが……。
さすがの聖魔剣士、バーサーカー羅刹でも、由佳には勝てない様子
である。

「いらっしゃいませ」

「やあ！」

「あら、久しぶりね

「おっひさ～由佳さん。調子はどう?」

「悪くないわ。魔矢とウルは?」

「また出掛けてるんだよ、仕事だつて言つてた、僕暇になつちやで

さ

「そりゃ何か食べる?」

「うん、オススメの北京ダック頂戴!」

「はい」

「ああああっ!…お兄さんもう動けるの!?」

「ああ～ん、なんやこのかわええガキは!」

そこにはスーパー童顔の少年がいた。背も低くまるで学生のようである。

「あれだけ負傷してもう動けるんだ 淫いな～」

「魔界つてんはよつ分からんな。綺麗な店に綺麗な女、それにかわええ少年まである。

ますます理解できへん世界になつてきてもうた

「そう? 結構単純な世界だとと思うけど

「そりゃい・・・つてなんでやねん!?」

「アハハハ、面白い 関西弁! なんでやねん!」

「こ、このガキヤ、ワイのことバカにしとるな

「アハハ、ウケる！関西弁」

「このヤロ、関西バカにするなや！関西人は怒るとじつつ怖いで！」

「女に弱いの間違いでしょ？」

横から由佳が突っ込んだ。

「そりや、男たるもの、女には弱いんや。つか、お前誰や！？なんでワイの事知つとる！？」

「僕？僕は矢吹紅。魔矢とウルの仲間だよ～ん 焰 羅刹さんでしょ？」

「な、なにつ！？」、こいつが紅・・・！？・・・

「ね？やつぱりビツクリしたでしょ？」

由佳が苦笑いで言った。

「お前か！魔界NO・2 言うのはつ！」

「そうだよ

「いや、そんなあつけらかんとそつだよ言われてもやな・・・なんや、ホンマにNO・2か？」

どつからどう見てもガキにしか見えへんのやけどな～

「まあまあいつか闘うときが来れば分かる事だよ

紅がニシ「コリと微笑みながりそつ言つた。

「はあ・・・なんだかよつ分からん世界や。こいつのを青天の霹靂つて言つんやろうな～」

羅刹が魔界を理解する日は本当に来るのだろうか・・・

やれやれである。

END

ゲノムが出現した事は別に驚くべき事ではなかつた。

忘れられた孤島「煉獄」から魔界本土へやつて來てもおかしな事ではない。

数年前、ウルたちが封印した際も、この魔界本土で大暴れしたのだ。先に様子を伺つていた紅と合流したウルと魔矢だつたが二人が辿り着いたときには既にゲノムの姿は無かつた。

紅の話に寄ればそれらしい存在が確認されただけと言うことであつて紅もゲノムを肉眼で確認したわけではなかつたようだ。ゲノムの姿が無いのであればもはやどうしようもない。

三人はその足でアジトに戻つた。紅はその後「お腹空いたから由佳さんの店に行く」と言つて出て行つたが一時間ほどで戻つてきた。

「どう思う?」

魔矢がウルに聞いた。

「蘇つたと言う噂はどうやら見たいだな。そんな気がしてならん」「確かに最近郊外で転がつてゐる死体の数が増えたよね。それは僕も思つてたんだ」

「だがその姿を明確に現すまでには至つてないわけか」

魔矢が付け加えた。

「恐らくまだ完全に蘇生していないんだろう。前もそうだったからな」

「しかし本土まで足を向けているのも事実だぞ」

「分かつてゐる。いざれまたヤツとやり合つ事になるだらつ」紅も魔矢も思わず息を飲んだ。魔界屈指の一人と言えど、ゲノムとの闘いだけは考えたくない。

二人とも前回の死闘で半ば半殺しに近い状態に追い詰められた相手だ。

ましてや時間の経過を考慮すると、前回よりも凶悪になつてゐる事は想像するに容易い。

「どうするの？今のうちにやつちやう？」

「いや待て。それはまだ早い。もつと作戦が必要だ」

魔矢が言った。

「そのためにお前はあの一人に目を付けたんだろう？」

「お前も人が悪いな。お見通しかよ」

「まあな」

「あの二人つてパイフーと鬼武の事？」

紅が聞く。

「ああ。それと鮫島 聖に焰 羅刹もだろ？魔矢」

「やれやれ、こつまで見透かされると気持ち悪いな」

魔矢が苦笑いで言った。

「ああ、それと未確認だがもう一人、等々力と言つ男もいる。こいつも素性は明らかじゃないがな」

「つまりお前は俺たちと、今名前の拳がつた連中で手を組む・・・。そう考へていいんだろう？」

「ワオ！？それって凄いプランだね。テンション上がりそう」

「そうでなければゲノムは倒せん。ウル、数年前ヤツと直接対決を繰り広げたお前なら分かるだろ？」

いかにゲノムが強大で恐ろしい存在か

「一応な」

「だからこそこのプランは必要だ」

「でもさ、パイフーと鬼武はセットで居るから可能性は高いけど、鮫島のお兄さんや関西人は難しくない？」

紅にとつて羅刹は関西人で形容されているらしい。

「ああ、そもそもあれだけの連中をまとめ上げるのも一苦労だ。可能性は低いと見て間違いないが・・・」

「言つておくが俺は誰とも組むつもりは無い。これは俺の問題だ。

お前たちは関係ない」

「ゲノムがお前の母親だからか？」

「……」

「ほほう、ゲノムとか言つヤツはあんさんの母親かい」

「誰だつ！」

突然関西弁が部屋に響くと、部屋のドアが静かに開いた。

「お前は、羅刹！」

「ああ！ さつき由佳さんの店に居た関西人！ ？」

「か、関西人言うな、ヴォケ！ ！ ワイには羅刹言うカツコええ名前があるんや！ ！」

「アハハ！ ！ 自分でカツコイイって言つてる！ ウケるう〜

「こ、このガキ！ ！ まあええわ」

「羅刹、何しに来た！ ？」

魔矢が言つた。

「何しにって挨拶や。由佳ちゃんに場所は教えてもうつた。いずれ首を取る相手に対する敬意やで」

羅刹がそう言うと、何かがおかしかったのかウルがフフンと笑つた。

「フン、何が敬意だ。その身体でよくもまあ言えたもんだな」

「ケツ！ ワレも人の事言えるかいな！ なんやその包帯塗れの身体は「お前だつて似たようなもんだる。由佳に助けられた身で偉そうな事抜かすな」

「なんやどつ！ ！」

「まあまあ、二人とも。今は話し合いの最中だよ。静かにしなきや

」

「ケツ！」

「フン！」

魔矢と羅刹、犬猿の仲になる事は間違いないだろう。

「羅刹とか言つたな。さつきはなかなか良い物見せてもらつた。礼を言つ」

ウルが言つた。バーサーカーの事だろう。

「ええもんやと？ ずいぶん余裕やな、魔界のノローニは」

「そういう性格なもんでね」

「今あんさんと鬭う気はない。」こんな身体やしな。せやけど、そのうち取つたるからな、そん時は覚悟しいや」

「楽しみだな」

「じゃ、話を戻そつか ゲノムのことだけどうる。」

「そないヤバイ相手なんか? ゲノムつちゅうのは」

「でなければ我々がここまで真剣になる事はまずない」

魔矢が言った。

「ほうへ」

羅刹は生返事である。

「いざれにしても様子見と言つといひだらう。今も言つたが俺は誰とも組む気はない。

やるならお前たちでやつてくれ。俺は俺でゲノムとケリを付ける

「それは邪魔しない代わりに邪魔もしないと言つ意味か?」

「そうだ。好きにしたければ好きにすれば良い」

魔矢の問い合わせにウルがそう答えた。

そしてウルは部屋の片隅に置いてあつたバッグを手に取つた。

「あれえ～また仕事?」

「ああ。今回は政界の大物が相手でね。まずこいつの仕事を片付けるのが先だ」

「氣をつけるよ、ウル。どこで何があるか分からないからな」

「ああ。お前たちもな。何かあつたら連絡してくれ」

それだけ言い残すとウルはアジトから出て行つた。

「ホンマ、協調性の無いヤツやな。自分が神殺して言われてるん知つとるんかいな」

「あいつはそんな肩書きに興味は無いのや。あいつの周りが神殺しだのノ。一だの騒いでいるだけで

ヤツは神殺しなど興味は無い。勝手気ままに生きるのがヤツの性格だ

「はあ～ん。」つづり難い男や

「アハハ！関西人だつて人の事言えないじゃん」

「せやから関西人言うなつての！？」

「さて、俺もちょっと出でくる」

「あれえ～魔矢も？何処行くのさ」

「煉獄・・・ヤツが根城が煉獄かどうか確かめてくる。紅、お前はどうする？」

「僕はちょっと疲れたからここにこるよ」

「羅刹、お前は？」

「そうやな～ここにおひでガキンちよの面倒見るんもイヤヤし、ワイも付き合つたる」

「ガキンちよつてなにさ～！僕は大人だぞ」

「ガキンちよはガキンちよや。大人しくお留守番してるんやで」

「関西人のくせに～！」

「羅刹じや～ヴォケ～！」

賑やかな喧騒とは裏腹に、物語はここから壯絶を極める事になる・。

END

「ゲノムとウルの関係ってのはどうないな」とるん?」

「さつきお前も聞いていただろうが、ゲノムは元々人間だった。しかも女。

ウルと言う人間を産んだ母親でもあり、ここ魔界の元凶もある「煉獄はもはや耳と鼻の先立つた。移動の車の中で魔矢は羅刹に語り始めた。

「母親の名前は可憐。熾烈な環境で生まれ育ち、不本意でウルを宿した。

親戚や家族からは罵倒され、生き地獄に相応しい環境でウルを産んだ。

だが、彼女が培っていた憎悪、憎しみ、殺意は母体に居たウルに届いていたらしい。

母親から負の感情を一身に受けたウルは、生後もなく産声ではなく悲鳴を上げたらしい」

「なんや、エライ込み入った話やな」

「まあな。どうして母親がこの魔界でゲノムと化したのかについては未だに不明だ」

「なるほど、せやからウルはお前らには関係あらへんって言つたんか」

「そうだ。皮肉っぽく言えば事実上、母親と子供の究極の親子喧嘩だからな」

「せやけどそのゲノムってのは、他の殺人鬼たちの死念が混ざつとるんやろ?」

「ああ、それが問題だ。もはやゲノムはウルの母親可憐ではない。俺たちが魔界で始末した殺人鬼たちの報われない呪い。その集合体がゲノムだ」

「しかしそない切羽詰る事もないんやないか?お前の計画では合計

8人のツワモノが揃つとるで、」
「お前は」

羅刹の言つ8人のツワモノとは、ウル、紅、魔矢、羅刹に加え
パイパー、鬼武、鮫島、等々力の事を示してい。つまり8対1の
形式となる。

「お前はゲノムの真の恐ろしさを知らん。俺の予測ではウルよりも
強いと見ていい」

魔矢の目は真剣そのものだつた。もはや大袈裟と言つ領域を超えて
いる。

その表情には恐怖さえ感じられる。

羅刹は思わず息を飲んだ。「コイツはあかん」と直感で感じたあの
ウルを凌駕する強さとは一体・・・。

「俺だつて新参者たちと手を組むなんて本意じやない。今まで魔界
はN.O.-1のウルを中心に微妙な秩序を保つていたんだ。
殺し合いが日常茶飯事な変わりに、決して上位の者には逆らわず、
無謀な行為はしないと言つ暗黙の秩序がな。

だがゲノムの復活によってそれが破られつつある。ヤツがその気に
なつたら魔界は消滅してしまう

「マジか・・・」

「大マジだ。むしろ魔界だけで済めば良い方だ。万が一ヤツが魔界
を抜け出し、裏社会へ、そしてリアル世界へ向かつたら
それこそ世界中は大パニックになるだろ」

「ケツ！胸クソ悪いわ！エライ時に来てしもつたな」

「今さら言つても遅い。もはや手遅れだ」

魔矢の言葉はあながち冗談でもなかつた。

魔矢の言つように魔界の静かなる秩序は、確実に破られつつあつた。
もはやゲノムが蘇つた事は明白であり、目撃者もいる。

それにこうして煉獄を前にして感じられる悪の空氣は、ゲノムがそ
こにいる事を証明している。

数年前の激闘を経験している魔矢が忘れるはずも無い。腐敗と血肉
の入り混じつた最低の殺意。

その嫌な空気が漂つ中、魔矢と羅刹は車を止め、外に出た。

「あれがゲノムを封じた孤島、煉獄だ」

「うへえ～あかんで、あれは。『じつ禍々しいやないか』

「『』のどんよりとした負の感情は、身体の傷に答えるな・・・」

魔矢がそう言つた時だつた。

何かが自分たちの背後にある。それは人なのかそれとも物なのかはつきりなかつたが

確實に何か「異物」のようなものが突如として現れたのだ。
それに気付いたのは魔矢だけではなく、羅刹も同じだつた。
だがその正体に気付いていたのは魔矢だけだつた。

「羅刹、分かるか？」

「ああ・・・・なんやこのめちゃ死にそうな悪寒は・・・」

「迂闊だつた・・・やはり来るべきじやなかつた・・・」

魔矢は夥しいほど汗を搔いている。それも普通の汗ではない。冷
や汗である。

「良いか、合図したら『』の場から離れる。お前は紅にヤツが出た事
を伝えに行け」

「ヤツつて、つまり・・・・」

「ああ、ゲノムだつ！・！」

それが合図となつた。魔矢の言葉が消えた瞬間、二人は背後に振り
返つた。

魔矢の言つたとおり、そこには世にもおぞましい姿と化したゲノム
が居た。

「グググググ・・・・・」

「『』、コイツがゲノム！？」

夥しい数の手足、数得る事すらままならぬ眼球と口、それに頭部。
そんなモンスターのような姿を忘れるはずが無い。

それは正真正銘ゲノムだつた。

「羅刹、走れ！？」

羅刹はゲノムの醜悪な姿に気を取られ、遅れを取つた。羅刹が走り

出したとき、既に魔矢は自分の前方を走っていた。

「コ、コイツはあかん・・・・・あかんわ、マジで！！」

「ガガガ・・・・ウ、ウル・・・・ターゲット・・・・ナカマ・・・・カク
ーン・・・・」

動き出したのは魔矢と羅刹だけではない。ゲノムも動き出した。その進路は羅刹に向かつて一直線に進んでいく。

「なんで・・・なんでワイが逃げなあかんねん・・・・殺つたる・・・・
殺つたるでえ！！！」

羅刹は走りながら後ろに振り返った。

「コナ、コナにしたるさかい！…つおおおおおつ！…」

「羅刹、止せ！？」

そう言い放つた瞬間、羅刹の聖魔刀は形無し夢幻陣の型を取り、ゲノムに襲い掛かった。

メテオと化した無数の刃がゲノムに突き刺さる。だがゲノムは無反応だ。迫り来るスピードも落ちない。

「あかん！…ぐはああつ！…」

「羅刹！？」

猛然と突進してくるゲノムのタックルが、羅刹の上半身をモロに直撃した。

その反動で羅刹の身体は加速を増し、前方にあるビルへと叩きつけられる。

この一撃で羅刹は再び血塗れとなつた。

「うぐう・・・・くわつたれ・・・・」

「羅刹！」

羅刹を助けるため進路を変えた魔矢に、ゲノムが襲い掛かった。

「オマエ・・・・オボエテル・・・・ウルノナカマダナ・・・・」

「なにつ！」

凄まじいスピードで繰り出される拳の渦。それを紙一重の瞬間で交わす魔矢。

「ま、魔矢・・・・」

羅刹が呻いた。

「俺を覚えてやがるのか！」

既に魔矢のオリハルコン・オロチは解放されていた。そうしなれば太刀打ちできないうからだ。

「羅刹、大丈夫か！？」

「ああ、なんとか……い、生きてるで」

魔矢とゲノムは睨み合い、その場から動かない。

「逃げろ！ 今すぐここから逃げろ」

「アホか……ワレはどないするねん」

「力合った以上、もはやどうにもならん。ここで迎撃する」

「ム、ムチャ言うなや……その身体でか？ どうにもならんで」

「羅刹、お前は戻つてこの事を紅に伝える。そうすればウルに連絡が付く」

「せやかで、このモンスター相手にお前一人じや、間違いなく死ぬで！」

「生きてやるや。」んなバケモノに殺されてたまるか！！」

「魔矢……」

「さあ行くんだ！！早く！！」

それが再び合戦となつた。魔矢とゲノムが重なり合い、死闘が始まる。もはや止めようがなかつた。そして打つ手も、皆無に等しい。

「何してんだ、早く行け！！」

「魔矢……死ぬなよ……絶対だぞ！！」

「ああ……」

「くそつたれ！！」

羅刹はそう叫ぶと、凄まじい速度で来た道を引き返して行つた。

「グルルルルルル……」

魔矢はゲノムに居直つた。

頭に浮かんだ最愛の人気が微笑む。由佳だつた。

そして頬を伝う、静かな一筋の涙……。

「お前の好きにはさせない。ここで始末してやるー。」

それは魔矢が死を覚悟した瞬間だった・・・。

END

16 ジ絶体絶命。魔矢、暁に散る

「はあ・・はああ・・はあ・・・バ、バケモノめ・・・」
勝敗は既に喫していた。羅刹との戦いで満身創痍の魔矢がゲノムに
勝てるはずが無かつた。

例え万全の状態で戦つても、魔矢一人でどうにかなる相手ではない。
先ほどから攻撃を仕掛けるも、その攻撃は全て命中。だがゲノムの
動きに狂いは無かつた。

醜悪な姿であるにも関わらず悪知恵の働くゲノムは、下手に動くよ
りも攻撃を受け止め、その後のカウンターで魔矢を攻めた。
無数に存在する手足による攻撃。同じく無数の口から吐き出される
硫酸の異臭。

魔矢にはゲノムの攻撃を防ぎようが無かつた。もはやまともに動く
事すらままならないのだ。

「こんなところで・・・俺は死ぬのか・・・」
不思議と死に対する恐怖は無かつた。家族を失い、それが引き金と
なつて魔界に来た魔矢にとって

恐怖など昔に抹殺した感情である。死ぬのが怖いのではない。
自分が殺される相手に納得が行かなかつた。

一度は封印した相手。その相手に殺される羽目になるとは・・・。
そうならないよう、事前に計画を練り、なんとか今日まで来たとい
うのに

それがこのゲノムの出現によつて無惨に打ち砕かれようとしている。
魔矢はそれが無念でならなかつた・・・。

「シヌカ・・・・」

「なに・・・ぐはああつ・・・」

突然ゲノムの身体から伸びた鋭利な触手が、魔矢の身体の至る所を
貫いた。

腕、足、上半身、下半身。幸いだつたのは心臓と頭部には命中しな
貫いた。

かつた事である。

だがそれでももはや致命傷は避けられない。

「があああああああつ！！！！！」

かつてない悲鳴が魔矢の口から放たれた。身体の至る部分に穴が開き、その穴から夥しいほどの血液が流れる。

だがそれだけではなかつた。ゲノムから伸びた触手は、そのまま魔矢の眼球をかすめて元に戻つた。

魔矢の両目から血が流れ、もはや光を受ける事は出来なかつた。

「目が・・・・・ぐうう・・・・」

暗闇の支配する視界の中で、由佳が静かに微笑んでいた。

魔矢はもう動けなかつた。とてもじやないが立ち上がる状態ではない。

しかしゲノムの攻撃は止まらない。再び伸びた触手は今度は魔矢の両腕を意図も簡単に貫いた。

悲鳴・断末魔の声は出なかつた。ただ唯一動いたのは激しい痛みに大きく痙攣した己の肉体のみ。

これによつて装着していたオリハルコン・オロチは無惨にもぎ取られ、左肩を失つた。

激しい痛みのせいで声も出なかつた。

（由佳・・・・・）

結局誰も守れなかつたのだ。家族を失い、魔界で出会つた由佳さえも守れず・・・。

「トドメ・・・・・」

ゲノムはそういうと、信じられない高さまで飛び上がり、自らの体重を味方に付け一気に下降した。

その下には魔矢が横たわつてゐる。ゲノムは魔矢目掛けて真っ逆さまに落ちてくる。

光を失つた魔矢の目に、上空で燐々と光る太陽の熱を感じた。

もはや意識は朦朧としている。これが死なのだろうか・・・。

（ウル・・・・・紅・・・・由佳・・・・羅刹・・後を・・たの・・・）

現実は魔矢に別れの言葉すら言わせなかつた。

まさにその時、上空に舞い上がつたゲノムが、魔矢の身体の上に落

下した。

「がはああああっ！…！」

それが魔矢の最後の悲鳴だつた…。

魔矢と別れでどれくらい経つたか分からぬ。

魔界の中心部へと向かつている羅刹の身体からは血が噴き出ていた。魔矢との戦いで満身創痍だつた身体はやはり限界だつた。走つてゐる最中に全ての傷口が開き、血がほとばしる。

「これじゃなんのために由佳ちゃんに手当してもらつたのか、わからへんぞ…」

羅刹は躊躇、前のめりになつて倒れてしまった。

「くそ…・・・なんでワイが・・・こんな目に・・・」

羅刹にはやらばければならない事がある。ゲノム復活を紅に、そしてウルに伝えるという役目が。

だがその役目すら果たせそうに無い。凄まじい痛みが身体を走り、体力が奪われてゆく。

しかし、ちょうどそのときだつた。

「な、なんや・・・」

地震のような地響きが巻き起こると、羅刹の遙か後方から何かがこちらに向かつて移動してくるのが見えた。

「あれは・・・ゲ、ゲノム！？」

もはや見間違える事などなかつた。それはゲノムだつた。ゲノムは凄まじいスピードで羅刹を追い越すと、そのまま魔界の中

心部へ去つて行つた。

「ど、どうしたことや・・・魔矢はどないなつてん！？」

ゲノムは魔矢が食い止めているはずである。にも拘らずそのゲノムはたつた今通過して行つた。

「 いう事は魔矢は・・・。 」

「 じょ、冗談やないで！ あのヤロー、死によつたら承知せえへんぞ！」

羅刹は渾身の力を込め立ち上ると、今来た道を戻つて行つた。

「 魔矢・・・お前まさか死んだんぢやうやろな 」

身体の傷などもはやどうでも良かつた。羅刹は痛みを堪えながら大急ぎで魔矢の下へ向かつた。

END

「まつたく、いつも毎日戦いじゃ疲れるぜ」

「だな。あれから一体何人のバウンティーハンターを殺つたのか、もう覚えてないからな」

自分たちの足元で転がるバウンティーハンターを見下しながら、パイパーと鬼武は一息ついていた。

二人が事実上魔界でN.O.-5の座に着いて以来、ほとんど毎日のように賞金を狙つた連中に付け回されていた。

そのほとんどは一人がベッドで愛し合っているときに訪れ、お楽しみを邪魔される形になつた。

特にパイパーはそれが不満で、向かつてくるハンターたちを怒り任せにぶちのめすと言つのが恒例になつていた。

「パイパー、お前自慢の爪が血塗れだな」

鬼武がニヤついて言つた。

「似合うだろ？」

「ああ、凄く似合つてる」

そうは言つた鬼武だったが、彼の手にはちやつかり地対空ミサイル・スティングガーフィン・92Aが握られている。

本当ならパイパーのように素手で相手しても良かつたのだが、相手が複数だつた上に飛び道具を使う連中だつたため

こちらも飛び道具の方が能率が良かつたのである。一人とも少々疲れてはいたが、その辺はさすがN.O.-5。強さは本物である。

「おい、ありやなんだ？」

身体に飛び散つた返り血を拭いながらパイパーが言つた。

見ると自分たちの遙か南側から何がこちらに向かって突進していくのが見えた。

「なんだあれ。おいおい、なんだかヤバイ感じがするぞ！..」

過去に一度ウルと会つている鬼武が感じ取つたヤバさは、決してウ

ルの気配ではなかつたが

ある意味ではそれ以上の禍々しさを感じる。

「す、すげえのが来る・・・見ろよ、ありや人間じやないぜ！！」

「そう叫んだのはパイマーだつた。

突進してきたそれは一人の目の前で止まつた。その瞬間、パイマーの鬼武も言葉を失つた。

眼前に現れたのは凄まじいモンスターだつたのだ。無数にある手足と、有に百は超えるであろう眼球。

その醜い姿に驚いた事も去ることながら、それよりもモンスターから発せされる邪気に腰が抜けそうになつたのだ。

もはや邪氣とすら呼べないほどの殺意、そして憎しみの塊。

「な、なんだてめえは！？」

パイマーが叫ぶ。

だが相手・・・いや、ゲノムは無反応だつた。

「コイツだよ、魔界に来た当時から感じていた嫌な感触の正体は・・・

・

鬼武が怯えたように呟いた。

「どういうことだ？」

「お前も感じていただろ？ 神殺しウルばかりに気を取られていたが、それと同じくらい・・・

いや、それ以上に禍々しい感触を・・・」

「確かにそんなものを感じた事もあつたが・・・それがコイツだつてのか！？」

「ああ、多分。ヤバイぜ、パイマー、俺たち死ぬかも知れない・・・

「ふ、ふざけんな！ そんなことになつてたまるかつての！・・・

「グルルルルルル・・・

パイマーと鬼武は驚いてゲノムに注意を払つた。

「ターゲット・・・ハンベツフノウ・・・ニンシゲーター・トウロクナシ・・・ナマエ、ミカクニン・・・」

「な、なんだよ、「コイツ・・・」

鬼武が一步下がった。

「薄気味悪いヤローだ！おい！てめえも賞金狙いか！？」

パイフーが叫ぶ。

「イズレモカソケイナイ・・・・アンノウン・・・・」

ゲノムはそう言つと、進路を変え去ろうとした。

「待てコラ！！」

「おい、パイフー、止せ！？」

鬼武が止めるが、どうやらパイフーは自分たちがシカトされたよう

に思えて気に入らなかつた。

ゲノムの動きがピタリと止まる。

「コノヤロー、俺たちは無視か？この極悪紳士二人組みの俺様たち

をシカトしようつてのか！？」

「ドウデモイイアイテ・・・・シヨセンザ」「・・・・

「殺すぜ！？」

もはや止められなかつた。パイフーはその巨漢を宙に預け、ゲノム

に飛び掛つた。

「止せ、パイフー！！」

鬼武がそう言つた時には既にパイフーの鋭い爪がゲノムに命中して

いた。

「へへ、どうよ。俺様の拳の味は」

しかしゲノムは無反応だつた。それどころかまったく動じてない。

「ジュンビウンドウナラ・・・・モウシタゾ・・・・

「なにつ、おわつ！！」

突き刺さつた爪を引き抜かれ、パイフーは軽々と宙に舞う。そして

勢い良く投げ付けられ、隣のビルに激突した。

「パイフー！－くそつ、どうなつてももう知らねえからな－！」

そう叫んだ鬼武は持つていた地対空ミサイル・スティングガーフィム

・92Aを構え、そして撃つた。

ミサイルはゲノムに命中、大爆発が起つた。

「おい、パイマー！大丈夫か？」

「あ、ああ。なんとか・・・チキショー！不意打ちだつたぜ」
もくもくと煙の上がる中、鬼武がパイマーを抱き起こしたときだつた。

「グルルルル・・・」

「なんだつ！？ぐはあつ！！」

「うわっ！」

文字通り肉の塊が鬼武とパイマーに体当たりしてきた。それも尋常ではない凄まじいスピードで。

その勢いで二人とも地面に叩き付けられた。だがしかしゲノムの攻撃はまだ終わらない。

ゲノムの身体から伸びた触手が一人を持ち上げ、周囲にある建物に身体ごと叩きつける。

「くそつ！なんなんだ、あの怪物は！！」

「ヤバイぜ、このままじゃ殺られる！！」

ほとんど攻撃する余地さえなかつた。それでも一人はどうにかして触手を外そうともがく。

「うおおおおおつ！！」

「パイマー！？」

「殺られる？冗談じゃないぜ。このまま何も抵抗しないまま終わるか！？」

文字通り怪力で触手を振り払つたパイマーは、鬼武をそのままにして一度アジトに戻つた。

だがすぐに出でくると、その手には大型のチーンガンが握られていた。

「ああ！それ俺のだぞ」

「借りるぞ、鬼武。待つてろ、すぐ助けてやる」

パイマーはチーンガンの安全装置を解除し、その銃口をゲノムに向けた。

「こいつは優れものだ。30秒で200発の銃弾が襲い掛かる。い

くぞ、モンスター！！」

するとゲノムは鬼武を持ち上げたままパイマーに迫った。

「これでも食らえ！！」

パイマーの叫びと共に、凄まじい轟音を響かせながらチーンガンが火を噴いた。

「おらああつ！！」

爆炎にゲノムが消えると、鬼武は触手をすり抜け地面に落ちる。たまらず鬼武はパイマーの後ろへと後退する。

「クソツ！仕入れたばつかなのによ！！」

鬼武が悔しがつた。

「良いじゃねえか。魔界用に仕入れた物なんだろ？早速の出番だぜ！」

撃ちながらパイマーが言った。チーンガンにはしっかりと手ごたえを感じる。全ての弾丸が命中している証拠だ。

「うおおおおつ！！」

そこに間髪いれず、今度は鬼武が持っていたミサイルの全弾を打ち込んだ。凄まじい衝撃と爆風が巻き起こる。

更に鬼武は持っていた手榴弾の全てをゲノムに向かって放り投げる。その後竜巻のような爆発音が響き、大地が割れた。

爆音が静まり始め頃になると、チーンガンの弾はガス欠となり、回転がゆっくりと止まる。

二人の目の前は地面が大きく凹み、まるで隕石でも落ちてきたかのような有様となつた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・どうよー？」

さすがに撃ちっぱなしは疲れたのか、パイマーの息が上がつていた。

「これでも生きているようなら・・・・・」

鬼武が想像もしたくないような表情で言つと

「ああ、もう打つ手はねえ・・・・」

とパイマーが続けた。

事実そうであった。これでまだゲノムが生きていたら、後はもう頼

るのは己の肉体のみ。そう、肉弾戦である。

だが一人の願いは見事に碎かれた。

「ああ・・ああああ・・・そんな・・・」

「バ、バ力な！・あれを受けてまだ・・・」

クレーターのように凹んだ地面に、ゲノムが立っていた。それも外傷はほとんど見当たらない。ほぼ無傷である。

「どうしてだよ！・確かな手ごたえを感じたつてのに」

バイバーが叫んだのと同時に、ゲノムがゆっくりとこちらへ向かつてくる。

「こ、殺される・・・・・」

それは絶対と呼べる恐怖・・・。あの時、ウルや紅、魔矢と会つた時に感じたライオンを見るような威厳とは別次元の心の底から沸き起ころる真性の恐怖。二人は身体の芯から震え上がった。

「ウットウシイヤツラ・・・ハイジョスル・・・・」

「く、来るぞ！」

だがその時だつた。

バイバー、鬼武の後方から何かが飛んできたかと思つと、それはゲノムに命中した。

そしてけたたましいブレー キ音を響かせ、二人の真後ろで車が停車した。

「な、なんだ！何が起きた！？」

「久しぶりだな、変態バカツブル」

「なつ！お、お前はつ！」

「等々力！」

そこには巨大なバズーカを手にした等々力が立っていた。

「等々力！？」いつが？

相棒の鬼武から話は聞いていたものの、パイマーは等々力と会つのは初めてだった。

「お前、どうして魔界に・・・」

鬼武が驚いたように言った。

「まあちよつと用があつてな。つて、そんな話をしている場合じやないだろ」

「ああ！！！」

等々力のバズーカによつて吹き飛ばされたゲノムだったが、やはりほとんど無傷である。

何も言わずにこちらへ向かつてくるのが見えた。

「クソッ！なんで手応えがねえんだ！？」

持つていたチーンガンを投げ捨てながらパイマーががなる。

「そんなもん何の役にも立たん。ヤツに銃撃は通用しないようだからな」

「ケツ！なんでてめえにそんな事が分かるんだよ！」

「ヤツの事、ある程度知つていてな。こんなまともな戦闘じや勝ち目は無い。一人とも乗れ！？」

等々力はどう言つと乗つていた車のドアを開けた。

「どうするんだよ！」

「どうするもこつするもない、逃げるのぞ」

「こ、逃げるだとつ！」

鬼武とパイマーが同時に叫んだ。

「お前ら自分たちの身の程を知つた方が良いぜ。あいつはお前らの相手に出来るヤツじやない」

「くつ！」

鬼武もパイマーもその事は薄々感じ取つていて、本能が戦う事を恐

れでいるのだ。

そうしている間にもゲノムはこちりへ向かって来る。

「一ガサンゾ・・・・・ムシケラ・・・・」

「さつさと乗れ！死にたくなかつたらな

「クソツ！」

パイパーは後部座席に、鬼武は助手席に乗り込んだ。

「ちゃんと掴まつてろよ、いくぜ！」

等々力の車が急発進すると、西へ向かって爆走を始めた。

「あのヤロー、追つてくるぞ！」

バックミラーを田にした鬼武が叫んだ。

「チツ！」

パイパーは窓から身体を乗り出すと、持つていたマシンガンで応戦する。

銃弾は命中するがダメージは受けていないようだつた。それが証拠に向かつてくるスピードは落ちない。

「等々力、もつと飛ばせ！追いつかれるぞ」

鬼武が叫ぶ。

「言われなくつても分かつてらあ！」

等々力の改造車はけたたましいエンジン音を響かせ、更に加速した。鬼武も等々力の持つていたバズーカを乱射する。車のスピードが上がつたおかげでゲノムとの距離は開いた。

「これじや何処まで走つても安心出来ねえぞ」

パイパーが撃ちながら叫んだ。

「いや、ヤツもバカじやない。そのうち追うのを諦める」

「本當かよ！？」

「ああ、事実だ。ヤツは一度に長い時間動く事は出来ないんだ。エネルギーが減つて行くからな」

「なんでそんな事まで知つてんだよー。」

鬼武が聞いた。

「後で話す。今は飛ばすのが先だ」

そう言つと等々力の車は更に加速を増した。

ゲノムの姿が見えなくなつた。どうやら追うのを諦めたらしい。姿が見えなくなつてもうずいぶん経つが、等々力はアクセルを緩めなかつた。

「どうやら諦めたらしいぜ」

「そうみたいだな」

パイフーと鬼武は安心したように言つた。

「それにしてもお前が等々力かよ。噂には聞いていたが、ずいぶん優男だな」

パイフーは嘲笑うように言つた。目鼻立ちの整つた等々力は確かにそんな感じに見える。

見ようによつては紅と同じくらゝの美形だ。

「優男で悪かつたな。腐れヴァンパイア」

「んだとつ！ てめえ」

二人とも口の悪さが共通点のようだ。

「まあまあ、一人とも。今は喧嘩している場合ぢゃないぞ」

鬼武がなだめた。

「お前が魔界に居るつて事は、鮫島も・・・まあ俺は会つた事は無いが」

「ああ、来てるぜ」

「鮫島まで来てんのか！！ムカつく連中のオンパレードだな」

パイフーは一度殺し合ひの戦いを繰り広げた相手、鮫島を思い出した。

あの時は痛み分けだつたが、気に入らないものは気に入らない。

「お前何処まで知つてんだ。あのモンスターのこと」

鬼武が切り出した。

「ヤツはゲノムと言つて、見たとおり魔物だ。噂じや神殺しウルよりも強いつて話だ」

「な、なに！ あのウルよりも強いつてのか」

「ああ。ウルサイドはゲノムを抹殺しようつて事で動き出している「なんでそこまで知つてんだ、俺たちの方が先に魔界にいたはずだぜ」

パイマーが言った。

「無論、俺だつてタダで仕入れた話じやない。2時間前まで俺はノ・2の紅とか言つ少年と一緒にだつたからな」

「紅！」

「彼からいろいろ聞いたんだ。つうかまあ、彼が一方的に喋つてたんだけどね」

話し好きの紅には「口外しない」なんて言葉は存在しないのだ。

「一体どうなつてんだ、鮫島は居るは、お前は紅と繋がりはあるは、ややこしくなつて來たな」

パイマーが頭を搔きながらそう言つた。

「鮫島は茨木童子を追つて魔界に來た。俺はそんな彼を無事に生還させために來た。

そしてウルたちはゲノムを始末しようとしている。そんな中お前たちは本当ならウルたちが手を下すはずだつたゲノムにちょっかいを出し

見事に巻き込まれたつてわけだ

「別にちょっかい出したわけじやないぜ。向こうからやつて來たんだ」

鬼武がそう言つ。

「同じ事だろ。お前らはもう覚えられてるぜ。いざれ狙われる」パイマーも鬼武もゾッとした。本心を言つてしまえばもう一度と力チ合いたくない相手である。

「んで?なんでお前が俺たちを?」

「その紅から聞かれたのさ。パイマーと鬼武つてお兄さんの仲間なんでしょう?つて

「いつから仲間だつけ?」

「俺もそう思つた。それで紅を送り届けた先でお前らに遭遇したつ

てわけだ

「ふう～ようやく話が見えてきたな。パイファーよ」

「ああ、まったく疲れたぜ」

「あのゲノムとか言うヤツ、この後どうするんだ
多分、紅の下へ向かうだろ？」

「紅の？」

「もしそうなら好都合だな。N0-2ならチョチョイと始末してく
れるさ」

「ところがそもそも行かない」

「なんでだ？」

「お前らはまだ知らんよ？だな」

「なんだよ！？」

「N0-3の魔矢がやられたらしい」

「なつ！？」

意外な事実だつた。勿論、初耳の情報だ。

「やられたつて、まさか死んだのか、あの男が・・・」

パイファーの鬼武も睡然食らつたように驚いている。

「そこまでは分からぬ。ただこつちへ向かう途中に出くわした殺
人鬼たちが、ゲノムにやられる魔矢を見たと言つていた」

「信じられねえ・・・あの魔矢が・・・」

パイファーはかつて自分の下へ訪れてきた魔矢と紅を思い出した。
一目で分かるほど、彼らの強さをひしひしと感じたのを良く覚えて
いる。

連中の強さは本物だ。とてもじゃないが自分たちで太刀打ちできる
相手ではない。おまけにそれ以上の強さを誇るモンスターまでいる。
パイファーと鬼武は改めてとんでもない世界へ来てしまった事を実感
した。

「ところで何処へ行くんだ？」

「もうお前たちはゲノムに記憶されちまつたからな。とりあえず俺
のアジトへ行く

「お前のアジトに？」

鬼武の問い合わせに等々力はそう答えた。

「安心しろ、絶対に見つからない場所だ。後の事はアジトについた後ゆつくり考えれば良い」

「いずれにしてもお前のおかげで助かったぜ。一個借りが出来たな」

「恩を仇で返すような真似はしないでくれよな」

「口の悪さは鮫島ソックリだぜ」

「なんか言つたか？ 腐れヴァンパイア！」

「てめえ～な～！」

等々力の車は西へ西へと向かつた・・・。

END

羅刹の体力はもはや限界だつた。既に両足の膝が笑つており、正常ではなくなつてゐる。

だがそれでも羅刹は走つた。走らずにはいられなかつたのだ。

あの時、魔矢はこの場で迎撃すると言つて羅刹一人を戻らせた。魔矢の言葉が現実となれば、ゲノムが魔矢居る場所から離れる事など有り得ない。

だが現にゲノムは走る羅刹を通り越し、魔界中央部へ向かつて行つた。

では魔矢はどうなつたのか・・・・。

嫌な予感がひしひしと伝わる中、羅刹はようやく元の場所へ戻つてきた。

「う、嘘やろ・・・・・」

道すがら、一部の空間がクレーターのように凹んでゐる。その中央部は人間の物と思われる鮮血で真つ赤に染まつていて。

そして血の海のど真ん中に、魔矢がいた。

「魔矢・・・・・冗談やろ・・・おい！！魔矢！！」

羅刹は我を忘れて魔矢に駆け寄つた。もはや見るも無惨な姿だつた。身体中傷だらけの上に、酷い裂傷を負つてゐる。

「魔矢、しつかりしろや！！おい！」

魔矢の身体の上にはもぎ取れたオリハルコン・オロチがシールドの形に変化して置かれている。

とは言えもはや使い物にならない事は一目瞭然だつた。オリハルコン・オロチは完全に死んでゐる。

では魔矢はどうか・・・。

「魔矢、起きろつて！」

羅刹が魔矢の身体を抱き起こし激しく揺すると、わずかだが魔矢の口から呼吸の音が聞こえた。

だがゲノムの攻撃によつて田を損傷しているため、瞳は開かなかつた。

「ら、羅刹・・・か・・・」

「魔矢！死んだかと思つたで！」

しかし喜んでいる場合ではない。もはや魔矢は虫の息である。一刻も早く適切な処置を施せる場所へ運ぶ必要がある。

「どうして・・・戻つた・・・」

血塗れの魔矢が呻く。

「途中でゲノムがワイを通り越していくのが見えたんや」「ゲノム・・・が・・・」

「そや。気になつて戻つてきたんや」

「ば、馬鹿な・・・事を・・・」

「そんなんどうでもええわ！行くぞー！」

そう言つと羅刹は魔矢をおんぶし、歩き出した。

「お前との決着・・・も、もう着けられん・・・ぞ・・・」

「そうかも知れへん。けど、死ぬよりマシやで」

「こんな・・・姿じや・・・何の役にも・・立たん・・・」

「せや。せやけどな・・・お前が死んだら由佳ちゃんはどうなん

ねん！？」

「由佳・・・」

光を失つた魔矢の瞳がわずかに開いた。

「誰が由佳ちゃんを幸せにすんねん！？由佳ちゃん泣かせたら承知せえへんからな」

「羅刹・・・お、お前は・・・」

「ええよな、お前は。あんな出来た子に好かれよつて。羨ましいわ」

「ま、まだ・・・死ねんか・・・」

「そつや！…もうちよい頑張りいや…！」

「すまん・・・出来るだけ急いで・・・くれ・・・紅が危ない」

「ああ、分かつとる…」

「さつきの攻撃、凄かつたな」

自分たちのアジトで外を見ていた紅はしばらく様子を伺った。

紅の言うさつきの攻撃とは、パイフー・鬼武・等々力の三人による攻撃の事だが

その事を紅は知らない。

「だけど、もうすぐここでも同じ事が起る・・・」

紅の視線の先にあるモニターにはゲノムの姿が映っていた。紅はそれを見ている。

紅には全てわかつていた。ゲノムが自分を狙っている事を。

そしてゲノムがここへ現れたという事は、魔矢と羅刹は・・・。考えたくも無い事実だが、煉獄に向かつた魔矢と羅刹が、ゲノムに遭遇していない可能性は極めて低い。

そしてそのゲノムがここへ来たという事は、一人はゲノムに・・・。

そう考えるのが妥当だつたが、紅はそのシナリオを搔き消した。

魔矢と羅刹の一人が揃つてやられるはずがない。紅はそう信じている。

もはや後には引けない。紅はモニターの端にあるボタンを押した。このボタンはウルに緊急事態を伝える特殊なボタンである。ボタンを押したのと同時に緊急の伝言がウルの持つ携帯電話に繋がるようになつている。

例え留守電でもウルは必ず気付くはずだ。

「ウル、とうとうゲノムがやつて來た。これから迎え撃つ。もし生きていたらまた会おうね」

紅はそれだけ吹き込むと、ボタンを解除した。

「もし、生きていたらの・・・話だけどね」

紅は腰から天叢雲剣を引く抜き、鞘を捨てた。

「この刀を使うのも、今日が最後だね。鮫島のお兄さん、元気かな。

最後にもう一度戦つてみたかった」

紅はそれ以外何も持たず外へ出た。

「久しぶりじやん、ゲノム。相変わらず禍々しいね、お前は」

「ウルノナカマ・・・・ミツケタ・・・コロス・・・」

「お前なんかに殺されてたまるか。魔矢と羅刹はどうした！？」

「イマゴロ、アノヨ・・・・」

「そつか。だけどあの世へ行くのはお前だよ、ゲノム！！」

紅は天叢雲剣を両手で構えた。

紅の最後の戦いが始まる。

END

紅の天叢雲剣は確実にゲノムを斬り付けている。おまけに状況は明らかに紅の劣勢。

だが人間である紅の身体にはスタミナと言つものがある。人間ではないゲノムにはそれがない。

「明らかに僕の方が勝つているはずなのに」

紅の動きはもはや神業とも言える。あまりにも素早い動きに、その姿を視界に捉えることすらできないのだ。

だがそれでもゲノムの猛攻は留まる事を知らず、致命的なダメージとは言えないものの、ヒットしているのは事実だった。

素早い動き・・・逆に言えば「捕らわれたら最後」を意味する。ゲノムはそれを狙つているのだ。

「このままじゃキリがない。一気に決めるか」

攻撃を止めた紅はまっすぐにゲノムを見据え、こう言った。

「戦う場所を変える。僕を殺したいのなら付いて来い！」

紅はアジトの北西にあるプレハブへと走つた。無論、ゲノムも追つてくる。

とても綺麗とは言えない建物だが、紅に取つては慣れ親しんだ遊技場。

別名「処刑場」である。

プレハブの扉を開くと、紅は特殊なルートで奥へと移動し、正面を見据えた。

それとほぼ同時にゲノムが扉の前に現れ、紅を視界に捕らえた。

「ようこそ、僕の処刑場へ」

そこには世界中から集められた処刑の道具が納まつており、一つ一つがトラップとなつてている。

つまり紅が通つた特殊なルートを進まない限り、処刑のトラップが始動し、文字通り処刑されるという部屋である。

無論、紅としてはこれだけでゲノムを始末できるとは思っていない。

単純に自分の下へ来るまでの間

少しでもダメージを与えるようという作戦だった。

「数年前、お前と戦ったときは煉獄だったからね。僕の本当の強さを出せなかつたけど、今回は違う。

今はこの部屋がある、そしてこの剣もね」

「グルルルルル・・・・」

「来れるものなら来てみろ、お前がここまで来た時が最後だ」
ゲノムに反応は無い。あるのは強烈な殺意。ゲノムはそのまま直進で紅に迫つた。

同じ頃、人間の世界で一仕事終えたウルは紅の伝言を耳にし、さすがに驚愕した。

「バカなつ！ ゲノムが動くには速すぎる」

いくら数年経つているとは言え、ゲノムが本格的に動き出す時期ではない。

だが魔矢が言つていたように、前回よりも強くなつてているのなら、その可能性もあるのかも知れない。

「さて、仕事も無事終わつたわけだし、どうかね鉄君、宴会でも」「いや、俺はこれで失礼する」

ウルは焦つた。もはや一刻の猶予も無い。

「そうかね？ せっかく一流のディナーを用意していたんだが」「すまないが、もう行く」

そう言い残すとウルは大急ぎで魔界へと向かつた。

今回の仕事は都心から離れた場所で行なわれたため、魔界へ戻るまで時間が掛かる。

ゲノムが紅の前に現れたと言つ事は、魔矢はどうなつたのか・・・。そして同行しているはずの羅刹は・・・。

「まさか・・・・・」

ウルの脳裏に最悪のシナリオが浮かぶ。いずれにしても時間が無い。紅に死が迫っている。

「くそつ！」

ウルの悪い予感は、この後見事に的中する。。。

「そんなバカな・・・」

もう4つの処刑道具によつてダメージを受けているはずのゲノムだつたが、その勢いは衰えと言う言葉を知らない。

身体の至る部分が切断されても、ゲノムはその度に再生し元に戻つてしまつ。この辺はヴァンパイアと同じようだ。

姿形こそ変化しても、その殺意に変化は無く、より一層禍々しいものに変化している有様だ。

やはり処刑道具で始末できるほど生易しい相手ではなかつた。

これが通常の殺人鬼だつたら、トラップを抜け出せないままあの世行きだが、ゲノムは例外だつた。

「やつぱりこれに頼るしかないのか」

紅は天叢雲剣を構えた。ゲノムはもはや目の前である。

天高く跳躍すると、天井に仕掛けであつた岩石をゲノム目掛けて突き落とす。

だが俊敏な動きを見せるゲノムはそれを避けると、落下してくる紅に触手を伸ばした。

「うわっ！」

両足を掴まれた紅はそのまま大きく揺さぶられ、壁や地面に激しく叩きつけられる。

「ぐうう・・・・

しかしそれで終わる紅ではない。天叢雲剣で触手を切断すると、反撃に出た。

鋭い刃はゲノムの両腕と、軸になつてゐる足を切り裁き転倒した。

「一気に行くよ！――」

紅は再び跳躍すると、高い地点から一気に落下し、天叢雲剣をゲノムに突き立てた。

「ギュオオオオオオッ！！」

まるで悲鳴のような雄叫びが響く。突き刺さった場所から大量の血が流れ、紅に大量の返り血が舞う。

「お前さえ居なくなれば・・・お前さえ消えれば僕たちは！」

鬼の形相と化した紅は我を忘れ一心不乱に天叢雲剣で切り刻む。

それは魔界へ来る前、ウルに殺人を依頼したときの表情とソックリであつた。

「お前は魔矢を・・・羅刹も・・・死んじまえ！！」

紅の頭のネジが飛んだ瞬間に味わつたもの、それは呆気なく訪れた敗北であつた。

「なっ！・・・」、これ・・・は・・・」

あまりにも突然の事で何が起こったのか分からない。だが紅の身体はその名前の如く真っ赤に染まつてしまつた。

「か・・かああ・・・」

まさに一瞬だつた。ゲノムの身体から無数の触手が鋭い刃と化し、紅の身体を貫いたのだ。

それも一本や一本ではない。合計18本もの触手が紅の肉体の至る箇所を完全に貫いた。

首、両腕、両足、腹、胸、腰・・・18本の触手は全て紅の身体を貫通した。

「ウ・・・ウル・・・・」、『ごめ・・・ん・・・』

紅の口から大量の血が吐き出されると、紅の視界に闇が訪れた・・・。

「フタリメ・・・カンリヨウ・・・」

紅の身体から触手を突き放すと、ゲノムはピクリとも動かない紅に向かつてそう言った。

END

「一、これは！」

紅からの伝言を受け取つて1時間余りの時が過ぎた頃、ウルはようやく魔界へと戻ってきた。

珍しくウルの呼吸は激しく乱れており、大急ぎで戻ってきた事が伺える。

魔界はそれまでの風景とは一転し、至る所で炎と煙が立ち込めている。

明らかに何らかの戦闘があつた事が見て取れる。

特に酷いのが魔界の中心部。まさにウルたちのアジトがある付近だつた。

「紅・・・魔矢・・・」

ウルは我を忘れアジトに急いだ。

アジトの外觀に変化は無い。だが明らかに血の匂いがする。それも親しい誰かの。

しかしアジトに人の姿は無かつた。紅も魔矢も、そして同行している羅刹の姿も無い。

紅がウルに伝言を送るにはこのアジトにある機材が必要となる。となると少なくとも紅だけは近くに居るはずだった。

ウルの脳裏に浮かんだ場所があつた。それは紅の遊技場である。別名「処刑場」だ。

「紅！」

ウルは紅の名を叫びながら処刑場へと急いだ。

案の定、処刑場は乱れており、そこで戦闘が起こつたことは事実だつた。入り口のドアは開け放たれ中の様子が見える。

「紅・・・お前、まさか・・・」

ウルの視界に処刑場の中央で倒れている人間の姿が映つた。もはや見間違えなど有り得ない。それは変わり果てた紅だった。

「紅！！」

駆け寄るとウルは真紅に染まつた紅を抱き起こした。身体中から血が噴き出しており、意識は無かつた。

恐らくゲノムの触手が原因だろう。幸いな事に心臓部と頭に傷は無かつた。

ウルは咄嗟に紅の胸に耳を当てた。

「生きてる・・・紅、しつかりしろ！」

極わずかだつたが心臓の鼓動が聞こえた。だが鼓動は止まりかかつていた。一刻も早く適切な処置を施す必要がある。

その時ウルの背後で物音がした。

「誰だ！」

「ワ、ワイや・・・」

「羅刹！！」

そこには魔矢を背負つた血塗れの羅刹が居た。

「魔矢が・・・やられよつた・・・まだ生きとるが・・・急がな、あ、あかんで・・・」

紅に続き魔矢まで変わり果てた姿になつてている。

羅刹も魔矢との戦いで追つた傷が開いているようで、全身ほとんど血塗れだつた。

その後ウルは由佳に連絡を取り、魔界で唯一医療器具が揃つてている施設へと移動した。

この施設は地下に伸びており、地上からは見えない場所にある。

そのためゲノムに見つかる可能性も極めて低いのだ。

魔界で傷を負つた殺人鬼たちが自分たちの足で訪れ、自分たちで治療を施す場所である。

それでも専門の医師がいた。彼の名前は夜叉

数年前までは最上級レベルの殺人鬼だったが、今は殺戮を止め医師に専念している。

夜叉は運ばれてきた紅と魔矢を見て、即座に手術に取り掛かつた。

一人では手に負えないという事で、彼は由佳を助手に付け手術を行なつた。

羅刹の傷は紅と魔矢ほどではなく、元から治療に関する知識を持つていたことも手伝つて

彼は自分で治療を行なつた。身体中が包帯塗れになつたが、傷は浅く、すぐに立ち上がつた。

一人の手術は有に1-2時間掛かつた。

始まつて8時間が経過すると、助手の由佳だけが出てきた。どうやら後は夜叉のみで出来るらしい。

羅刹は由佳の反応が気になつた。いくら死んでいないとは言え愛する人があのよくな姿になつてしまつたのだ。

オペ室から出てきた由佳は何も言わず、そのままトイレに入った。そしてそれから1時間、彼女は出て来なかつた。。。

12時間後、夜叉はオペ室から出てきた。紅と魔矢はベッドに寝かされたまま別室へ運ばれた。

「夜叉、一人は・・・」

「ああ、実に危ないとこりだつたが、何とか一命は取り留めた」

「ホンマか！？」

一緒に居た羅刹が歓喜の声を上げた。そして少し離れた場所に居た由佳もホッと胸を撫で下ろす。

「だが危険な状態だ。まず紅だが、もはや一度と戦うことは出来ないだろ？」「うう」

「な、なんでや！？助かつたんとちやうんか」

「命はな。だが体の方はもはや限界。貫かれた神経は完全に使い物にならん。

オペによつて何とか繋ぎとめたが、戦いはもう無理だ。日常生活には支障は出んがね」

「魔矢は？」

「ウルが聞いた。」

「魔矢も同じだ。切り裂かれた瞼の傷は浅く、失明は免れたが、削がれたオリハルコン・オロチはもう再生出来ん」

この事実には由佳もショックだつたらしい。失明するよりはマシだが、事実上片腕を切断したのと同じだからだ。

「なんでやねん！！もつと良く診ろやーー！戦えへんのじゃ意味ないんじやーー！」

羅刹が夜叉に掴み掛けた。

「無理なものは無理なんだよ！あの状態で助かっただけでも良かつたと思つてくれ！」

「くつ・・・・」

「魔矢・・・・」

由佳は魔矢と紅の居る部屋へ向かつた。

それにつられる様に、ウルと羅刹も部屋に入つた。

紅と魔矢は身体中に包帯を巻かれ、静かに横たわつてている。口には呼吸用のマスクが付けられており重傷が伺える。

紅は意識が無い。魔矢も時折魔される様に動く程度だつた。

「ゲノムを見たのか？」

ウルが羅刹に聞いた。
「ああ。おぞましい姿やつた・・・魔矢はワイにゲノムが出た事を紅に伝えろ言うたんや。

それで戻つたんやけど、途中でゲノムがワイを追い越して行きよつて・・・心配になつて戻つたらこの有様やつた」

「そうか」

ウルは続いて魔矢のベッドの横で座つている由佳の背中を見た。背中を向けてるので表情は分からぬが、由佳の両肩が小刻みに震えていた。

決して人前で泣くような女ではないが、無理も無い。この姿を見たんじや・・・。

「由佳ちゃん、ワイ由佳ちゃんに誤らなあかんねん
「なに？・・・」

「ワイ、魔矢と一緒にあつたんや。せやから一緒に戦つ」とも出来た。けどワイは……

「良いよ、そんなこと」

「けど……」

「きっと魔矢が逃げろって言つたんでしょ」

「まあ、そんなんやけど……」

「だつたら誤る事ないじやない。それに、あなたが逃げるような人じゃないつて事くらい、私だつて分かつてる」

「ホンマ、すまん。ワイ、何も出来へんかった」

「ううん、してくれたよ。魔矢を運んでくれた。ありがとね」

羅刹の拳が震えた。これほどまで自分が情けないと思つた事はなかつた。

バーサーカーが聞いて呆れる……。羅刹は自分を不甲斐なく感じた。

だが不甲斐なく感じていたのは羅刹だけではなかつた。ウルも同じだつた。

共に戦つてきた仲間がこんな目に合わされた。もしあの時仕事へ行かず一人と一緒に居れば

紅も魔矢も、こんな姿になることは無かつただろう。

ゲノムを一番甘く見ていたのは他ならぬウルだつたのだ。

やはり魔矢の言つた通りだつた。蘇つたゲノムは以前にも増して凶暴になつてゐる。

静かに横たわる紅の隣に、ゲノムによつて折られた天叢雲剣があつた。

凄まじい怒りと憎しみがウルの心に広がる。

「二人を頼む」

「なんやで」

そつとウルは病室から出て行つた。

「おい、ちょっと待てやー何処行くねん！？」

「煉獄……ゲノムを倒す」

「バカかワレ！ワレ一人でどうにかなるとでも思つとるんか」「ヤツを倒せるとすれば、それは俺だけだ」

「仲間やられて頭のネジ一本飛んだようやなー今だからこそ魔矢が言つたように他の連中を見方に付けるべきやでー」「これ以上巻き込みたくない。これは俺とヤツとの戦いだ」

「あつ！ちょ、待て！コラ！」

そう言つたウルの目は心なしか悲しそうだった。

魔刹がウルを引き止めようとしたとき、病室から声が聞こえた。
「まだ動いちやダメだつて！」

「うう・・ウ、ウルは・・・ウルは何処に居る」

「ウルなら行つてもうた」

「羅刹」

そこには意識を取り戻した魔矢が由佳に押さえられていた。

「あのアホ、全然人の話聞かへん！じつムカつくわ

「ら、羅刹・・・これを」

「なんや？」

魔矢はポケットの中から一枚のメモを取り出した。

「ん？パイフー・鬼武、鮫島、等々力・・？・なんやこれ？」

メモには彼らの特徴と住んでいるであろう場所の住所が書かれていた。

「恐らくウルは煉獄へ向かつた・・・だ、だが、ウル一人で手に追えるほどゲノムは甘くない。

そこに書かれている連中は、最近魔界へやつてきた者たち。いずれも強豪ばかりだ」

「ああ、さつき話していた連中か。徒党を組むかも知れへんつて言う

「そ、そうだ・・・羅刹、ウルと合流する前に、そいつらを探し出し手を組め。」

癖のある連中ばかりだが、おそらく興味はつだらう。連中と徒党を組んでゲノムを倒せ」

「せやけど、ウルのヤツは誰とも組まない言つてたやん」

「それはヤツが勝手に思つてはいる事だ。実際に集めて向かえば、ウルも文句は言わないはずだ」

「そんなもんかね？名前の下に書かれとるんが住所やな」

「ああ、だが必ずしもその場所にいるとは限らん……移動していける可能性もある」

メンバーとしては紅と魔矢を差し引き、ウルを含めた合計6人という事になる。

「ええけど、どいつもこいつも遠いことにいそつやな」

「恐らくな。しかし心配は要らん。由佳の店の隣に大きなガレージがある、そこに車があるから自由に使ってくれ」

「ほほう、用意のええ男や。まあえ、分かつた。安心せえ、お前の仇はちゃんと討つたるさかい」

「勝手に殺さんでくれ……重傷とは言えまだ生きている」

「へへへ、そうやつたな。ほな、行つてくる」

「頼んだぞ・・・」

そう言つと羅刹は受け取つたメモをポケットに仕舞い、部屋を後にした。

「ちょっと待つて！？」

「ん？ なんや？」

引き止められた言葉の主は由佳だった。

「私も一緒に行くわ」

「な、なんやてつ！ そらあかんで！ 相手はゲノムやぞ」

「分かつてるわよ。ゲノムが蘇つた以上、何処にいても結局危険な

のよ」

「せ、せやけど・・・」

「魔矢も言つてた。いざつて時はここに居るよりも、あなたたちと一緒に居た方が逆に安全だろつて」

「でも魔矢はええのか？」

「あの人は大丈夫。自分でも大丈夫つて言つてた。魔矢と紅君は夜

又が付いていれば平氣よ」

強い女と言うのは由佳のような女の事を言つのだろう。最愛の人が
あんな姿になつてしまつたというのに

なんと心強い事か分からぬ。羅刹の心は度肝抜かれた。

「それに入探しながら一人でやるよりも一人の方がずっと速いわ」

「ま、まあそうやけど」

「私だつて魔界の住人なんだから。見過ごせない」

「わ、分かつた。それやつたら行こう。せやけど、約束や。全員が

集まつてゲノムと戦うことになつたら

由佳ちゃんはここへ戻る。それだけは守つてもううで。ええな?」

「分かつた」

二人は病院を後にし、ひとまず由佳の店へと向かつた。

END

主の戻つた煉獄の地下に地響きが轟く。まるで人々の憎しみを溜め込んだようなマグマが流れる。

久しぶりに激しい運動を繰り返し、体力の消耗したゲノムは、そのマグマの中で身を屈めた。

夥しい数の怨念が支配するこの醜い身体は、連續して動く事が出来ない。

圧倒的な強さを誇るゲノムでも、その辺だけは唯一の弱点である。携帯電話の充電をするように、疲労するとのマグマに身を沈めなければならなかつた。

だがしかし、もはや焦る事はない。ゲノムが動かなくとも、最大の標的は自分からやつて来るだろう。

そのターゲットを始末した後、この魔界を破壊し、表の世界へ出る。そのためにはヤツを始末しなきやならない。

我が子であり、我が最大の宿敵「神殺しのウル」を・・・・。

「しばらく使ってなかつたから大丈夫かな・・・
ガレージの扉を開けようとした由佳がそう呟つた。

「最後に使つたのは何時なん?」

「何時だつたかな、覚えてないけどもうずいぶん前なのよ

「それやと動くかどうか心配やな

由佳がガレージを開けると、そこには一台の車が停めてあつた。

「この、これつてブレイドやないか!・・・

ブレイドとはトヨタから出ている有名な車種の一つである。停まっているブレイドには少々ほこりを被つてゐるが、新車同然の代物だ。

「そうよ。魔矢が緊急用に使つたためにここに置いているの

「かあ～さすがリアル世界の警視総監やな。所有する車も超一流つてわけかい」

「ところであなた、運転は出来るの？」

「ワイか？ワイはな・・・そりやまあ・・・なんちゅーか・・・出来ないわけでも無いんやが・・・その・・・」

由佳の目が据わっている・・・。

「免許持つてないのね」

「ちょ、まつ、えつと・・・ガハハハ！！ワイ、車の免許無いんや・・・」

「まつたく！！ホント、世話が掛かるわね、アンタはーー！」

「しゃ、しゃーないやんか。ワイ、車興味無いねん」

「使えない男・・・・」

「そ、そんなあ～そないな」と言わんといてえな～」

紅・羅刹の「ンビよりも、羅刹・由佳の方が芸人向きである。無論、由佳も本心でそう言つているわけではない。羅刹と言つキャラがすっかり定着しているのだ。

由佳は運転席のドアを開け乗り込んだ。羅刹もそれに続いて助手席に乗り込む。

「由佳ちゃん、免許持つてるんか」

「まあね。トラックだつて運転できるわよ」

「ひええ～頼もしいわあ～羅刹ちゃん、ドッキドキ」

そう言つと羅刹は目を輝かせた。

「一度死ぬ？」

「じょ、冗談です。ハイ・・・」

抜け目が無いと言つた、緊張が無いと言つた。

「それで、何処行く？」

「そやな。とりあえずメモに書かれてるのはパイフー、鬼武、等々力、鮫島の4人や。

魔矢の調べに寄れば、パイフーと鬼武は一緒にいる可能性が強い。

鮫島は魔界の鍋蓋とか言つ場所。

等々力とか言うヤツに関しては消息不明つて書かれどるな

「ここから一番近いのは何処になるんだりつ」

「ん~と、ああ、住所が書かれどるな。一番近場はバイフー・鬼武

の一人。ここからすぐ近くや」

「じゃあ、近い場所から行つてみましょ~」

「おつしや！」

由佳はエンジンを掛けるとブレイブを起動させた。ブランド名の負けない排気量と運転環境である。

「ワイも今度車の免許取りに行こ」

「教官が気に入らないとか言って暴れな」ようにね

「そんなん、いくらワイでもそないな事せえへんよ

「そとかしら?」

「そつや。ワイだつてやる時はやる男やねん」

「やる・・・が殺るに変わらない事を祈るわ

「上手い!由佳ちゃんに座布団三枚や~」

何とも緊張感の無い一人である。

目的の場所に辿り着いた羅刹と由佳の目に飛び込んできたのはまるで月のクレーターのように凹んでいる広大な大地だった。

「なに、これ・・・」

「ここで何かあつたんやな。ま、明らかに戦闘やけどな」

大地の凹み具合から察するに、一定の方向から集中的に攻撃したと見て間違ひなかつた。

更に破壊された大地の規模から推測するに、少なくとも一人以上の人がいたのは明白である。

「ここで誰かが戦つたのかな」

「多分な。住居がこの辺である事を考慮すると、その中にバイフーと鬼武が含めていた可能性が高いな」

「魔矢の書いた住所に行つてみよ~」

「そいやな」

そこはすぐに見つかった。クレーターから離れる事およそ300メートル。

そこにバイラーと鬼武が居たと思われるアパートがあつた。羅刹は聖魔刀で鍵を外し、中に入った。部屋の中はつい先ほどまで住人がいたような痕跡が残つてゐる。

「どうやらさつきまで人がおつたようやな。けど何らかの理由で別の場所へ移動しあつたんや」

「あのクレーターが関係しているのかしら」

「そうやうな。多分二人を襲つてきたんや。勝敗はそうなつたか分からへんけど、それが原因で去つたんやな、きっと」

羅刹はしばらく部屋の中を調べた、由佳は外の様子を伺つてゐる。ベッドが酷く乱れているのが印象的だつた。バイラーの鬼武も男だと聞いていたが、まさか同性愛者なのだろうか・・・。

「ねえ、羅刹。ちょっと来て」

「どないしたんや」

「これ見て」

由佳はブレイドのすぐそばにあつたタイヤの後のよつた痕跡を指差した。

「これつてタイヤの跡だと思わない?」

羅刹はブレイドのタイヤと残つていたタイヤの形を見比べた。

「ホンマや。車のタイヤやな」

「思つんだけど、バイラーと鬼武の他に誰かが来たんじやないかな

「誰かが来た?」

「うん。この魔界で車を所有しているのつて、実は魔矢だけなのよ。この車も魔矢の物だし。

彼以外に、今まで魔界の住人が車を使うなんて聞いたことが無いわ。これにつちを見て」

羅刹は由佳の指差す方向を見た。そこにはわずかだが同じタイヤの跡が残つており、それは西の方角で途切れている。

「ここから西へ向かつてゐるわ」

「ははあ～ん。なんとなく見えて来たで。つまりこいつ言う事や。パイマーと鬼武は何者かを戦つとつた。

そこに予期せぬ誰かが車に乗つて現れた。二人の部屋に生活臭が残つていた事を考えると

二人はその誰かの車に乗つて逃げたんや。戦つていた相手があまりにも強すぎて」

「その戦つていた相手つて・・・もしかして・・・」

「ああ、ゲノムやろうな。ゲノムのヤツ、魔矢を倒して紅のどに行く前に、パイマーと鬼武を相手にしたんや」

「タイヤの跡、調べてみようか」

「そないなこと出来るんか?」

「それがブレイドの秘密なのよ」

由佳は得意げな表情で運転席に戻つた。そしてフロントガラスの横についていたモニターをオンにした。

「これはタイヤの痕跡を特定する機会なの。タイヤの痕跡を画像としてアップすると

その車が何処に向かつたのか、ある程度判別が付くの

「ほへえ～お利口さんやな」

「魔矢の持つている物つて全部便利な物ばかりなのよね」

由佳はタイヤの痕跡を撮影し、画像としてアップした。

するとモニターには「判別痕跡、西の方角。推定場所、魔界処理場」と表示された。

「魔界処理場つてなんや?」

「魔界のゴミ捨て場のような場所。使い古しの機械や武器などがまとめて捨てられる場所よ」

「そこへ向かつたつちゅうわけやな」

「そうだと思う。けど、なんで処理場なんかに・・・」

魔界処理場は魔界の最西端にある工場である。中心部ほど人の出入りは激しくは無いが、それなりに栄えている場所だ。

謎の車はその場所へ向かつた可能性が強い。

「由佳ちゃんは知ってるんか？その処理場」

「勿論よ。何度も行つた事あるしね。行つてみようか」

「レッシン・ゴーやー！」

羅刹と由佳を載せたブレイドは、魔界最西端「魔界処理場」へ向かつた。

END

ブレイドは約1時間ほど停まる事無く西へ向かつて走り続けた。

その間車内の羅刹と由佳は、時折冗談を交えながら会話を続けていたが

その流れを100%楽しむ事は出来なかつた。これで紅、魔矢が健全であれば言う事は無いが

今となつては魔界屈指の彼らは不在も同然。その頂点に立つウルは単独行動と来ている。

自分たちがこの戦いの鍵となる事を承知している羅刹の頭の片隅には常にゲノムと言うおぞましい存在があつた。本音を言つならもう一度と戦いたくない相手である。

しかし魔界に来た運命は決して変えられない。来てしまつた以上、関わらざるを得ないのだ。

それは新参者と謳われるパイフー・鬼武・鮫島・等々力も同じである。

彼らが自らの意志で魔界へ來た以上、ゲノム撃破と言つ現実から逃れる事は出来ないのだ。

関わりあう事を避けようとも、既にその魔界でド派手に動いている以上、無視するわけは行かない。

例え彼が協力する事を拒もうと、上級ランクの殺人鬼には絶対服従と言つてはいる限り、従わせるしかない。

魔界N〇・2、N〇・3を失つた今、ウルを覗けば次の実力者はN〇・4の羅刹が事実上のリーダーと言つ事になる。

本来ならウルがその役割を果たすはずなのだが、神殺しと言つ異名や魔界N〇・1などと言つ榮誉には興味の無いウルは

その権利はあっても義務は無いのだ。彼が魔界の掟を作つたと言つのなら適任なのだが

捷を作ったのは暗黙の了解であり、人工的な作為はない。

むしろ魔界を管理していたのは魔矢と言つて良い。魔界唯一の良心が魔矢であった。

だがその魔矢はもはや戦えない。となると否が応にも羅刹がそのポジションに来る事になる。

魔界と言つ突然変異的な場所を既に氣に入つてゐる羅刹に取つても、諸悪の根源を絶つ必要があると言つことくらい分かっていた。

「あれが魔界処理場よ」

左手でハンドルを握つたまま由佳が指差した。

「なんか、こつつ根暗な雰囲気やな」

「まあ「ミ捨て場だからね」

そこは夥しいほどに積み上げられたガラクタの山が無数に点在していた。

ガラクタの山はまるで堀のようになつており、その中央にある廃墟を守つてゐる様にも見える。

廃墟は4階建てのビルのような建物で、窓ガラスはほとんど割れており、コンクリートの壁も所々劣化が進んでいる。

「でも変ね。以前来たときはあんなもの無かつたんだけど・・・

「なんや?」

「屋上を見て。あれ、なんだろう」

羅刹と由佳は目を凝らして屋上を見た。そこには今にも発射しそうな大砲やバズーカが無造作に設置されている。

「ねえ!今屋上で何か動かなかつた!?」

「そか?ワイには見えなかつたんやけどな~」

と、羅刹が呑氣にそう言つた時だつた。

走るブレイドの進行方向で何かが落ち、大爆発が起つた。

「きやあああつ!~」

「ぐわつち!~」

由佳は咄嗟にハンドルを切り、難を逃れた。

「見て!屋上から誰かがこつちに撃つてるわ」

「な、なんやてっ！！」

屋上に設置された無数の大砲、そしてバズーカが火を噴いた。

「あわわわっ！あ、あかん！由佳ちゃん、避け！避け！」

「分かつてるわよーー！」

見事なハンドル捌きである。

ブレイド目掛けて飛んできた銃撃は、地面の至る所で大爆発を起した。

「コノヤロ！やめれ！！ワイたちは敵やないで」

いくら叫んだところでまだ距離があるため無駄だった。

「クソツッ！あの車の運転手レーサー並だぜ！全部避けやがつて！」
パイマーから受け取ったバズーカの弾を込めながら鬼武が言った。
「等々力の車とは別の車だよな。またバウンティハンターかよ」
やれやれと言つた表情でパイマーがごちる。

「こんな事なら等々力と一緒にけば良かつたかもな」

「冗談じやないぜ！アイツは鮫島の下へ向かつたんだろ？俺は嫌だからな」

今度会つたら殺し合い。それはパイマーと犬猿の仲である鮫島との暗黙の了解である。

「つたくこんな時に好きだの嫌いだのつて。世話が掛かる」

「お前に言われたくないぞ！黒猫！」

「ああ！？だ、れが黒猫だつて！？」

そんな痴話げんかをしている間に車はビルの真下で停車した。パイマーと鬼武は咄嗟に身を屈め、下の様子を伺う。

「おい、女がいるぞ」

望遠鏡で下の様子を見ているパイマーが言つた。

「俺にも見せる・・・。ホントだ、女だ。それに片割れは男か。
なんだあの真っ黒な服装は。センスねえな」

「ハーツクションー！ブルル、おお～がふ～誰やワイの噂しつるやつは」

「あんたの噂なんて誰もしないわよ」

「そ、そんなあ～呪れない事言わんといで～」

パイパー・鬼武 「なんだ、あいつは」

「ちよつとそこの人たちちーー！」

ビルの真下から由佳が叫んだ。

「な、なんだ一体」

二人とも手すりから下を見た。

「な、なんだてめえらはーー！」

「なんだじやないわよーーせつかくこいつから出向いて上げたのに、バズーカで攻撃するなんてバカじやないのーー？」

あやうく事故るこいつだつたじやないーー！」

その前に死ぬと思うのだが・・・・・。

羅刹はもはやあんぐりである。

「今そつち行くからね！首洗つて待つてなさいー！」

そう言つと由佳は猛然とビルの階段を駆け上がつた。

「パ、パワフルやな・・・・・」

「おこおこ、あの連中来るぞ。どうするよーー！」

「どうするたつて、ここ屋上だし逃げ場無いぜ」

「だから言つたんだよ。いきなり攻撃はヤバイつて

「しようがないだろ、あのゲノムとか言つモンスターだつたらどうするんだよ

「考えてみりやあのモンスターが車運転するなんてあり得ない話だぜーー！」

「い、今さら言つても遅いだろつが

と、その時、屋上に繋がる扉がバタンと開いた。

「ひいいーで、出たーー！」

「私は幽霊かーー！」

バイバーと鬼武が縮こまる。

「さあ、観念しなさいーーどっちー？バズーカ撃つたのはーー？」

「お、俺じゃないぜ」

バイバーは目の前で手を振った。

「お前！裏切るのかーー？」

「あんたねーー！」

由佳はズカズカと鬼武の前に歩み寄り、目の前で停まった。

「あんた、どうして神経してんのよーー死ぬとこだつたじゃないーー！」

「あ、当たり前だろーー殺す氣で撃つたんだからさーー！」

「敵じやないつて羅刹のバカが叫んだの聞こえなかつたわけーー！」

そ、そりや無理だぞ由佳 作者（＾＾；）

「聞こえるか！そんなもんーー！」

「ゼエーー・ゼエーー・バ、バカ言わんといてーー・ーーあ、あかん。足がもう限界やーー」

ようやく屋上に辿り着いた羅刹が半ばギブアップ状態でやつて來た。

「おいおい、大丈夫かよ」

今にも死にそうな羅刹にバイバーが近づく。そして肩を貸し、羅刹を立たせた。

「おおきに。な、なんで由佳ちゃんは息切れでないねんーー？」

「さ、さあなーー・ーーあの剣幕じや出るに出られねえーー・ーー」

由佳と鬼武の攻防は尚続く。

「あんたでしょ、鬼武つて男は」

「だつたらなんだつてんだ？」

「まったく曲がりなりにもあの巨漢の連れなら、もつとおじとやかにしたらどうなのーー？」

「な、なんだとーー！」

「あの巨漢つてーー・俺の事かーー？・・・・・」

パイマーが羅刹に聞いた。

「せやろうつな」

「あんた以外誰がいるつて！？」

「ひいい！ ゆ、由佳ちゃんマックス状態や……」

「こ、こええなこの女……良い女だけど」

「なにつ！」

パイマーの一言を聞き漏らさなかつたのは鬼武だつた。

「おい、パイ公！？ お前今この女の事良い女つて言つただろ！？」

嫉妬深い鬼武の矛先が変わつた。

「え、あ、いや……別に深い意味は無いぜ……うん……」

「コノヤロ！ 僕と言つ相手がいながらてめえつてやつは……」

「オホホ、彼言い事言つじやない。まあ、事実だしね」

「なに！？」

またまた力チンと来る鬼武。

「このアマア！ ……ちょっと可愛いからつて調子に乗るなよ……」

「フン！ 嫉妬深い女男に言われたくないわね」

「なんだとお……」

「なによつ！？」

パイマーと鮫島が犬猿の仲であるよつて、どうやら鬼武と由佳も犬猿の仲のようだ。

恋愛と言つ世界において、鬼武と由佳は常に愛身の側である。

分かり易く言い換えれば、本来の恋愛においては形式上、男がパイマーで女が鬼武と言つ構図になる。

つまり同じ女……鬼武からすれば「女役」だが、二人とも同じ共通点を持つてゐるという事になる。

そのため気が合つ合わないはどうしても露骨になつてくる。それが著しく悪い方向へ出るのが鬼武と由佳のようだ。

「ちょっと羅刹！ 私嫌よ、こんなヤツ仲間にするなんて！ ……」「ふざけんな！ おいパイマー！ 僕も嫌だぜこの女！ 気に入らねえ！ なんとかしろ」

パイパー・羅刹 「そ、そんなこと言われてもわ・・・」 (^ ^ ・・)

のマークなやり取りは、その後2時間ほど続いたとさ。

END

「ふうん。その等々力とか言つヤツは、鮫島とか言つ男の下へ向かつたつちゅうことか」

由佳と鬼武の喧嘩が鎮火したところで羅刹はパイパーからこれまでの経緯を聞いた。

ゲノムと遭遇し、等々力の手によつて難を逃れたパイパーと鬼武は、彼の運転する車でこの処理工場にやって来た。

「後のことば自分たちで好きにするんだな・・・」^{ヒヨヒヨ} つて行つちまつたぜ」

鬼武は由佳に背を向け押し黙つたままである。由佳もそっぽを向いて黙つている。

「等々力は鮫島と一緒にある可能性があるわけやな。なんや結構探す手間が省けそうやな」

「探す？俺たちだけじゃなく等々力と鮫島にも用があるのか？つうか、大体あんたたちは何者よ？

それに俺たちに何の用なんだ？」

ようやく口を開いた鬼武が聞いた。

「説明すると長くなるさかいに、どつから説明したろか迷うわ」

「私たちは神殺しウル一座の仲間。私の名前は由佳。こつちの関西人は焰 羅刹。

ゲノムを倒すためにあんたたちの力が必要なのよ。それで探してるのが」

「ゲ、ゲノムつてあの・・・」

パイパーの身の毛が張り詰める。

「戦つた事あるんやつたら、もう分かるやろ。あのバケモノを始末せなあかんのよ」

「でも待てよ。あんなバケモノ相手に俺らが居ても意味無いぞ。むしろあんたらの方が強いだろうし」

鬼武が言つた。

「その強い連中がやられよつたんや」

「やられた！？」

「N.O.-3の魔矢、それにN.O.-2の紅。一人ともゲノムにやられた。あの二人はもう戦えんのや」

「あの二人が・・・」

パイフーも鬼武も頭の中で魔矢と紅の実態を浮かべた。鬼武に居たつては魔矢にも紅にも会つた事は無い。しかしパイフーはあの二人が自分たちの住居を訪れてきたのを経験している。

リアル世界で起こつた20人殺しの主犯「神殺しウル」に惹かれ、やつてきた魔界で

そのウルよりも下のランクに位置する魔矢と紅だったが、その強さは一人が思つていてる以上に強大であつた。

無論、パイフーにしろ鬼武にしろ、その実力は常軌を逸しているが、それでも上には上がいる。

魔界に来た事を後悔している訳じやないが、考え方が甘かつたと思う節があるのもまた事実だつた。

ウルにしろゲノムにしろ、ここまで強大な連中がうろつく世界だと分かつていれば、魔界には来なかつたかも知れない。

「事実上、戦えるのはワイとあんさんたち二人。そして等々力、鮫島を含め、そこにウルを加えた6人しかおらん。

ワイが思うに、ウルとワイだけじゃゲノムを倒せるとは思へん。そこであんさんたちの力が欲しいつちゅうわけや」

「つまり仲間になれと・・・そういう事か？」

「ま、そんなとこや」

パイフーの質問に羅刹が答えた。

「俺らはそんなつもりで来たんじやないんだけどな～」

「要するに怖いんでしょう？ウルとゲノムが」

「んだとつ！このアマ！～」

犬猿の仲、由佳と鬼武の戦闘開始である。

「誰がビビってるって！？」

「あんたよ。良い？この魔界に住んでいて俺たちは関係ありません
なんて通用すると思つてるの？」

ここに来た以上、ランクの低い連中は上級ランクの言つ事に従うの
がルールなの」

「ノーヤロー、俺たちが低レベルだと言つのか！？」

「そうでしょ。あんたたちはノーラ。でも羅刹はノーラ4なのよ
「そ、そうなのか？」

パイフーが羅刹に聞く。

「まあ一応そういう事になっちゃうね

「そうかいそうかい！だけどお前は俺たちよりも下だらうがっ！
「当たり前でしょ！私は女！戦えません」

羅刹 「い、いや・・・ある意味魔界ノーラは由佳ちゃんや
と思つで・・・」

パイフー 「うん・・・俺もそう思つ

「それでもこりうして関わつていいでしょ。私だつて魔界の住人だか
ら

「ぐつ・・・生意気な女だぜ！――」

「こずれにしても命懸けの喧嘩になるけどな。無理にとは言わん。
せやけど来てくれるんやつたら助かるわ。

魔矢の言つたとおり、どうやらうつ強そうやしな

「俺は構わねえぜ。きっと神殺しのウルにも会えそうだし。何より
あのクソモンスターをぶつ殺すのは大賛成だ。

あのクサレモンスターにはやりたい放題やられたからな！――その借
りは返さねえと気が済まねえ！！

パイフーが両拳を床に叩きつけた。そこに小さなクレーターが出来

た。

「だつてよ、どないする？ 鬼武はん」「どうするって言われてもな・・・パイパーが行くなら行くしかないわけで」

「じゃ、決まりね。車の準備してくるわ」

由佳はそう言うと出て行った。

「それにしてもあんたがノ・4ねえ、正直そんな風には見えないが・・・。それを言うと紅も同じか」

美貌の紅を思い出し、パイパーは口をつぐんだ。見かけで判断できないのが魔界である。

「刀持つてるって部分では鮫島と一緒にだな」

鬼武がそう言つと

「なあ、鮫島のとこにも行くんだり？」

とパイパーが羅刹に聞いた。

「勿論や。なんや？ 問題でもあるんかいな」

「こじつと鮫島仲悪いんだよ」

「ほつゝ鬼武はんと由佳ちゃんみたいなもんかいな」

「あのヤロー、ムカつくぜ！！」

「ませやけど、今回だけは嫌々でも協力してや。さつき由佳ちゃんが言ったように、あんさんたちは自分たちの意志で魔界に来たんや。自分たちだけ知りませんは通うんで。等々力も鮫島も同じやけどな」

「ケツ！ 分かってるよ」

「んで、その等々力はどこに行つたんや？」

「あいつは鮫島をリアル世界に無事生還させるのが目的の一つだから。今頃多分魔界の鍋蓋に向かつたんじゃないか？」

「まだ魔界の鍋蓋にあるんか？」

「いや、等々力の話では鮫島が本当に茨木童子が死んだかどうか確かめたいって言い出して

戻る前にもう一度魔界の鍋蓋へ行くつて言つてたぜ」

鬼武がそう説明した。

「ほんじゃ、決まりや。次の目的地は魔界の鍋蓋や」

パイパー・鬼武と書いたモノが加わった。

END

25・殺人鬼3人、美女1人の旅

ブレイドは魔界処理場を離れ、魔界の鍋蓋へ向かっている。茨木童子を撃破した鮫島が、本当に茨木童子の死を確認するために、再び魔界の鍋蓋を訪れているという。

そしてそんな彼を無事生還させる任務を担っているのが等々力と言う男だった。

いずれにしても奇妙な連中だなと羅刹は思った。数多の修羅場を潛り抜けて来た羅刹の洞察力から推察するにパイファー・鬼武両名の強さはほぼ互角と見ていく。パイファーの特徴と鬼武の特徴は似ても似付かぬがそれぞれが独立した個性を攻撃に変える力を持つている。敵に対する攻撃の違いも顕著である。

その破壊力たるや常軌を逸しているのは明白だった。それに鬼武から得た情報を分析する限り、等々力と言う男もこの二人に勝るとも劣らない実力を持つているように思う。

二十代前半にして、優秀な傭兵と言う経験としばしば抜けた記憶力。一度敵に回すと、命を落とす確率が天井知らずに高くなる。逆に、運良く味方につけると、彼以上に頼もしい奴は居ないと鬼武は言う。

一方、パイファーと犬猿の仲である鮫島に關しても同様のことが言える。

年齢・38歳。実年齢より若く見えるが、凄腕のスナイパーであり、21世紀の剣客。

傭兵だった経験もあるらしく、あらゆる武器・重火器を華麗に使いこなす。

しかし鮫島の持つ強さが最も力を發揮するのは、間違いなく彼の愛刀「鬼三」だろう。

刀であるにも関わらず自らの意志を持ち、持ち主である鮫島に力を

貸している。

魔矢の情報に寄れば、鮫島は以前、紅と手合わせをしており、その際に紅に傷を負わせたと聞いている。

いくら天然少年とは言え、魔界N.O.-2の紅にダメージを与えた辺り、やはりその実力は計り知れない。

羅刹は病院から出るときに、意識を取り戻した紅が言っていた事を思い出した。

「鮫島のお兄さんに会つたら、絶対に死なないでねって伝えて」と紅は言った。

羅刹には紅のこの発言が何を意味するのかは分からなかつたが同じ刀を持つ者同士としての「絆」のようなものがあるのだろうと個人的にそう思つていた。

逆に羅刹が紅の立場だつたら、羅刹も同じ事を言つていたかも知れない。実に奇妙な話だつた。

等々力と鮫島の間には奇妙な上下関係が存在するようで、その詳細は明らかではないが、いずれにしても等々力、鮫島の二人も、その実力はおよそ互角と見ている。

殺し合いの死闘を繰り広げた経験のあるパイフーと鮫島。

その勝敗が両者痛み分けであつた事からも、パイフー、鬼武、等々力、鮫島の4人の実力はほぼ平行線であると言えるかも知れない。それならそれで都合が良い。それだけの強さがあるならむしろ頼もしい限りだつた。

「にしてもウルのヤツは何考えとるんやろな

「そうだ！そのウルは今どうしてんだ？」

羅刹の言葉を聞いて鬼武が質問した。

「今頃ゲノムのどこへ向かつとるやうつな。もう居場所は割れどるから急ぐ必要も無い。多分歩いて行きよつたはずや

「お前たちみたいに一緒に行動はしないのか？」

「度はパイマーが聞いた。

「ウルは人と一緒に行動するのは嫌いなのよ。例え仲間の紅君や魔矢であつてもね」

「それに、あのゲノムつてのはウルの母親らしいからの」「は、母親！」

見事にパイマーと鬼武がハモつた。

「あのバケモノ・・・女なのか・・・」

「元はな。今じゃウルたちに殺された殺人鬼たちの怨念の塊やけど、原型はウルの母親やつたらしい」

「ウルとしては自分でケリを着けたいんだと思うの。自分のせいで仲間が犠牲になつたと思ってるだろうから」

「そないな優しいとこあるんかいな？あの男に」

「ウルは口数が少ないだけで、本当は優しいのよ。神殺しなんて言われているけど、あれは殺し屋をやつているからそう言われているだけで、彼にとつて殺しは仕事なの。だから彼は自分の意志だけで人を殺したことなんて無いはずよ」

「なんか、想像していた神殺しとは違うんだな」

パイマーが頭を搔きながら言った。

「そりやあなたたちが想像している通り、凄く強いし、負けた事もないけど実際はそういう人なのよ」

「ははーん、何となく紅と魔矢が慕つた理由が分かりそうや」

「俺、以前コンビニで神殺しウルに会つたんだけど、そん時に思つた。実は一番人間らしい殺人鬼なんじやないかなつて」

「人間らしい？」

パイマーが反芻する。

「ああ。なんて言つか、単純に独立しているだけっぽい感じつて言うか。普通に会話の返事が返つてきたからさ」

「何考えとるんだか分からんようなヤツやからな」

「なあ、魔界はウルが居ないとダメになるのか？」

パイマーがそれとなく聞いた。

「もしウルが居なかつたら魔界の秩序は無くなるわ。ウルのようない物言わぬ鬼のような人が居るからそれを恐れてみんな魔界のルールに従うのよ。不動明王のような人ね」

「ああ、なるほどな。それごつつかかるわ」

「それにあなたたち一人だつてそうでしょ。ウルと言う存在がなかつたら、あなたたち好き勝手やつてたでしょ」

「うつ！・・・・・」

団星である。

自分たちよりも上の存在がなかつたら、パイマーも鬼武も好き勝手に殺人鬼たちを相手にしていただろう。それはつまり先ほどパイマーの言つた「ダメになる」を意味している。

「ウルつて殺人鬼っぽくないのよ。私からしたらあなたたち3人の方がよっぽど殺人鬼らしく見えるわ」

「そうかも知れねえな」

パイマーが一人でごちる。そして続けて話し出した。

「結局のところ、俺たちの行動つて特に意味がねえもんよ。暴れる目的も無ければ、何かを守るつて事でもない。

でもウルは違う感じだよな。俺たち勘違いしていたのかも知れねえな」

「言われて見ればそうかも知れへん。好きなだけ殺して好きなだけ暴れてきたのはワイも同じや」

「だからウルの存在は必要なのか」

鬼武が静かに言つた。

「そう言う事。ウルが死ぬ事は魔界の消滅を意味する。まあ、ウルが死ぬとは思えないけどね」

なんだか自分たちがとても小さい存在のような気がした。自己主張

はウルよりも羅刹たちのほうが上である。

だが人間としては圧倒的にウルのほうが上なのかもしない。無意味に人を殺さないという部分が特にそう思えてならない。

「見て、もうすぐ着くわ。あれが魔界の鍋蓋よ」

フロントガラスの向こうにはいかにも禍々しい空間が広がっていた。

「おい、あれ等々力の車だぜ」

鬼武が指差しながら言つた。

「本当だ。あの車だ、俺たちが等々力と一緒に乗ってきたのは

バイバーが続く。

「等々力とか言つ男があるのは確かみたいやな。これで鮫島もおれば一石二鳥や」

「まあ何気に私、等々力つて人も鮫島つて人も一度会つているんだけどね」

「えええつー?」

羅刹、バイバー・鬼武が同時に叫んだ。

「以前、一度だけ店に来たのよ。ただ一瞬見ただけだからどんな人だったかは良く覚えてないけど

バイバー・鬼武 「只者じやねえ……この女……」

「一気に行きましょー」

「おつしゃ！」

魔界の鍋蓋は目の前まで迫つていた。

END

「気は済みましたか？鮫島さん」

先ほどから一点のみを見つめている鮫島に等々力が話しかけた。

「ああ。どうやらちやんと始末できたようだ」

「当然だ。兄の獣斬じゅうせんがその命を賭けた相手だ。生きているはずが無い」

鮫島の手に握られている鬼三が言った。

「悲しいか？鬼三。兄を失つて」

「少しだが、それが兄の運命だつたんだろう。俺とお前が無事でいる。それが一番良い結果だ」

鬼三は静かにそう言った。

茨木童子との死闘の後、傷付いた身体がどうにか回復の兆しに向かうまで療養していた鮫島だつたが自分が本当に茨木童子を始末できたのか、実はその真意を確かめられずに終わったのだ。

茨木童子が消滅したときには既に鮫島の意識は無く、自分の目での死を確認できなかつたのだ。

そのため鮫島は魔界を離れるその最後に、本当に茨木童子を倒した事を確認しておく必要があつた。

だがその心配は無用だつた。鮫島は確かに茨木童子を始末した。これで依頼は果たした事になる。

となればもはや魔界にいる必要は無い。こんな危険極まりない場所からは離れるべきだつた。

しかし鮫島の頭の中には気になる事があつた。何を隠そう魔界に降り立つた直後に出会つた紅と叫う少年である。

あの時の感触は忘れるにも忘れられない。強豪を相手に恐怖を感じたのと同時に、襲ってきた好機な感触。

刀を持つ者だけが感じる、いわば「同士」のような感触は鮫島に根

付いていたのだ。

鮫島は見抜いていた。あの少年が自らの最大の敵である茨木童子を、遙かの凌ぐ強さを持つてゐる事に。

本当に魔界を去つて良いのだろうか・・・。

「そろそろ行きましょう、鮫島さん。あまり長居をすると厄介な事になる」

「何か思い当たる節もあるのか？」

「ええ、まあ。実はバイパーと鬼武も魔界に来ているんです」

「なんだとつ！？」

どうやら鮫島はその事実を知らなかつたらしく、まあ当然である。彼は魔界に降り立つた直後にこの魔界の鍋蓋を訪れている。他の場所との接触はないのだから、知らなくても当然である。

「連中と会つたのか？」

「ええ。ついさつきね。それに今魔界はヤバイですよ。ゲノムとか言つ超凶悪なモンスターまでいる」

「モンスターとな」

鬼三がいぶかしがつた。

「俺が掴んだ情報に寄れば、魔界NO.3の魔矢という男が、そのゲノムにやられたそうで

ウル一座はゲノムを倒そつて田舎んでこるらしいんですね。ホント、危なつかしい連中です」

「聖よ、あまり関わらない方が良さそうだな

「ああ、そうだな」

鮫島の返事は素つ氣無かつた。何かを迷つてゐるような、そんな返事だ。

「その時だつた。

「グオオオオオオオオ」

「な、なんだ！？」

突然雄叫びのような声が響いた。場所はこの魔界の鍋蓋とは正反対の方角。この世のものとは思えぬ抱擁だつた。

「凄まじい殺氣・・・聖、こいつは茨木童子以上の・・・」

「ああ、とてつもない力を感じる・・・」

「ゲノムだな、きっと。急ぎましょう、鮫島さん」

「ああ」

等々力がきびすを返し、乗ってきた車に向かおうと思つた時だつた。

「ちょっと待ちいやーおー一人さん！」

一台の車がまるでレーサーのよつなドリフトを見せながら、等々力の車の真横に停車した。車種はブレイドである。

「ああ、どうやら遅かつたようですね」

「なに？」

車の扉が開くと、そこには見慣れない男が一人と見覚えのある女が一人。

そしてかつて殺しの死闘を繰り広げたバイパーの姿があつた。

「久しぶりじゃねえか、鮫島」

「バイパー！ なんでここに」

鮫島は目を見張つた。

「やれやれ、手遅れだ」

等々力が頃垂れた。

「一体何者だ、こいつらは」

鬼三つが言つた。

「等々力はんと鮫島はんやな？」

「そうですが」

「そうだが、俺たちに何のようだ？」

「あれが鮫島か・・・」

鬼武は初めて見る鮫島の姿に少々驚いた。バイパーからある程度は聞いていたが実物を見ると、その佇まいには威厳が感じられた。

「ワイスは焰 羅刹。こつちは由佳ちゃん。んで、こつちはもう知つとるやろ？」

「まあな。いざれケリを着けなきやいけない相手と、その相棒」

「ケツ、いざれケリねえ。その前に誰かに殺されなきや良いけどよ

犬猿の仲、パイパーが言った。

「お前がな」

「んだとつ……」

「待てやー。」ひちの話はまだ済んでないんや
羅刹がそつ言つと「一人とも口をつぐんだ。

「貴方は・・・あの時の！？」

「お久しふりと、言つべきかな」

「由佳さんでしたね。あの時は助かりました」

由佳を前にした等々力の顔は少々だらしなかった。まあ無理も無い。
由佳ほどの美女を前に照れぬ男などいない。

「騒々しくなつてきたな」

「ほほう、あんさんが鬼三はんか」

「！？ 貴様なんで知つている？」

鬼三がそう言つた。

「ワイたちに知らん事なんかないんや。あんさんたちませーで茨木
童子と戦つたんやろ」

「魔界と言つのはびうじていつも見抜かれるんだかな」

鮫島がやれやれと言つた様子で言つた。

「倒したみたいだな、茨木童子」

「当然だ。お前、鬼武とか言つヤツだな。腐れヴァンパイアの世話
は何かと疲れるだろう」

「ゴルア、鮫島！－てめえ喧嘩売つてんのか！？」

「どつかの誰かと同じ事言つてやがる」

鬼武は等々力を見た。

「ん？ 僕ですか？さて、そんな事言いましたかね？」

等々力はしらばっくれている。

まったく持つてまとまりが無い・・・。

「ちょっとストップ！皆黙つて！？」

見かねた由佳が叫んだ。一同凍り付く。

「やっぱこの女怖え・・・」

「羅刹、一人に説明してあげて」

「ほいわ」

静まつたところで羅刹が話し始めた。

「とある事情でこっちの一人には協力してもらひ事になつた。ワイと由佳ちゃんはウル一座の仲間や。

まあ本来ならあんさんたちとは関わり合ひの無い関係やが、ちょっと状況が変わつてもうてな」

「今さつき聞こえた雄叫びの持ち主と関係があるのか？」

鮫島が言つた。

「」名答、ゲノムつてヤツや。簡単に言ひと、そのゲノムを倒すために力を貸してほいって事や」

「へえ、それでそつちの一人は承諾したんですか」

「そういう事や」

等々力の質問に羅刹は答えた。

「いちいち我々の力を要する事は無いだらう。そつちにはウルを始め、魔矢、そしてあの紅と言う少年も居るんだらう？」

「その魔矢と紅がやられたんだとよ」

バイバーが言つた。

「なにつ！」

「バカな！魔矢と言つ男は良く知らんが、天叢雲剣を持つたあの少年が！」

さすがに驚いたのか鬼三が叫んだ。

「それで、あの少年はどうなつた？」

「心配すな。ちゃんと生きてる。そつそつ、あんさんになえてくれつて伝言頼まれとるんや。

絶対に死なないでね・・・だつてよ

「あの少年・・・」

鬼三を握る手に自然と力が入つた。

「あの少年をやつたのは・・?・・」

「ゲノムや。天叢雲剣もへし折られた」

鬼三の問い掛けに羅刹がそう言つた。

「どうや？ 紅を半殺しにまでさせた相手や。剣客として興味あらへんか？」

無いわけが無い……。宿命の相手になりえたあの紅が倒されたのだ。ゲノムとはいかなる相手なのか……。

「等々力さん、あなたの力も貸して欲しいんだけど」

由佳が等々力に聞いた。

「僕ですか？ そうですねえ、じゃあこういうのはどうですか？ ゲノムを倒したら僕と一度デートしてください」

「な、なんやとつ！ ゴルア！ ！」

すかさず羅刹が噛み付いた。

「ワレエ！ なんやその条件は！ ！」

「アイタタ・・・・離してくださ」よお、交換条件ですつてば

「由佳ちゃんはワイとデートするんや！ 手え出すなヴォケ！ ！」

「誰があんたとデートするのよ」

冷ややかな視線が羅刹に注がれる。

「良いじやないですか、減るもんじやないんだじい～等々力、愉快な男である。

「なんなんだ、こいつらは・・・」

鮫島もパイマーも鬼武もポカンと口を開けるより他になかった。

こんなんでゲノムを倒せるのかどうか……。

一人頭を悩ませる由佳であった。

END

「分かったわ。あなたの条件飲みます」
由佳がそう言つと
「ええええっ！？」
羅刹と等々力は共に驚いた。
「なんでワレが驚くねん！！」
「あ、いや、だって、まさか通るとは思つてなかつたもので」
「言つておくけど、データだけだからね。その辺勘違いしないでよ
ね」
「え、ええ。勿論です」
しどりもどりの等々力。
「そ、そ、そなんあ～ワイと言つ男がいながらそりゃないでえ～」
「誰が私の彼氏だつて？」
由佳は羅刹の首を思い切り締め上げた。
「ぐ、ぐるじい・・・・・」
「まつたく・・・・」
「俺たち、そういうの無関係で良かつたよな」
「ああ」
鬼武とパイマーが頷いた。
「やれやれ、馬鹿馬鹿しくてやつてられん」
鮫島が背を向けた。
「鮫島はん、力貸してくれへんか？」
「俺の仕事はもう終わつた。依頼はちゃんと果たした。どれだけの
力を持つているか知らんが
手を貸す道理は俺たちには無い」
「どれだけの力つて、そりやワイの事かいな～ワイは聖魔剣士。こ
の刀は・・・・」
「知つている。聖魔刀だろ？」

鮫島が聖魔刀の事を口にするとい、その場が一気に緊張感で張り詰めた。

「ほつ～よう知つとるな。さすが同じ剣豪や」

「あの紅と言う少年に聞いた。自分たちの下のランクには羅刹と言ふ男がいて、その男が聖魔刀を操るとな。

つまりお前は魔界のN.O.-4だな」

「余計な説明は要らんよつやな。気になるんやつたら試してやつてもええで。ワイの聖魔刀の切れ味をな」

「俺が依頼主以外の仕事を受け入れるとしたら、それは自分と互角か、あるいはそれ以上の人に頼まれたときのみ。お前の実力も知らないまま、はい、そうですか。と、引き受けたわけにはいかん」

「それはつまり、ワイと戦つてから決める……やつにう事やな？」

「そうだ」

「聖よ、本氣か？ 聖魔刀は天叢雲剣とは別の魔力を秘めた魔剣だぞ。それにある羅刹とか言う男

聖魔刀以外にも何か得体の知れないものを感じる」

「本氣だ。紅とも最初はそうだった。これは刀を持つ者同士の宿命

「ええやろう。相手になつたるさかい」

「ちょっと待ちな！！」

羅刹と鮫島が一步前に出たとき、羅刹の後ろからパイフーが飛び出した。

「なんや？」

「引っ込めパイフー。貴様に用は無い」

「用は無いだとつーふざけるなよ。てめえ、せつきから聞いてりやすいぶん偉そうじやねえか！！」

「フン！ それを言つだけの事はしているんでな。貴様と違つて」

「ここは魔界だ。魔界にはルールがある。どういう経緯でこいつが魔界のN.O.-4になつたか知らねえが

その下の20・5は俺と鬼武なんだぜ。だったらまず俺と勝負するのが筋つてもんだろ」

「ずいぶん奇想天外な発想やな」

「こいつとは昔ガチの殺し合いをやつてる。勝敗は痛み分けだったが、いずれケリを着けなきやならねえ。下のランクから戦つていくのが順当つてもんだろ」

「なんだか大変な事になつてきましたねえ」

「私には理解できないわ」

等々力と由佳がぼやいた。

「おい、バイバー。何も今やらなくなつて」

続いて鬼武が言った。

「いや、こういう機会でもなきや力チ合わないだろ? つからな」

「つまり俺とケリを着けようと、そう言う事か」

鮫島が言った。

「そういつこつた」

「なんや予定外の方向に行つてもうたな。まあええわい。せやけど殺し合いはあかんで。この後二人の力が必要なんや。地面に倒れた方の負け、それでええな?」

「おうよー」

「よかう」

バイバーと鮫島が向き合つた。

予想外の展開に予想外の死闘。その結末やいかに・・・。

END

28 パイフー vs 鮫島 聖、一度目の直接対決！？

未知数とは言え、少なくともこれでパイフーと鮫島の力量は計れると、羅刹は思っていた。

どっちが勝とうが問題は無いが、彼らの実力を見るには「対決」と言う形式は打ってつけである。

肉体的な強さを滲ませるパイフーは拳による直接攻撃タイプ。鬼三と言う刀を操る鮫島は刀による攻撃タイプ。いずれにしても興味深い戦いだ。

同じ刀を扱うと言つ部分では羅刹と同タイプである鮫島だが、自らの意志を持つ鬼三をどのように捌くのか。その辺も含めて気になるところだ。

「凄い事になつたな」

鬼武が呟いた。

「前回はケリが着かなかつたんでしょ？」

「ああ。どっちも強すぎて痛み分けだつたからな」由佳の問いに鬼武は少々興奮気味に答えた。

「今世紀最大の喧嘩・・・そんな感じですな」

「呑気なこと言つてる場合ぢやうで」

どこか呑気な等々力に羅刹が正した。

「昔お前と戦つたときの事が妙に懐かしく思えるぜ」

「あの時はまだ手の内を知らなかつたからな。でも今は違つ鮫島は鬼三を構えた。

「お前のそのオンボロ刀が強いか・・・」

「それとも貴様の隆々筋肉が強いか・・・」

「勝負！？」

鮫島は戸惑う事無く鬼三を抜き、一直線にパイフーへと駆け寄った。それを見抜いていたパイフーも先制攻撃に転ずるために身体を反すうさせる。

しかし鮫島もまたパイフーの行動を見抜いており、パイフーの鋭い爪が直撃する前に上空へと舞い上がった。

「おらあ！！！」

「ぬううん！！」

振り下ろされた鬼三は怪力を誇るパイフーの爪の間で鈍い音を響かせながら、その動きを止めた。

「コノヤロー」

「フン！」

解き放たれた矢が散つていぐよに、凄まじいスピードで両者の攻撃が続いた。

「こりゃ凄い・・・早すぎてよく見えませんよ」

等々力は目を凝らして見ていた。

「二人とも初めてやり合つた時より強くなつてやがる」

鬼武が感心した。

「私には一人がどうなつているかさえ見えないんだけど」

「スピードは鮫島の方が若干上やな。ただ攻撃力だけで見ると、圧倒的にパイフーの方が上」

せやけど、鮫島には鬼三がある。この勝負、長引きそうやド

もはや幾度と無く繰り返した競り合いで、一時的にその攻撃を止めた二人は、敵ながら関心していた。

どちらも前回よりも確実に強くなつている。

「やるじゃねえか、グラサンヤロー」

「貴様もな、腐れヴァンパイア」

パイフーにしても鮫島にしても想定外の強さだと黙つて良い。お互に擦り傷、かすり傷程度なら負つていいが

まだ致命的なダメージにまでは至つてない。どちらかが地面に倒れ

ればそれで終わりなのだ。

パイマーにはパイマーの、鮫島には鮫島の意地とプライドがある。負けるわけに行かなかつた。

「行くぜ！！」

仕掛けたのはパイマーだつた。その巨漢からは想像も出来ぬスピードで鮫島に迫ると、そのまま拳を繰り出した。

「バカの一つ覚えとはこの事だな！！」

もはや見据えていた鮫島は、左斜め下から鬼三を斬り上げた。しかし、そこまで単純なパイマーではなかつた。

「な、なにつ、ぐはああつ！！」

鮫島の脇腹にパイマーの強烈な左足の蹴りが入つた。拳はフェイントだつたのだ。

鮫島はそのまま巨大な岩へ激突した。しかし倒れるまでには至らなかつた。

「へへ、毎回同じパターンじゃつまらないだろ」

パイマーが得意げに言つた。

「さすがパイマー。あれを受けたんじゃちょっとキツイぜ」

鬼武が言つた。

「油断したな、鮫島さんよお」

「それは貴様も同じだろ」

「なにつ、うお！！なんだこりや！！ぐううう・・・」

パイマーの両腕に切り刻まれた跡が浮き上ると、そこから鮮血が飛び散つた。

蹴りを食らつた一瞬に隙に、鬼三が自らの意志でパイマーを切り刻んだのである。

倒れては居ないとは言え一人とも息が上がつてゐる。

乱れた呼吸によつて肩が大きく上下し、苦戦しているのが一目で分かつた。

「ここまで来ると意地の張り合いだな」

鬼武が呟いた。

「せや、そもそもなんであの一人は仲悪いんや？」

「俺にも良く分からんんだよな、その辺は。まあ似たようなタイプって事は確かなんだけど」

「二人ともプライドが高いんじゃないですか？そんな気がするんですけど」

鬼武と等々力がそう言った。

「私には子供の喧嘩に見えるけど」

羅刹・等々力・鬼武 「それは禁句でつせ！」

「そろそろ止めといた方がええな。ゲノムとの決戦前に疲労したんじゃ、話にならん」

羅刹は次の交戦を見計らつた。

同じ程度の疲労ならそれは一触即発の前触れ。

身構えたバイフーと鮫島は次が最後の一打になる事を悟っていた。

「これで終いだ」

バイフーは尖った爪を一舐めした。

「かかって来い」

「行くぞ！！」

今度は鮫島から飛び出した。身構えたバイフーの右肩に鬼三が食い込む。

しかしその反動を利用したバイフーの拳も、鮫島の腹部に打ち込まれた。

「ぐはああっ！！」

一瞬、宙に浮いた両者はそのまま腰から地面に叩きつけられた。二人とも倒れていないが、尻餅をついている。

「ほい、そこまでや」

「なにつ！！」

「まだケリは着いてないぞ」

「もうええや。」そのままやつても同じ事や。あんさんたちがびつちも敗北や」

「バカな！ まだ戦える！」

「俺だつてやれるぞ」

「アホ抜かすなや。真剣勝負で一度地面に尻着いたらそれは何を意味する？ 死やで」

「くつ・・・・・」

「今はあんさんたちだけやから問題ない。せやナビこれがゲノムやつたら、二人もジ・エンドや」

「チツ・・・・・」

剣客としてその意味を知つてゐる鮫島は鬼三を鞆に収めた。羅刹の言つとおりである。

「クソツ・また痛み分けかよ」

パイフーがごちた。

「どうする鮫島はん。これで納得しそうたか？」

「いや、まだだ」

「なんや、まだ何があるんかいな……つたく、融通の利かんやつちやのう~」

「お前の実力が知りたい。それだけだ」

今度は鋭い視線を羅刹に向けた。

「まあええけど。面倒なやつちやな~」

「鮫島さん、止めて置いた方が良いと思つ。あなたまだ傷が完全に癒えて無いでしょ？」

そんな状態で羅刹と戦うなんて自殺行為と同じ。アイツかなりいい加減だけど、強さはまさに鬼神よ」

「いい加減・・・が、邪魔やつたな~」

「ちょっと興味あるな・・・あの関西人がどんだけ強いのか

「そうだな、それは僕も一緒」

鬼武と等々力が交互に言つた。

「だからこそ戦つてみる必要がある。頼まれた相手の強さを知らず

して、力は貸せない」

「あまり無理をするな、聖よ」

「大丈夫さ」

「鮫島さんもこだわりますね」

等々力が半ば呆れたように言った。

「ま、ええ機会や。ワイがどんだけ強いか見せたる。そうすりやち
ょつとは協力的になるやろ。

せやけど、さすがに連戦は辛いや。ええ事思い付いたで、なあパイ
イちゃん」

「バ、パイちゃん!-?」

勿論、パイマーのことである。

「連戦続きの鮫島はん一人じや心元ない。せやからパイちゃん、鮫
島はんに加勢してええよ」

「なつ、なに!-!」

「つまり2対1か」

「フン、舐められたもんだぜ」

鬼武に続き、鮫島が言った。

「冗談じやねえ!-!なんで俺が鮫島に着くんだよ!-!」

「ええやんか。仲直りするええ機会や」

パイマー・鮫島「そんな機会、いらねえよ!-!」

「しかし凄い自信ですね。あの鮫島さんとパイマーを同時に相手し
ようなんて。さすがにちょっと無謀じやありませんか?」

等々力が言った。

「あなたたちは羅刹の強さを知らない。普段はあんただけど、彼、
強いわ」

「ほほ、それは見ものですね」

29 ゾ異色のタッグ？パイパー・鮫島 VS 羅刹

「チツ！」

「ゼヒ・・・ゼヒ・・・クソツ！、なんだよこの展開は！？」

異色のタッグによる戦いはまだ始まつて数分である。にも関わらず
パイパー、鮫島の息は大きく上がつていた。

特にパイパーは既に肩で息をしており、疲労が大きい。

一方の鮫島もまさかこのような事になるとは想像もしていなかつた
ような表情になつてゐる。

しかし、同じ剣客として一番驚いていたのは、やはり鬼三だつた。
羅刹から繰り出される聖魔刀の威力は、否応無しに鬼三の嫌な部分
を攻撃してくる。

聖魔刀から放たれる邪氣は、鬼三にかなり大きなダメージを与えて
いたのだ。

同じ刀でも相性と言うものがある。何が理由だか分からぬが、羅
刹の聖魔刀と鬼三は相性が悪いようだ。

「強い・・・・・」

開いた口が塞がらない。そんな感じで鬼武が呟いた。

「これが、魔界No.4の実力ですか・・・・」

等々力の額から冷たい汗が流れる。

「アizz、また強くなつた。今となつてはもう魔矢より上かも知れ
ないわ」

いつも茶化す相手である羅刹を見て、由佳は思わず息を飲んだ。

「なんや、二人掛かりでこんなもんかいな。話にならんのつ
「な、なにつ！..」

先ほどから羅刹は一切攻撃をしていない。ただ縦横無尽に注がれる
鮫島とパイパーの攻撃を受け流しているだけだつた。

鮫島の攻撃も、パイパーの攻撃も、一度たりともヒットしてないの
だ。

「それにしても気にいらねえ・・・なんでもめえと一緒になんだ」「バカ言つた、俺だつて死ぬほど嫌なんだ」

「相変わらず仲の悪い二人である。

「これで二〇・四なのか・・・その上にいるあの三人はどんだけ強いつてんだよ」

鬼武が言った。

「そう思うでしょ。だけどそのうち一人はゲノムにやられてしまつた。ゲノムはこんなもんじやないつて事ね」

「やっぱり来るべきじやなかつたな、魔界なんて」

等々力の後悔はまさに先に立たずである。

「鬼三、行けるか？」

「なんとか・・・ただあの刀はどうも苦手だ。長期戦は致命的になる」

「大丈夫。ここから本氣で行く」

「出来れば短時間で済ませてくれ」

「ああ、任せろ」

鮫島の目付きが変わつた。

それと同時に鮫島の変化に気付いた羅刹は同じように構えた。

「ケケ、どうやら火い点けちまたようやな」

「行くぞ」

「上等や」

羅刹が言い終える前に、鮫島の姿は消えた。

「き、消えた！…」

鬼武が叫んだ。

既に鮫島と羅刹は遙か上空まで舞い上がつていた。

剣と剣がぶつかり合う金属音が響く。凄まじいぶつかり合いが始まつた。

「鮫島さん、ありやマジだな」

普通の人間である由佳には何が起こっているのか見えなかつた。それほど凄まじいスピードで互いに攻撃し合つてゐる。

「俺様を無視するな！！！」

無性に腹が立つたパイパーも飛び上がり鮫島と一緒に羅刹に襲い掛かつた。

「およ？パイちゃんもマジやんか

「つたり前よ！！鮫島だけ良いカツ口させねえぞ！！」

鮫島の鬼三、パイパーの豪腕。本氣と化した一人の攻撃は猛攻へと変わる。

「おうおう、さすがに本氣にならるとワイもしんどいな」地上へと降り、羅刹と距離を取つた鮫島は、もはや息切れなどと言ふレベルではなかつた。

「はあ・・・はあ・・・な、何故攻撃が当たらん！」

「ふう・・ふう・・一発でも入れば・・・」じつちのもんなのによ！

方や羅刹はと言つと、息一つ切れていない。

「あんさんたちの攻撃はよう分かつたさかい、その礼や。今度はワイから行くで」

と言つた羅刹は何故か聖魔刀を鞘に納めてしまった。

「来る！」

「へ？何がですか？」

突然来ると言つた由佳に等々力が聞いた。

「羅刹の本当の強さが・・・」

「強さ？」

「ケケケ、あんさんたちよつやつたで。けど、相手が悪かつたな、結局ワイの勝ちや！！！」

「おわつ！なんだ！！」

羅刹の身体から鋭い風が吹き荒れると、その身体は褐色を帯び、両目が赤く染まつていく。

更に肉体が変化を始め、元の身体よりも一回り大きくなつた。異常なほど発達した筋肉。それと同時に巻き起こる夥しい邪氣。

「！」これは！！

「な、なんだ、一体！」

鮫島とパイフーが共に叫ぶ。

爆風が止むと、そこに変化した羅刹の姿が明らかとなる。

「あれは・・な、なんなんだ、アイツは！！」

「バーサーカー・・・・・ 羅刹の真の姿よ」

三つ巴の戦いの最中に一度だけ見せた羅刹のフルパワー。バーサーカー羅刹がそこにいた。

「こ、こんな事が！！」

「いかん、聖！あれは我々の手に負える相手ではないぞ」「パイフー！ヤバイぞ！！」

「そ、そんなこと言われててもよ」

鬼三、パイフーが叫ぶ。

「良かつた、僕戦わなくて」

等々力が胸を撫で下ろした。

「これがワイのフルパワーや。行くぞ！！」

魔物のよみに姿を変えた羅刹は凄まじい速さで突進し、両腕を広げた。

「がああああっ！！」

「うがああ！－！」

右腕に鮫島の顎が、左腕にパイフーの顎がヒットし、二人は瓦礫に突っ込んだ。

「くそ！－！」

いち早く起き上がったのは鮫島だった。そこに再び羅刹が突進する。

「ぐうう・・・・・！」

羅刹の拳が顔の前で止まる。身構えた鬼三が羅刹の拳を止めたのである。

「さあて、いつまで持つかな？」

「ヤロー！－！」

なんとか起き上がったパイフーも羅刹に飛び掛る。渾身の一撃が羅刹の腹に食い込むが、羅刹は動じていない。

「あかんで、邪魔しちゃ」

「ぐわつ！！」

羅刹は左手でパイパーの頭を掴むと、そのまま地面に叩きつけた。

「さて、鮫島はん。あんさんはどうかな？」

「せ、聖・・・・も、もつ・・・・」

羅刹の攻撃は凄まじく、鬼三はもはや限界だった。これ以上は鬼三が死に兼ねない。

「わ、分かつた、手を貸そう」

とうとう鮫島が降参した。

「そか！…なら安心や」

羅刹はすぐに拳を離すと、バーサーカーから元の羅刹に戻った。

「すまんかつたな、鬼三はん。大丈夫かいな？」

「誤るならやるな！…」

「ハハハ！…それもそうやな」

「パイちゃんも悪かつたのう」

「パイちゃんつて言うんじやねえ…！クソ！思いつきり叩き付けやがつて」

パイパーは鼻を押さえている。どうやらかなり痛かつたらしい。

「ゲノムを倒したら、俺、リアル世界に帰るかもしない」

鬼武がポツリと呟いた。

「そ、その方が賢明かもしれないな…」

等々力が続く。

「まあ、長生きしたければ魔界は止めた方が良いよ」

由佳も苦笑いである。

「大丈夫か？鬼三」

「まったく、危うく折れるとこだつたぞ。茨木童子が子供に思えてくる」

「同感だな。やれやれ、これ以上強いのか、紅とゲノム、そしてウルは

あの時紅と競り合つたときの事を鮫島は思い出した。

進むべき方向へ進む。それが自然の摂理であり運命でもある。
だがその運命は人の力によって変えられる。
ゲノムとの決戦はすぐそこまで迫っていた。

END

殺し屋の仕事で手にした金で購入したランドクルーザーは唸りを上げていた。

魔界の中心部、魔矢・紅たちを別れて既に4時間が経過している。ウルの運転するランドクルーザーは絶海の孤島「煉獄」を目指して疾走していた。

車内は静まり返っている。オーディオはセットされているが音楽を流すような気分ではなかった。

それにウルは運転中にエンジン音以外の音が耳に入る事を嫌っていた。

孤独、そして孤高を好むウルにとつて雑音は無用なのだ。

常に単独行動で束縛を嫌う彼の性格がそうしているのかも知れない。車内には疾走する車の音だけが五月蠅く流れている。

ランドクルーザーは時速80kmで走行している。この分だと残り4時間ほどで煉獄に到着するだろう。

煉獄が魔界の中心部から離れているとは言え、このペースなら予定通りの時間に着く。

ウルは走る車が唸りをあげるよつに、最後の決戦に備えて覚悟を決めていた。

迂闊だつたとは言え仲間たちを巻き込み、重傷を負わせてしまった。魔矢と紅の容態が気になるところだが、今はそれ所ではない。ゲノムを・・・いや母親を始末せねばならないのだ。

そのためには完全に息の根を止める必要がある。数年前の死闘のように封印ではなく

真の意味で「無」にしなければないので。でなければ何かの拍子で再び蘇るという事も考えられる。

ゲノムを本当の意味で始末のに必要なもの。

それが後部座席に積んである「液体水素」である。

液体水素の沸点は摂氏 -252.6 で、融点は摂氏 -259.2 と言つ限りなく絶対零度に近い温度を誇る。

本来水素と言つものは酸素と結びつくりでエネルギーと水が生まれるが

液体と化した水素をそのまま使用するはどうなるか。

ただでさえ絶対零度に近い冷たさを誇る液体である。そのまま使用すれば凍るのは必至だ。

それが例え一般的なペットボトル量であつても、半径20cmほどが一瞬で凍結する。

しかも絶対零度に近い冷気は物質のほとんどを破壊してしまつ。例え解凍に成功しても物質そのものは死んでしまうのだ。

おまけに液体水素をかけられた物質に極端な熱を加えると、冷気と熱の摩擦が生じ気圧が変化する。

その気圧が物質全体の7割に達したとき、その物質は大爆発を起すのだ。

今回、ウルを用意した液体水素の量はドラム缶2本分にも及ぶ。煉獄の地下に眠るマグマの量を考えると、ドラム缶2本分の液体水素は適量と言えるだろう。

だがこの試みはウルに取つても、まさに命懸けだった。

万が一液体水素が微量でもウルに降りかかつたらもはやアウトである。

失敗は即ち自らの死を意味していた。

それでもやらなければならない。不思議とウルには自分がこの戦いで死ぬ事は視野から外れていた。

何故ならウルの身体には、まだ誰にも知られていない「ある秘密」が隠されているのだから・・・。

ウルは運転しながら改めて魔界を見た。

依然として良い場所であると言つ気持ちに変化は無い。ウルにとつて帰るべき場所は魔界なのだ。

もはやリアル世界で生活が出来るほどの清らかさは持つていない。リアル世界で生きるにはあまりにも多くの人間を殺し過ぎた。ウルには故郷こそが魔界であり、魔界こそが心の拠り所だった。そんな魔界を良い様にさせてはならない。今度こそゲノムと決着を着けるのだ。

時は満ちた。煉獄到着まで、残り4時間切った・・・。

一方、魔矢の提案によつて全ての強豪を探し当てた羅刹と由佳、そしてバイバー、鬼武、等々力、鮫島の計6人は魔界の鍋蓋を後にし、煉獄へと車を走らせていた。

8人乗りのブレイドは羅刹と由佳を除いた4人に有利な大きさとなつた。

座る配置によつては喧嘩が起こりえる関係の4人である。運転席には由佳、助手席に羅刹。

そのすぐ後ろの後部席にバイバー、鬼武を。その更に後ろの座席に鮫島と等々力を配置した。

間違つてもバイバーと鮫島を隣同士にしてはならないからだ。

等々力の乗ってきた車はそのまま魔界の鍋蓋に停車させたままである。

等々力曰く「ゲノムとの決戦で巻き添えを食らわせたくない」と言なるほど、確かにその可能性は強い。スクラップになるのを避けて、あえて置いてきたのだ。

車ならゲノムを始末した後、また取りに来れば良い。更に、置いてくる予定だった由佳も結局同行する事になった。

全員が揃つたら魔矢のいる病院へ戻ると言う事だったのだが、由佳

は「私も行く」と言い張つて聞かなかつた。

一度言い出したら何を言つても聞かない性格の由佳を、さすがの羅刹も動かす事はできなかつた。

「ここから煉獄まではどのくらい掛かるんですか？」

等々力が聞いた。

「煉獄は魔界の鍋蓋の正反対に位置しているから、かなり掛かるわ。少なくとも後6時間は掛かるかな」

「6時間も掛かるのかよ！！長旅だな」

「でもそれまでゆっくり休めるといえれば休めるけどな」

パイフーと鬼武が言った。

「命懸けの死闘を前に、あまり心地良く休めるとは思えんがな」

鮫島が呟く。

「ケツ！早くもビビッてんのか？」

「それはお前だろ」

「あんだとつ！！」

パイフーと鮫島の席を離したと言つた。やれやれである。

「やめれや、一人とも。ゲノムを倒すまでは協力せえ言つたやろ」

「ケツ！」

「フン！」

「それにしても今頃ウルのヤツはびの辺にあるんやろか

「さあ、多分私たちよりも先に煉獄に着くと思うけど」

「僕たちが着いた時には全部終わってる・・・なんて展開も・・・」

「それは無理だろ。お前も見ただろ、あのゲノムつてのを」

「ま、まあね・・・やつぱ無理か」

等々力と鬼武が言った。

「悪いがちょっと休ませて貰うぜ。さすがに寝不足でよ」

パイフーはそう言つと横に倒れ、鬼武の膝に頭を置いた。

鬼武もパイフーの頭を一撫すると、静かに目を閉じた。

「俺もそうさせてもらひ。さすがに連戦続きだつたからな」

「到着したら僕が起こしますので」

「ああ、頼む」

そつ言つと鮫島はそのままの体制で田を閉じた。

「魔矢と紅は大丈夫やろか」

「あの一人は平気よ。でももう、一度と戦えないでしううけど・・・」

「そんなに重傷なんですか？あの一人は」

唯一起きている等々力が聞いた。

「ええ。多分もう無理だと思う。でもその方が良いのかも知れないわ」

「そりゃどうこう」とや？

「だつて・・・何て言つか常に戦いの中に身を置くなんて本当は嫌だから」

「でもこゝは魔界ですよね。殺し合いは避けられないんじや・・・」

「そうだけど。出来ればもう戦つて欲しくない。紅君も、魔矢も」微妙な乙女心なのだろう。紅のその名を連ねてはいるが、本当は魔矢の事を示している。

最愛の人を失いたくないと言つ気持ちは、男女問わずあるものだ。

「大丈夫や。ゲノムさえ始末すりやもつそれでええねん。魔矢も喜ぶはずやしな」

「うん・・・」

それぞれの思いを胸に、いよいよゲノムとの壮絶な死闘が始まる・・・

31 ジ頂上決戦、ウル vs ゲノム

忘れられた孤島「煉獄」の地下では大量のマグマがうねりを上げていた。

元々煉獄には火山と成る山脈があつたのだが、数年前のウルとの戦いのときに山脈は消失。

今では島のあちこちに巨大な穴が開いており、その地下でマグマが煮えたぎっていた。

いつ大爆発を起こすか分からぬ状況の中、一台のランドクルーザーが煉獄に到着した。

ゲノムは煉獄の高台である丘の上、その丘に口を開く火口にいる。その事を知っていたウルは誰も居ない煉獄を静かに移動した。

ランドクルーザーが高台の入り口に着くと、ウルは車を降り、後部座席から液体水素が入つたドラム缶を二つ取り出した。

そして両手でそれを持ち上げると、火口の位置口でそれを置いた。「なんとまあ、醜い姿になつたもんだな」

火口の真下でやはりウルが来る事を知っていたゲノムは静かに佇んでいる。下から上へとウルを見上げ

「グルルル」と叫び声を上げた。

今すぐに液体水素を使うわけには行かない。例え火口に流しても、避けられるのは目に見えている。

ある程度攻撃をして弱らせ、直接液体水素を掛けなければ意味が無い。

「やつてくれたな、ゲノム。礼をしに来たぜ」

「カミゴロシ・・・ウル・・・ヨウヤクミシケタ・・・サイゴノテキ！」

火口にいたゲノムは一気に飛び上ると、まるで同じ土俵に立つよう、ウルと向き合つた。

煉獄は相変わらず小刻みな地震が巻き起こり、地鳴りが響く。

「これで魔界も変わる。お前を始末して、それで終いだ……」

「グワアアアア！」

両者のぶつかり合つ音が響いた。

同じ頃、煉獄まで残り一時間と言つ場所まで辿り着いていた羅刹たちは、眠っていたパイパーと鮫島を起こし最後の決戦の向けて話し合いが始まっていた。

魔矢が残したメモにはある程度の戦い方が記されていた。勿論、メモ通りにやつたからと言つて上手く行くと言つ保証はないが羅刹たちに取つては未知の強豪だ。参考になる戦術があるならそれに沿うしかなかつた。

「ええか？ そんな感じで戦うんや」

「まったく、何故こうもムカつくヤツと組まなければならんのだ！」

「それはこっちのセリフだぜ！ もうとマシな戦略はねえのかよ！」

鮫島とパイパーががなつた。

「しゃーないやろ。あんさんたち個人が持つてる能力を活かすためにはこれしかないねん」

どうやら等々力と鬼武は納得しているらしい。

「チツ！」

「くつそーーー！」

「ねえ、ちょっと見てーーー！」

「どうした！」

「どうした！」

もはや煉獄が肉眼でも確認できる場所まで来ると、前方の至るところで激しい爆発と炎が上がつていて見えた。

「多分ウルよ。ゲノムと闘つているんだわ

「マジかよーーー！」

鬼武とパイパーは身を乗り出して前を見た。等々力と鮫島も窓を開けそれに留つ。

だがまだウルとゲノムの姿は見えなかつた。

「そろそろ準備しておいて。後少しで着くから」

由佳の言葉に一同は息を飲み、そして緊張感が張り詰めた。

状況はウルが劣勢だつた。ゲノムの猛攻はほとんどウルには通用していない。時折放たれる刃の触手には手こずつたが

一見すると誰もがウルの勝利を確信するだろう。しかしウルの攻撃が致命的になつていな点は否定出来ない事実である。

「こいつ・・・以前より厄介になりやがつて」

致命的な弱点の無いゲノムだが、無数の心臓に無数の脳とあつては、それが本体のコアなのか判断が付かない。

的確なダメージを与える事は出ないのだ。

その辺、ウルには不利だつた。やはりスマーミナと言つ問題が生じる。

「フン、弱点がないなら、その弱点らしきもん全て潰すまで！！」急降下したウルはその拳で無数にあるゲノムの眼球、そして心臓や脳を潰しに掛かつた。

もはやそれしかない。致命的となる場所が無数にあるのなら、その全てを潰せば良い。

そうすればいざれは最後のコアに辿り着く。ウルは文字通り鬼の形相で潰しに掛かつた。

しかしそう簡単にさせてくれないのがゲノムである。

打ち込まれたウルの拳に異様なまでに繁殖した触手が纏わり付く。

「くつ！..」

半永久的に再生を繰り返すゲノムに対し、人間であるウルの身体はモロい。

いくら「ある秘密」が隠されているとは言え・・・。

「ぐおおおー！」

ゲノムは巨漢のウルを軽々と持ち上げ、今にも噴火しようとしている火口に頬リ投げた。

「ぐつはつ！」

叩きつけられた衝撃で岩石が背中に刺さる。流れ出す鮮血。形勢逆

転とはこの事である。

「コレデオワル……ナニモカモガ……」

ゲノムはウルの手を踏み付けた。

「クソツツ！」

万事休す……」これでは何のために液体水素を用意したのか分からぬ。

使い暇も無く終わつてしまふのか……。

「それは行くかいな……！」

その時、凄まじいスピードで影が移動すると、ウルの手を踏み付けていたゲノムが後方へと吹つ飛んだ。

「ら、羅刹……！」

「危ないとこやつたのう~」

そこには羅刹がいた。いや、羅刹だけではなかつた。すぐそばに由佳があり、パイフー、鬼武、鮫島、等々力がいた。

「あ、あれが、神殺し……ウル……」

「ああ、アイツだよ。コンビニであつた男……」

パイフーと鬼武が驚愕したように言った。

「あわわわわ……やつぱり来るんじやなかつた……！」

等々力はもはや半ベソ状態である。

「あれが神殺し……」

「噂通りの男だな。凄まじい威圧感を感じる」

鮫島に続き、鬼三が叫んだ。

「お前たち、何しに来た」

「何しにって決つとるやないか。ゲノムを始末しに来たんや」

「バカな……お前たちの手に負える相手ではない」

「せやかで、あんさん一人でも勝てそうに無いやんけ」

「……」

「ウル、無理だよ。一人で戦おうなんて」

「由佳」

「おいおい……どうでも良いけど、あのヤロー来るぞ……」

パイマーが叫んだ。

視線の先には案の定無傷のゲノムがいた。こちらへ向かつてくる。

「ジャマナレンチュウバカリ・・・ゼンインマッサツー!」

「由佳ちゃん、ウルの傷見たつてや」

「分かつた」

「準備はええな？あんさんたち

卷之三

「覚悟は出来ている」

「やつぱつ帰らうかな・・・」

「今さら漢くな、等々力。ハツでも娘ハゼ!!」

卷之三

「マジカシー！」

最終章、第一回の幕が開かれて……。

「おらあ！！」
「でやあ！！！」

縦横無尽に叩きつけ、斬りつけるのはパイパーと鮫島だった。そしてその仕上げとして羅刹が続く。拳と刀。この二つを操る、羅刹、パイパー、鮫島の三人が最前線にそして飛び道具を駆使する鬼武と等々力を後方に置き、援護に回ると言つのが作戦だった。

「このバケモノヤロー！！」

パイパーの強烈な拳はゲノムの至る部分を抉る。繰り出された豪腕の破壊力は計り知れない。

それに続き今度は鮫島の刀、鬼三が猛威を揮う。文字通り目にも止まらぬ太刀捌きでゲノムを切り刻み、切断する。その合間を縫つて鬼武、等々力による遠距離からの攻撃が火を噴くと、ある程度ダメージを負わせたゲノムに羅刹が襲い掛かる。しかしゲノムも無反応ではない。頭の良いゲノムはさすがに5人を同時に相手にするのは酷なのか

飛び出す触手の量が一段と増えていた。

「このバケモノ、本当に死にやがるのか！！」

「文句を言つている暇があつたら攻撃しろ！！」

「鮫島、てめえ！！見てろよ、この戦いが終わつたらキッチリケリ付けるからな！！」

パイパーも鮫島も、互いに攻撃をせねば倒せない事は良く分かっている。

「くそ！ちつとも効果が無いぜ！おい、等々力！弾はまだかよ
「そんな事言われたつてちよつと待つてくれよ」

無数のマガジンが地面上に落ちる、先ほどからの攻撃はほとんどダメージを与えていないようだった。

「ぐはあっ！－！」

「バイバー！」

バイバーはゲノムを攻撃を正面から食らつた。

「あかん！－！」

上空へと吹き飛ばされるバイバーを追つように、ゲノムが続いた。

「形無し夢幻陣！－！」

メテオと化した無数の刃がゲノムに襲い掛かる。
だがゲノムに効果は無い！！

羅刹の切り出した聖魔刀にゲノムの触手が重なる。

「羅刹！－！」

「は、はよ逃げんかい、バイちゃん」

「あ、ああ・・・」

羅刹のかばわれる形となつたバイバーは即座に真横に避けた。しか
しそれを見逃すゲノムではない。

「があああつ！－！」

「バイバー！－！－！」

ゲノムの触手がモロにバイバーの脇腹に突き刺さつた。鬼武の悲鳴
が響く。

急降下で落下するバイバー。その身体が叩きつけられる直前、鬼武
はその腕でなんとかバイバーを受け止めた。

「おい、しつかりしろ！－！」

「だ、大丈夫さ。」、「こんなもん・・・」

「無理すんな、バカ！－！」

起き上がつたバイバーだつたが脇腹からは血が流れている。

「ワ、ワレエ！－！死なすぞ！－！アホンダラ！－！」

羅刹がキレた。その勢いで速度を増した聖魔刀で斬り付ける。何度も
何度も。

「ウラア！－！」

「は、速え！－！」

「羅刹、後ろだ！－！」

鮫島が叫んだ。だがそのときにはもう遅かった。

「な、なにつ！－！ぐわああつ！－！」

伸びた触手が羅刹の身体に絡まり、そのまま身体を持ち上げる。そして羅刹の身体は地面に叩きつけられた。

「ぐ、ぐつ・・・」

「羅刹！お、おのれえ！－」

鮫島が勢い良く飛び上がった。その手には鬼三がしつかりと握られている。

「鮫島さん！－！」

「おおおおおおおおつ！－！」

凄まじい速さで繰り出す鬼三は、以前にも増して切れ味が良くなっている。しかしそう何度も通用しない。

ゲノムは身体を反転させ鮫島の背後に飛び移ると、かつてないほど勢いで鮫島を吹き飛ばした。

「ぐはあああつ！－！」

「鮫島！－！」

パイマーの叫びが響いた。

冷めた溶岩に叩きつけられた鮫島の体の至る所で嫌な音がした。骨が折れる音だつた。

「ぐうつ・・・」

「せ、聖よ・・・」

「鮫島さん・・・くそ・・・なんでこんな事に・・・クソッタレ

！－！」

「等々力！よせ！」

呼び出した等々力に鬼武が叫んだ。しかし鬼武の声は彼に届いていない。

等々力の手には鋭利なサバイバルナイフが握られていた。傭兵としての本能が目覚めたのかも知れない。

凄まじい速度で飛び出した等々力はゲノムへ向かって進んでゆく。

等々力の左手には得意の毒針も握られており、いつでも攻撃が可能

だつた。

弱弱しい発言を繰り返していた先ほどとは違い、その戦いぶりは見事だつた。

等々力の狙いは次の攻撃。つまり仲間が立ち上がるまでの時間稼ぎである。

「お、鬼三、大丈夫か・・・」

「な、なんとかな・・・聖、お、お前は?」

「ああ、俺もなんとか・・・」

「強すぎる・・・あまりにも強すぎる・・・」

「鬼三・・・俺は悟つたぞ」

「なに?」

鮫島は静かに語り始めた。骨の折れた身体を起こしながら。

「俺は今まで、自分の宿敵は茨木童子だとばかり思つていた。しかし、その茨木童子はゲノムに比べれば小物同然。

おまけに魔界に来て早々、あの矢吹紅と言つ少年に深手を負わされた。

俺は剣客として依頼は果たした。だからもはや魔界に居る必要ないと思つていたんだ」

「聖・・・」

「しかし違つたぞ。今こそ分かつた事がある」

鮫島は呼吸を整えた。

「ゲノムを倒さない限り、生きて魔界から帰れない。そして、茨木童子を撃破した今

俺の本当の宿敵は矢吹紅ただ一人!! お前の兄、獣斬の犠牲はゲノム撃破によつて浄化されるとな!!」

「せ、聖よ・・・お前と言つヤツは・・・」

鬼三に涙と言つものがあつたら、きっと流していただろう。

「ゲノムを倒し、生きて魔界から帰るーそのために、ヤツを、ゲノムを倒す!!

鬼三よ、ここからは限界を超える。最後まで付き合つてくれるか?」

「死は元より覚悟の上。聖、お前に全てを託す
「ありがとう」

鮫島は自前のサングラスを外し、そのまま捨てた。

「行くぞ、鬼三。真の戦いへ」

「ああ！」

鮫島は等々力とやり合つゲノムに向かつて飛び上がつた。

「ああ・・がああ・・・・・」

ゲノムの触手が等々力の腹部に叩きつけられる。それと共に等々力の口から血が吐き出される。

等々力が倒れそうになつたとき、その肩に手が置かれた。

「さ、鮫島・・・さん・・・・」

そこに鮫島が立つていた。

「無理するな、等々力。時間稼ぎすまなかつたな」

「へへ、す、少しは・・・役に立つたでしょ・・・」

「ああ。ゆつくり休んでいい。ここからは俺がやる」

「鮫島」

「鮫島はん・・・」

バイバーと羅刹が呻くよつに言った。一人とも重傷だつた。動く事さえもはやまらない。

「平成の剣客の名に置いて、ゲノム、その首もらつた！！」

鮫島は一直線に走り出し、ゲノムに鬼三を振りかざした。

最終局面は第2章へ・・・。

END

「な、なんやあの力は・・・・・

「信じられない・・・・・鮫島さんつてあんなに強かつたのか！」

一方的に斬り付ける鮫島の攻撃は、かつて茨木童子と戦ったときの比ではなかつた。

「うおおおおつ！！」

それは怒りなのだろうか？それとも憤怒か？いずれにしても凄まじい攻撃力を帶びた鮫島の猛攻がゲノムを襲つた。

鮫島は息を切らしながらも斬り付ける事を止めず、とうとうゲノムの肉体を4等分に切り裂いてしまつた。

しかし、何度も再生するゲノムには一時の痛手に過ぎず、しばらくするとすぐに再生してしまつた。

それでも全身から闘志を漲らせる鮫島の姿はまさに圧巻だった。「侍」とはこういふ姿を言つのである。

「食らええ！！」

宙に舞つた鮫島の鬼三が振りかざされると、ゲノムの後部に位置する部分が吹き飛んだ。

「やつた！！

「鮫島のヤロー、やりやがつたぜ

パイマーが叫んだ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・

鮫島の体はもはや限界を突破している。極度の疲労に極度の動き。そのダメージが一身に注がれる。

そのため吐き出される呼吸の乱れも、既に常軌を逸していた。

頭部の吹き飛んだゲノムだったが、案の定再生を繰り返し、頭部が肉体に融合した。

だが完全なるノーミスではなかつたらしく、動きがわずかだが乱れていた。

ゲノムとて元は人間の融合体。いくら痛みを感じないとは言え「破壊」の二文字は避けられない。

しかし、それにはゲノムの身体を残す事など吹き飛ばす事が条件となっている。

刀での攻撃しか出来ない鮫島にとって、最初から勝利は無いのである。

刀でゲノムをコナコナにする事は不可能だからだ。

「ニンゲンニシテハ、ヨクヤツタナ・・・・・」

「なにを・・・・・」

「ロロス

「ぐはああっ！！」

鋭い鋭利な触手が、鮫島の腹部を完全に捉え、そして貫いた。

「あ・・あああ・・・・・がああ・・・ぐう・・・・・」

「聖！・・・」

「鮫島さん！・・・！」

「鮫島！」

鮫島の腹部を貫いた触手はそのまま左右に動き、痛みを倍増させる。

「があああああああつ！・・・ぐがああああつ！」

鮫島の口から夥しい鮮血が溢れる。

「鮫島！・・・て、てめえ！・・・」

その時、ずっと立ち往生していたバイフーがゲノム目掛けて突進した。

その勢いで鮫島から触手は抜かれ、鮫島は地面に倒れた。

「聖！・・・聖！・しつかりしろ！・・・」

「鬼三が叫ぶ。

「鮫島さん

ゲノムがバイフーによつて吹き飛ばされたのを確認すると、等々力が鮫島に駆け寄つた。

「まずい、貫かれている・・・・・」のままじや・・・・・

「大丈夫か！・?」

鬼武も駆けつけた。

「がふつ！！」

鮫島の吐血は止まらない。

「だ、誰か聖を・・・聖を助けてくれ」

鬼三の悲痛な叫びが響く。だがその時だつた。

「これを使うのじや」

「だ、誰だ！」

そこには奇妙な狐がいた。だが通常の狐とは違つ・・・。何とも説明しがたい雰囲気を醸し出していた。

「お前は、月読！！」

月読と呼ばれた狐の手には小さな小瓶があつた。

「お前さんを助けるのもこれが最後じやてな」

「つ・・・月読・・・か・・」

月読は小瓶の中身を鮫島に振りかけた。すると瞬く間に吐血は止まり、出血も止まつた。

「これは血を止める効果があつてのう。ただ貫かれた傷口までは塞がらんがね」

それでも出血の止まつた鮫島の顔に生気が戻つて行く。

「感謝するぞ、月読」

「これでワシの役目も終わりじやな

鬼三の言葉に月読が答えた。

「フン！どうやら助かつたみてえだな。鮫島」

「バ、バイフー・・・な、何をするつもりだ・・・」

息も絶え絶えな鮫島が言った。

そうしている間にもゲノムがこちらに向かつてくる。

「バケモノノヤロー、鮫島を殺すのは俺様なんだよ。勝手な真似されちゃ困るつてもんだぜ。」

今度は俺様が相手だ！！かかつてこい――

「イワレルマデモナイ・・・」

「バイフー、止める！――適いつこないぞ！」

「鬼武・・・俺様は誰だ？」

「えつ・・・」

「俺様はお前を愛する白虎、パイマーなんだぜ！誰が誰に負けるつて！？」

「パイマー・・・」

「俺様がこんなクソヤローに負けるはずねえだろ・・・」

パイマーの身体から鮫島と同様の凄まじい闘氣があふれ出した。

「俺が・・・俺様がこの世で一番強いんだ！！！」

「パイマー！！」

「うおおおおおっ！・・・」

まるで爆風のような風を巻き起こしながら、パイマーがゲノムに襲い掛かる。

凄まじい音を響かせ、パイマーの拳がゲノムに突き刺さる。

そう、それはまさしく「突き刺さる」だった。一突き一突きが確実にゲノムを身体を貫いた。

しかしゲノムもバカではない。パイマーが拳を繰り出すたびに鋭利な触手がパイマーを襲つた。

「痛くねえんだよ、こんなもん！・・・」

持ち前の強靭な巨漢と筋骨隆々の肉体。その全てをフル稼働させ、

ゲノムの触手を致命傷の手前で抑えていた。

極太な肉体だからこそ成し得る偉業だ。

だがダメージは回避できない。いくら痛くないと強がつてみても、既にパイマーの身体は血に塗れている。

（鬼武・・・）

「パ、パイマー！？」

その時、鬼武にしか聞こえない一種のテレパシーのような声が響いた。

（お前と出会ったのは何時だつたつかな・・・長いようで短かつたが、楽しかったぜ）

「パイマー、お前・・・何考えてんだ！」

鬼武の額から冷たい汗が流れる。パイマーが死ぬ氣であることが分かつたからだ。

その間にもパイマーの猛攻は続く、文字通り戦う白虎である。（出来ればこの先もずっと一緒に居たかつたがな・・・）

「おい、止める！パイマーよせ！！」

「つおおおおおおー！コイツは俺が連れて行くー！」

もはやこれが最後の攻撃となるであろう動き。パイマーはゲノムの背後にしがみつき、そのまま天高く舞い上がった。

そして自らの身体を逆様にし、そのまま一気に急降下を始めた。

このまま地面に叩きつけられれば、もはやパイマーの命は無い！！

「パイマー！やめろー！！」

鬼武が叫んだ。

「バカな事をー！」

鮫島も叫ぶ。

「くそつたれー！！」

「そう上手い事行かすかいなー！！」

「な、なにー！！」

いつの間にかパイマーの背後に羅刹が居た。羅刹の聖魔刀はゲノムの触手を切り裂き

パイマーとゲノムの身体が引き離される。

「カツコ付けよう言ひ気持ちは分かるさかい。せやけど、誰も死なせへんー！！」

間一髪のところで難を逃れたパイマーは、血塗れの身体で何とか着陸。一方のゲノムは地面に叩きつけられ見るも無惨な姿となつた。だがそれも束の間。ゲノムは再び再生する。

「今度はワイが相手や。バーサーカー羅刹、ナメとつたらあかんぞ

!...「

凄まじい暴風と共に、羅刹のフルパワー、バーサーカー羅刹がそこに居た。

END

バーサーカーと化した羅刹に聖魔刀は必要なかつた。聖魔刀よりも肉体的な攻撃力の方が上だからだ。

「うらあ！！」

羅刹の拳は岩をも碎き、その碎かれた岩がゲノムに突き刺さる。しかし再生を繰り返すゲノムにはほとんど意味が無い。攻撃を続けながら羅刹は由佳を見た。由佳は傷付いたウルの治癒に専念している。

時折ウルは由佳と何か喋つてゐるが、話の内容までは聞こえない。（そもそもワイは何で魔界に来たんやつけな・・・）

繰り出す拳の力を強めながら思った。

リアル世界で殺人を繰り返していた羅刹は、とうとうギネスに残す大量殺人を実行に移した。

羅刹が天誅を下す相手はワル限定ではあるものの、それが犯罪である事は事実だ。

関西地方最強と呼ばれた暴力団を壊滅させた羅刹は、その組長から魔界の存在を聞かされた。

自分よりも強いヤツがいる。その言葉が耳に残り、興味を抱いたのだ。

リアル世界で羅刹に勝てる相手など居ない。しかし魔界では大量殺人など日常茶飯事だと言つ。

更なる殺戮を求めて羅刹は魔界にやつて來た。自分よりも強い男「神殺しウル」を倒すために。

いざ魔界に來てみると、組長が言つたとおりツワモノばかりだつた。リアル世界で難なく始末できた人間も、ここ魔界ではそう簡単には行かなかつた。

それは魔矢と死闘を繰り広げた羅刹だからこそ分かる事である。

そしてそんな血肉の飛び交う魔界で一人の女と出会った。

それが由佳だつた。

羅刹は一目惚れするようなタイプではない。にも拘らず初めて由佳を見たとき、ピンと来るものがあった。

一体それが何なのか羅刹はずっと考えていた。そして分かつた事がある。。

それは、自分は由佳が好きなのではない。魔矢を愛する由佳の姿に惚れたのだと。

由佳に魔矢と言う存在が無かつたら、羅刹はここまで由佳を好きにならなかつただろう。

献身的で謙虚。そして何より寛大な優しさで魔矢を支える由佳の姿は、文字通り天使のような存在だつた。

そんな女と羅刹は出会つたことが無かつた。魔矢との相性は抜群である事は間違いない。

だからこそ「恋する乙女に恋した男」を受け入れる事になつてしまつたのだ。

由佳に良いカツ「見せるとか、もはやそんな事はどうでも良かつた。ゲノムを倒さない限り、由佳は幸せになれない。だからこそ由佳を脅かすゲノムを倒す事を羅刹は誓つたのだ。

それに魔矢、紅、ウルとの微妙な関係も悪くなかった。

三人ともいわば「同類」なのだから。人を殺すことでしか得られなかつた感触を

この三人と出会つたことで得る事ができたのもまた事実だつた。

そこへパイパー・鬼武、等々力、鮫島、鬼三との出会いが重なり、いつしか魔界は羅刹の居場所となつた。

そんな折、現れたのがこのゲノムである。魔界を崩壊へと導く悪の元凶。何があつても始末しなければならない。

自分の居場所を守るため。そして愛する人の幸福を祈るために・・・

(「ワイヤーでこんな役回りばつかやな……」)

羅刹の渾身の一撃を込めた拳は、ゲノムの肉体を完全に碎いた。

「どうしてそんな事を……そんな事したら無事じゃ済まないよ」「分かつて。だが、これしか方法が無い」

「だけど……」

治癒を施していたウルから聞かされた事実は、由佳に大きな衝撃を与えた。

「魔界を守るためだ。やるしかない」

「待つてウル！死んじゃうよ！」

「大丈夫さ、信用しろって」

ウルは久しぶりに笑つた。神殺しウルに笑顔とは何ともミスマッチだが、その表情は晴々としていた。

「鬼武、それに等々力……だつたな」

「ひい……」

立ち上がったウルは等々力の元へ行き、彼の名前を呼んだ。

「ななな、な、な、なんで……ございましょう……？」

「ビビり過ぎだろ、等々力」

鬼武が苦笑いを浮かべた。

「お前たちに頼みがある」

バーサーカー羅刹の最大の弱点はスタミナだった。

急激に発達した筋肉を維持するためには膨大なエネルギーを要する。エネルギーの消費が長く続けば当然動きも鈍くなってしまう。

羅刹の身体はもはや限界だつた。先ほどから怒涛のように続いていた攻撃のスピードが落ちている。

「クソッ！なんやねん、このバケモノは」「それを見逃すゲノムではなかつた。

「ぐはあつ！」

「羅刹！」

上空から一気に急降下した羅刹の身体は地面に叩きつけられた。そこへゲノムが真っ逆さまで落ちてくる。

「うががああつ！」

ボキボキと否な音を立てて無数の骨が折れた。

羅刹の身体は元の姿に戻っていた。もはやバーサーカーを維持する事さえ出来なくなっている。

「うう・・・ホンマ・・なんでワイはこんな役・・・ばつかなんや」鞄から聖魔刀を取り出した羅刹だが、立つのがやっとである。

そこへゲノムが近づく。もうまともに戦える人間はいない。鮫島は重傷、パイパーも大怪我。

「サイゴダ・・・」

「くそつたれ・・・」

振り上げられたゲノムの鋭い触手が羅刹を狙う。勢いを付けた猛攻は一直線に羅刹へと注がれんとしている。

「最後はお前だろ」

「なんや！」

ゲノムの攻撃が羅刹に当たる瞬間、凄まじい爆風と共にゲノムが吹き飛んだ。

「ウ、ウル・・・」

羅刹の後ろにはウルが立っていた。

「ウ、ウル・・・あんさん・・怪我は・・」

「この程度じゃ怪我のうちに入らんさ。ゲノムは俺が倒す」

「せやけど、あんさん・・」

「元々これは俺とゲノムとの戦い。余計な連中まで巻き込む結果となつたが、それももう終わる」

「な、なんやて」

「今すぐ火口から離れる。いずれこの火山は爆発し、島は崩れる。

由佳たちが待つ場所まで離れるんだ」

見ると、由佳を始めパイフーたちは火口のすぐそばに移動していた。羅刹は自分が火山の火口にいる事に気付いていなかったのだ。

小さな丘を隔てた向こう側に由佳たちが居た。

「勝算はあるんかいな」

「ある。だから今ここで面る」

「そうかい」

羅刹はそう言い残し由佳たちの元へ歩き出した。

「癖の多い連中を束ねてよくここまで来たな。意外とリーダーの素質があるんじゃないか」

「あんせんに言われとうな。こっちはド偉い迷惑や」

「フフ、巻き込んでますまなかつたな」

「もうええわ・・・勝てよ」

「ああ

足取りのおぼつかない羅刹の元に由佳が駆け寄った。

「大丈夫？」

「なんとか・・・迎えに来てもうえてワイは幸せもんやな、マイ・

ワイフ

「冗談言えるくらいなら平気ね」

そう言つと由佳は手を離し戻ってしまった。

「な、なんやそれ！手え貸してくれるんとちやうんかいなー・

「自分で歩きなさい」

丘の上から笑い声が聞こえた。見るとパイフーたちが腹を抱えて笑つていてる。

「なんやねん、もつ！・！」

「フフフ。ホラ、掴まつて」

そう言つと由佳は手を差し出した。なんだかんだで優しい由佳である。

マグマの中に落ちたゲノムの身体は再生を繰り返し這い上がつてきた。

「これで火口に残つたのはウルとゲノムだけである。

「長い戦いだつた」

「コロス・・・コロスコロスコロス！」

「終いにしよう。これで全てが終わる」

ウル、ゲノム。両者の姿は立ち込める煙の中で衝突した。

END

35 ～聖戦、ウル vs ゲノム 決着のとき～

羅刹が火口から離れると、そこには由佳たちがいた。

由佳だけではない。パイフー、鬼武、等々力、鮫島、そして鮫島の愛刀鬼三^二。

鬼武以外は全員が満身創痍であり、倒れながらウルの戦いを見ている者が居る。

それだけゲノムは強大であり、手強い相手であることが伺える。

火口付近で爆発音が轟いたとき、鬼武と等々力がランドクルーザーからドラム缶を下ろしてきた。

もはやまともに動けるのは鬼武と等々力しか居なかつた。

「な、なんに使うんや？」

「ウルからのリクエストです」

等々力がそう言った。

ドラム缶には液体水素と書かれていた。

「液体水素・・・なんや、一体・・・」

「ま、見てれば分かるつて」

鬼武がそう言った。

煉獄の火山はもはや爆発寸前だった。後数分もしないうちに噴火するだろう。

だがそんな場所にウルは居るのだ。宿敵ゲノムと一緒に。

「そろそろ頃合だ」

「グルルル・・・」

鮫島、パイフー、羅刹によつてしたたか傷つけられたゲノムの肉体は完全に再生する事が出来なくなつていて。

ゲノムとは言え生命体である。限界は付き物だ。

「長かった・・・。お前にはうんざりだ、ゲノム。お前のせいできの仲間が傷付いてしまつた・・・。

魔矢、紅、そしてあの連中も」

ウルはそう言うと顔を羅刹たちが居る場所へ向けた。全員がウルとゲノムの戦いを見守っている。

「俺は今まで神殺しと言つ言葉を鼻に掛けたことは一度も無い。だが、俺には魔界を守る義務がある。

それが神殺しの称号を持つ者の使命。やるべき事だ」「ウル……」

「今一度お前を葬り、魔界に安堵をもたらす。それが俺の役目だ！」

そう言つた瞬間、ウルはジャケットの袖から大量の手榴弾を取り出し、ピンを引き抜いた。

「な、何をするつもりや！？」

「バ、バカな！あんな場所で爆発させたら噴火するぞ！…」

羅刹と鮫島が叫んだ。

「これで終わりだ！！」

ウルはそう言つと、持つていた手榴弾を全て火口に投げ入れた。

「や、やべえ！…」

「みんな、伏せて！！」

由佳が叫んだ瞬間、火口に消えて行つた手榴弾全てが爆発し、凄まじい轟音と共に火を噴いた。

「うお！」

「ぐわっち！」

鮫島とパイフーが共に後方へと吹き飛ばされた。だが岩に捕まり難を逃れる。

「島が・・・煉獄が崩壊する・・・」

「あかんで！ここは孤島やー」このままやと海にバシャンやでー。

噴火を始めた孤島、煉獄は文字通り業火の如くマグマが吹き上がり、島の外壁を破壊して行く。

「コロス！！」

「やつてみなー！」

その業火の中、ゲノムがウルに襲い掛かるのが見えた。ウルに武器は無い。あるのは己の肉体のみ。

遅い来るゲノムの触手を両手で受け止めると、そのままの格好で力押しの状態に入った。

「掛かつたな！」

ウルはゲノムの後方に回ると、後ろからゲノムを羽交い絞めにした。

「鬼武、等々力！！」

「あいよ！！」

「待つてたぜ、この時を！」

「鬼武！等々力！」

いつの間にかドラム缶を持った鬼武と等々力が羅刹たちの目の前に立っていた。

「な、なんや！」

「ウルから言われてたの。火口を爆破するからその後このドラム缶を流せって」

由佳が羅刹に説明した。

「行くぞ、等々力！準備は良いか？」

「いつでも良いぜ！」

「おっしゃあ！流せ！」

「あいさー！」

由佳と共に液体と化した水素が火口に流れる。液体水素はウルとゲノムに向かつて一直線に向かつて行く。

液体水素が降りかかる瞬間、自分よりも巨体であるゲノムの頭部にウルは飛び乗った。

液体水素には物質を瞬時に凍らせる力を持っている。

しかしそんな液体水素に極端な熱が加えられる、熱と化学反応を起こし、大爆発を起こす事をウルは知っていたのだ。

熱なら打つて付けのマグマがある。そこに液体水素が降り込めば、島ごと吹き飛ぶ事は必至だ。

「ギュオオオオオーー！」

液体水素がゲノムを襲う。液体水素が触れた部分は瞬時に凍り付き、身動きが取れなくなる。

「あかん！ウル、急いで戻つて来い！し、島が爆発するで！」
もはや島全体が凄まじい揺れを起こしている。巨大な地震が島を襲う。

「ああ！」

「二ガサン・・・」

「な、なに！？」

「ウル！？」

もはや全体の9割が凍り付いているゲノムだったが、その意思は半端じやなかつた。

最後の悪あがきとも取れる、ウルの右腕を掴み離さないのだ。

「や、やべえぞ、あいつ！？」

「おい、急げ！」

パイフーと鮫島が同時に叫んだ。

「なにしとんねん！？」

「ウル！？」

「くそつ！？」

液体水素の流用は止まらない。掴まれたウルの右腕から冷氣が伝わり、徐々に凍り付いて行く。

ちょうどその時、島が大爆発を起こした！

「ぐわつ！」

「くそつ！」

「どうすんだ、おい！？」

「もうあかん、ウル！急げ！？」

「島が・・・崩れ行く・・・」

ウルは静かにそう言った。

「羅刹！もう限界よ、島から離れるわ！」

「せ、せやけど……」

「行け……」

「なに！？」

それはウルの声だった。

ゲノムに右腕を掴まれたまま凍り付いたウルの意識が羅刹に言葉を送ったのだ。

「お前たちまで死ぬ事はない。」いつは俺が連れて行く

「ウル……なんや、それ……冗談ちやうで！！」

「良くやつたよ。感謝してる」

「おい！ウル！ワイはあんさんを倒すために魔界に来たんやで！」

「俺よりも魔矢とケリを着けるのが先だろ！」

「そういう問題ちやうわ！！勝ち逃げかよ！！」

「そう思いたければ勝手に思え。じゃあな……」

「ウル！ウル！！」

「なにやつてんだ！お前は！！」

その時、一向に離れない羅刹を見かねて、パイマーが羅刹を連れにきた。

「さつさと行くぜ！関西人！」

「せ、せやけど、ウルが・・・ウルがまだあそこにあるんや！..」

「もう無理だ、諦める！」

そして最後の大爆発が火口で巻き起こった。

「ウルウ……」

それが由佳の叫びだったのか、それとも羅刹だったのか、定かではなかった。

「ちきしょー！…もう離れようが無いー！」

島へと続く道は既に海に沈んでいた。これで完全に活路は閉ざされた事になる。

「どうにかならんのか！」

鮫島が叫んだ。

「！」まで来て死ぬのかよ」

鬼武が頑垂れる。

「魔界なんて来るんじゃ なかつたな・・・」

等々力が首をガツクリと曲げた。

その時、立ち上る煙に中からヘリの音が聞こえた。

「なんや！！」

「ヘリだ！！」

「どうやら助けが来たみたいね」

「助けて、他に誰もいないぜ」

「居るじゃない。後一人、かつてのＺ。’2と’3が」

燃え上がる爆炎の中から姿を現したのは、紅が操縦する軍事用のヘリだつた！

助手席には両目に包帯を巻いた魔矢が座っていた。

「遅くなつたな！みんな乗れ！！」

「早く乗つて！もう煉獄は持たないよ！」

魔矢と紅が叫んだ。

「ナイスタイミングだぜ！」

パイフー、等々力、鮫島、鬼武、由佳の順にヘリに飛び乗る。

「ウル・・・」

もはや火口は見る影も無かつた。あれだけの爆発ではさすがのウルも耐えられるはずが無い。

「羅刹、急げ！」

魔矢が叫んだ。

「ああ・・・」

何ともやりきれない思いで羅刹はヘリに飛び乗つた。

「みんな、何かに掴まって！」

紅がそう叫ぶと、一同は全員壁や手すりに掴まつた。

「行けるか、紅」

「うん、多分大丈夫だとは思つけど、さすがに距離が近すぎるからね」

「頼むぜ、おい」

「救いの手が来たんだ、死にたくないな」

「パイフー、鬼武がそう言った。」

「煉獄が・・・爆発する」

魔矢がそういう瞬間、地平線に真っ直ぐな光が走ると共に、忘れた孤島「煉獄」は凄まじい轟音を響かせ海へと沈んだ。

「ぐわっ！！」

ヘリが激しく揺れる。轟音は爆風を伴い、ヘリの自由が奪われる。それでも紅は操縦の手を離さなかつた。魔矢もそれに手を添え、何とか軌道を確保しようと必至になつた。

「飛ばすよ！！」

「ああ！」

ヘリは立ち上る煙を脱出し、魔界の中央部へ飛んだ。その瞬間、海に沈んだ煉獄は海中で再び大爆発を起こし、粉々に砕け散つて行つた・・・。

END

～最終章「それぞれの明日」～

「そつか・・・ウルはゲノムと一緒に・・・」

「どうにもならへんかった、すまん」

「お前が誤る事ではない。仕方なかつたんだ」

「せやけどな・・・」

「気にするなよ」

魔界唯一の病院、魔界病院に戻ってきた一同は、夜叉によつて治療が施された。

特に重症だつた羅刹、パイフー、鮫島には手厚い保護がされ、三人とも徐々に回復の兆しを見せていく。

ウルの事実を知つた紅は酷く落胆していた。無理も無い。紅にとつてウルと言つ存在は自分に取つて初めての理解者だつたのだから。無理してヘリを飛ばした紅と魔矢の傷もまだ癒えておらず、二人ともベッドの上だ。

軽症で住んだ鬼武と等々力は夜叉の指示によつて治療の手伝いに回つている。

「大丈夫か？パイフー」

「なんとか・・・しかしひでえ戦いだつたぜ」

「大健闘だつたらしいな」

魔矢が声を掛けた。

「どうだかな、一番美味しい」ところをそこの関西人に持つて行かれちまつたけど

「ワイ？よく言つで、パイちゃん死にそうやつたやん」

「だからパイちゃんつて言うんじやねえ！…」

「アハハハ！」

その隣では鮫島と鬼三がようやく一息付いていた。

「大丈夫か？聖」

「ああ。貫かれた部分がまだ傷むが、歩けないほどではない」

「それにしても凄まじい戦闘だった」

「後にも先にもあんな戦いは最後だろ？ 出来れば御免被りたい」

「それにしても鮫島さんがあんな強いなんて知りませんでしたよ」

等々力が言った。

「いや、あの時は無我夢中だったからな。実のところ良く覚えていないんだ」

「でも僕の事は覚えているよね？」

ベッドからひょっこり飛び起きた紅が鮫島の下へ来た。

「戦いやゲノムを忘れる事はあっても、お前を忘れる事など有り得ない」

「良かつた」 鬼三は元気？

「とても元気とは言えんな・・・って相変わらず無邪気なヤツだ」

「アハハ！ 何事も楽しくだよ」

一通り治療を終え、一同は病院の外に出た。

各自包帯を取る事は出来ないが、歩けないほどではなかつた。

外に出るとすっかり朝日が昇つていた。どうやら夜が明けてしまつたらしい。

「終わつたな」

魔矢が言つ。

「うん。これで魔界は元通りね」

由佳がそう言つた。

「まさか魔界に来て早々こんな目に合つとは思わなかつたけどな」

「ホントだよ。俺たちつてどうしていつもこいつなんだろ？」

パイフーと鬼武が言つた。

「依頼は果たし、ゲノムも撃破した。これで完全に終わりだ」

鮫島が続く。

「刺激ありすぎですよ、魔界は」

苦笑いの等々力。

「これから魔界はどうなるんや？ ウルはその・・・」

「ウル無き後も魔界は魔界だ。なんら変わることはない」

魔矢が羅刹にそう言つた。

「ゲノムは死んだ。これでウルが居てくれたら、どんなに良かつたか・・・」

紅の咳きで一同に静寂が訪れた。

「さて、んじや帰るか」

「そうしますか」

パイフーと鬼武が口を開いた。

「二人とも魔界で生きるのか?」

「リアル世界で強い連中がいるならぶつ倒しに行くが、とりあえず俺らのアジトに戻るぜ」

魔矢の質問にパイフーが答えた。

「疲れたしな」

鬼武が咳いた。

「おい、鮫島」

パイフーが鮫島を見た。

「てめえとのケリは次までお預けだ。それまで死ぬんじやねえぞ」「貴様こそな」

「フン!-じゃあな。行こうぜ、鬼武」

「ああ。それじゃまた」

「気をつけてな」

「バイバイ」

パイフー・鬼武は寄り添い合つ様に振り返る事無く去つて行つた。

「聖よ、我々も行くとするか」

「そうだな」

「ちゃんとリアル世界まで送りますよ」

等々力が言つた。

「行つちやうの?鮫島のお兄さん」

「ああ。依頼主に仕事が完了した事を伝えに行かなきやならん」

「その後は?」

「さあな。気の向くままだ」

「そつか」

「パイフーとのケリもそつだが、矢吹紅、お前とはもう一度戦つてみたいと思っている」

「僕もだよ。ただ愛刀が折れちゃつたから、次までに新しい刀用意しておかなければいけないけど」

「ああ。今度は本氣でな」

「勿論」

「いろいろ世話んなつたな、鮫島はん。感謝しとるで」

「良い経験が出来た。上には上がいるとな」

「足はあるのか？」

「一度魔界処理場に戻つて車を取つてから帰ります」

魔矢の質問に等々力が答えた。

「等々力さん、あの約束どうじよつか？」

由佳がそう言つた。当然、デートの件である。

「約束？」

魔矢が由佳を見る。

「あ、いや・・アハハハ・・そ、そんな話しましたつけね~」

「それだけはワイがさせへんぞ!!」

「ひいいー! さ、鮫島さん、早く行きましょ~」

「やれやれ・・それじゃ、また会おう」

「元氣でね」

「いろいろありがと~」

紅と由佳が言つた。

鮫島、鬼三、等々力の三人は車を取りに魔界処理場へと足を向けた。

そしてその場に残つたのは羅刹、紅、魔矢、由佳の4人になつた。

「さて、ワイもそろそろ行くさかい」

「お前もどこかに行くのか?」

「ワイはそもそもウルの首を取るために魔界に来たんや。そのウルがもうおらへんのやつたら狙う意味もないからのう。

しばらいくの魔界を旅してみよつと思つてゐるんや

「魔界をか。魔界は広い。俺たちのいる場所は広い魔界の一角に過ぎんからな」

「せやろ? だからどつかにメツチャ強いやツがあるかも知れへん

「死んじやつたりしてね」

「勝手に死なすな! ワレ!」

「アハハハ!」

「どれくらい流れるんだ?」

「せやな。3年くらいは流れるさかい」

「そつか」

「なんや? そない残念そつなソラして」

魔矢は紅と由佳を見た。その表情は「話してみよつか?」と言ひの様子である。

「実はリアル世界に探偵事務所を開こうと思つていてな

「探偵事務所! ? なんや、もう魔界はええんかいな」

「」の身体で戦うのはもう無理だ。今のところ俺たち3人がメンバーなんだが、お前もどつかと思つてな

「良かつたら一緒にやらな」? そつと楽しい事務所になると思つの

「やろうよ、関西人」

「だから羅刹言つてゐやろ? おもろこ話やと思つ? せつかくの誘いやけど、遠慮しておくれ。魔界の旅をしてみたいんや」

「そつか」

「なんだよ、つまんない」

「ツマラン言うな! 」の「ヴォケ!」

「それじゃ旅が終わつてその気になつていたらこつでも来てくれ

「せやな。そん時は世話になるさかい」

羅刹は簡単な荷物を背負つた。

「それじゃ、もう行くわ

「ああ。気をつけてな」

「ちゃんと帰つて来いよー関西人」

「せやから羅刹やーー！」

由佳は羅刹の前に出ると右手を差し出した。

「おー？」

「貴方がいたから魔矢は助かつた。そして私も。ありがとうね」

「ええ女やなー由佳ちゃんは・・・これで旅から戻つて魔矢のガキがおつたらワイショックやで」

「フフフ・・・十分ありえる話よ」

「ハハハ！ほな、幸せにな」

「ありがとう」

「ハハハ！ほな、幸せにな」

羅刹は由佳と握手を交わし、歩き出した。

地平線から朝日が昇り、魔界を明るく照らす。それぞれの明日を描きながら今日と言つ日が始まる・・・。

魔界における激動の時代は終わりを告げた。

1年後・・・・・。

今は海だけとなつた場所。

そこにはかつて「忘れられた孤島、煉獄」と言つ島があつた。

傷付いた身体で塩水を泳ぐのは苦痛だつたが

男はそれほどの痛みは感じていなかつた。

平泳ぎで岸边に辿り着くと、男は短い髪の毛をかき上げ、周囲を見渡した。

「やれやれ、相変わらず変わらんな、魔界は」

男の風貌には懐かしさが感じられた。

黒髪でスポーツ刈り、黒皮のジャケットに長身の身体。ジャケットの中には無数の凶器・・・・

そして男は静かに言った。

「魔界・・・俺の帰るべき場所だ」

The END

神殺しウル・・・今ではこの言葉を魔界で知らぬものは誰一人ない。

文字通り神さえも殺しかねない殺人鬼。魔界でN.O.-1の実力を持つ者のみが与えられる最高の栄誉である。

しかし、その神殺しウルの素性は未だ不明であり、その過去を知るものもまた存在しない。

ここで語られる物語は、そんな神殺しウルの過去の物語。

神殺しはいかにして神殺しと成り得たのか・・・。

そしてどのようにしてこの世に生を受けたのか・・・。

凄惨且つ、惨たらしい過去の扉が開かれる・・・。

「ハア・ハア・ハアア・」

凄まじい心拍数が跳ね上がる中、可憐^{かれん}は軀となつた夫の亡骸を見下した。

「お前が悪いんだよ・・・全部ワタシのせいにするから、こんな事になつたのさ・・・」

ドップリと返り血を浴びた可憐は、右手に鎧を持ったままそう言つた。

「お前も嬉しいだろ、麗。お母さんの復讐が全て終わつたんだ。お前も喜んで生まれ来るとこい。」

必ずしも望まれた子供じゃないけどね」

可憐はそう言いながら自分の下腹部を擦つた。

今現在子宮の中には麗（つるは、後のウル）と名付けた我が子が宿つてゐる。

可憐はずつと麗の妊娠を恨みながら今日の復讐劇を迎えたのだ。麗の命を喜べるはずも無い。

何故なら麗はこの憎き夫の血を受け継いでいるのだから。

そんな子供を子供として受け入れられるはずも無く、可憐の中では

「忌み子」としてその役目を背負わされていたのだ。

「ワタシがどれだけ苦労したか、お前に分かるか？麗・・・」

可憐は静かに目を閉じ、過去を振り返った。

幼い頃に両親を亡くした可憐は、その後の人生全てを親戚の元で過ごした。

だが必ずしも可憐を快く引き取る親戚だけではない。そのほとんどが邪険にされながら引き取られていた。

「とろい子だよ、あんたつて子はつ！」

たらい回しにされた先々で可憐は親戚による執拗なまでの虐待に合つた。

殴る蹴るは日常茶飯事。食事制限などもはや常識だ。何も食べさせてもらえないなかつた日もあつた。

それでも可憐は文句を言つ事など許されなかつた。自分には帰る場所など無い。親はもう居ないのだ。

少なくとも成人するまでは何処かで養つてもらわないと、人生破滅である。

可憐は果てしなく続く暴力の嵐の中、ずっと息を潜めるように耐えてきた。

「メスブタ」「淫乱」など、まったく身に覚えの無い言葉まで浴びせられる頃になると

引き取り先の男たちの格好の性処理機として扱われた。

夜になると親戚の主人たちが可憐の部屋に忍び寄り、口を塞ぎ、裸にして暴力を振るう。

「所詮お前はメスブタだ。誰にでもやらせるんだろ？」

中学から高校に上ると、親戚たちによる言葉の攻撃で可憐の精神はもはや限界ギリギリだつた。

嫌がる可憐を無理矢理押し付け、気が済むまで犯し続けた。

後に残つたのは身体の中、外問わず放出された男たちの白い欲望の

み。

いつしか可憐の心は壊れ、そして今の夫の子供を孕んでしまったのだ。

今しがた殺害した夫、一輝が可憐と一緒にになった理由は至つて簡単。可憐が我が子、麗を宿したため仕方なく籍を入れた。決して望んだ結婚ではなかつた。

一輝も可憐の親戚一同の一人であり、別に親戚同士が結婚する事に問題は無いのだが

相手が親無しの可憐だと、いろいろと都合の悪い事例が出てくる。メスブタ呼ばわりされた女が自分の妻である事を知られたら、他の親戚たちに何を言われるか分かつたもんじやない。

そのため一輝は可憐の存在を隠しながら、偽りの夫婦生活を続けてきた。

「お前なんかカスだ。俺はお前を嫁として認めないからな」
もはや慣れきつた言葉だったが、既に麗を身籠つていた可憐にはキツイ言葉であった。

それ以後も一輝、そして他の親戚たちからの嫌がらせは続いた。
会えば意味も無く唾を吐きかけられる。頭を叩かれ、振り向いた瞬間、凄まじい威力持つた拳が顔面に撃ち込まれる。

痛みで悶絶していると今度は腹を蹴られ、のた打ち回る可憐に冷たい水が浴びせられる。

そして最後に裸にされ、強姦されると言うのがいつものパターンだつた。

当然ながら避妊具など無い。真っ白な欲望は下半身の奥深くに注ぎ込まれる。

もはや限界など超えていた。そしてその頃から「殺してやる」と言う確固たる憎しみが可憐の心に巣を作つていたのだ。

我に返つた可憐はまたもや下腹部を擦つていた。

殺害した夫の首は切断し、身体は工事用の切断機に放り込み、粉々に碎いて海に捨てた。

そしてその半年後、可憐は本格的な陣痛を向かえ、麗が誕生した・。

「言つておくけどお前はワタシにとって邪魔以外の何者でもないんだからね。

その辺勘違いしないでよね！」

「・・・・・」

「まったく何言つても無言かい！」このバカ子がつ！？

「・・・・・」

幼い頃からそう言われ続けて麗は育つた。学校から家に帰つても可憐はおらず

夕食の支度も自分でしなければならなかつた。

麗は何も言わず黙つて生活を続けた。心中に絶対的な殺意を育てながら・・・。

「や～い、お前んち貧乏家！みすぼらしい世捨て人～！」

「お前汚いんだよ、寄るな！」

「死んだ目してんな、いつそ殺してやろうか？」

「お前んちの母親ヤリマンだろ？いつもホテルから男と出てくるんだぜ」

「毎回男が違うんだよな。そんなにモテる顔じゃないってのにな、お前の母さん」

小学、中学、高校と麗は他の生徒たちから差別され続けていた。

それでも麗は何も言わなかつた・・・。

だがそれは言葉で何も言わなかつただけだ。何も行動まで起こさなかつた・・・と言つわけではない。

この頃から麗の通う学校では生徒たちが次々と行方不明になるという奇怪な事件が多発し始めた。

警察も本腰を入れて動き出したが、依然として犯人は見つからず、

生徒たちも見つからない。

警察の捜査の手は当然同じ学校に通う麗にも及んだが、麗が学校でいじめられている事実を知り

そのいじめに対し抵抗しなかつた事実を見つけると、警察は麗のマークを外してしまった。

警察では「復讐などするようなタイプではない」と踏んだのだろう。しかし警察の読みは浅かつたのだ。幼い頃から憎しみによつて育てられた麗にとつて

自分の感情を消し去る術など、当に身に付けていたのだから。こうなつてしまえばもはや麗の独壇場である。

言葉による抵抗は皆無だつた。だがしかし、行動による抵抗は確かに、そして静かに続けられていたのだ。

行方不明になつた生徒たちは、行動を起こした麗によつて惨殺されていたと言つ事実は、もはや言つまでも無いだらつ……。

「お前、人を殺したね？」

「・・・・・」

「黙つても分かるんだよ。殺つただろ？ええ？そつなんだろ！」

家に帰つた麗を可憐は執拗に責め始めた。

「お前の学校の生徒たちが行方不明になつてゐて、今日警察どもが来たんだよ！」

「・・・・・」

「お前だろ！？お前が殺したんだろ！？」

「だつたらなんだつて言つんだ？」

このとき、可憐は初めて我が子の声を聞いた。産まれた時の産声意外で声を聞くのは初めてのことだつた。

「この人でなしがつ！人様に迷惑掛けるんじゃないよ」

可憐の容赦ない平手が飛んでくる。

「人の事どうこう言える立場なのか、お前は」

「お前……お前だと……母親に向かってお前とは何様だっ！」

「俺様だよ。お前が母親だなんて俺は思っていない。ただのメスブタに過ぎん」

「な、なんだつてえ……この人殺しがつ……」

「お前だって人殺しだろ？あの男を殺したじゃないか」

「つ……」

麗は知つているのだ。まだ母体に居たときに可憐が殺した夫の事を。常識的に考えてそれは不可能である。だが、どういうわけか麗はそれを知つている。

「やつぱり……やつぱりお前は生まれてくるべきじやなかつたんだよ、麗！？」

「今頃言つても遅いだろ。頭の悪い女だ」

「このガキッ……死ね！！」

可憐は我が子麗に飛び掛つた。だが高校生になつた麗に力で勝てるほど強くはない。

可憐は呆氣なく麗に首を掴まれてしまつた。

「お前がな」

「えつ……！？」

次の瞬間、「「ゴキッ！」」と言つ鈍い音を立てて可憐の首があらぬ方向へと曲がつた。

「あああ……ああああ……ああ……」

可憐の口からヒューヒューといつぽん氣の音が漏れる。

「メスブタには相応しい最後だな」

可憐の口から大量の溢れる。『じぼじぼ』と言つ音を立てながら床での打ち回る可憐。

「これで済むと思つなよ、親不孝者……いつか、いつかお前を殺してやるからな」

「死んでどうやって俺を殺そつてんだ。バカ女がっ！？」
そして可憐は一切の動きを止め、絶命した・・・・。

翌日、麗の通つていた学校でまたもや行方不明者が出了。

今回、行方不明になつたのは鉄 麗と言つ生徒で、他の生徒たちから執拗ないじめを受けていた生徒であることが分かつた。

また彼の家で何者かによつて殺された彼の母親が発見されている事から

鉄麗が何らかの事情を知つているとして警察は捜査しているという情報が流れた。

行方不明になる前日、彼を最後に目撃した近所に住む大学生の話によると

彼は全身血塗れになりながら夜の闇の中に消えて行つたと証言している。

麗は表の世界から完全に姿を消したのである・・・。

「ひいい！だ、誰なんだお、お前は・・・」

ゴトンと転がつた死体を余所に、男は自分の目の前で立ち尽くす人物にそう言つた。

「鉄 麗・・・魔界か、なかなか良い場所だな。気に入つた」

この日、麗は魔界に降り立つた。

それから14年後、麗は魔界で凄惨な殺戮を続け、ついに魔界NO.1である「神殺し」の異名を会得した。

更にその2年後、仲間の紅、魔矢と共に「神殺し」と言つ物語の幕が開かれるのである・・・。

アナザー・ストーリー～ヒプノード2「紅の眞実」

「ウザイんだよ、お前！」

もはや聞き飽きた言葉だったが、今日もそんな言葉と共に紅葉は左頬に平手打ちを食らつた。

「ちょっと可愛いからって調子に乗んなよ」

他の女生徒は手加減と言つるもの知らない。今度は別の女性の蹴りが紅葉の腹を抉つた。

「うぐう・・・・・」

紅葉は痛みで表情を歪ませながら、身体を前かがみに折り曲げた。
「良い？今週の金曜までに20万持つて来るんだよ。持つてこなかつたらどうなるか分かつてるわよね？」

「・・・・・」

紅葉は何も言わずに蹴られた腹を擦つていた。勿論「うん」なんて言える訳が無かつた。

何処にでも居る単なる女子高生が20万なんていう大金をそつ易々と持ち合わせているはずも無い。

彼女をいじめていた女子高生たちはその場を後にした。

「あの子意味分かんない。何やつても無表情で、痛めつけられても笑つてるんだから」

「キモイだけよ、殴られて笑つてんだから。ひょつとしてマゾなんじゃね？」

「アハハハハ！」

女生徒たちの言葉は紅葉に届いていた。だが当の紅葉は心を痛めることなどなかつた。

気にしないのが一番・・・・・。いちいち反応すると余計に殴られるから・・・・。

笑つていればキモイの一言で済む。余分に殴られる必要も無い。
だから嫌なときでも笑つてれば良い・・・・。例えこの心を壊す事

になつても・・・。

「おかえり、紅葉」

「お母さん、駄目よまだ寝てなきや」

「大丈夫よ、今日は気分が良いの。体調も良くなつてゐる気がするし

」「だけど・・・」

「良いのよ、ゴメンンネ。紅葉には苦労ばかり掛けて・・・」

「そんなこと気にしなくて良いよ。私は平氣だから」

そう言うと紅葉は病弱な母に向かつて二ツコリと微笑んだ。その笑顔はまるで天使のような笑顔だった。

「そのアザどうしたんだい?」

「えつ・・・ああ、これはね、ちょっと転んじやつてや」

「ちゃんと消毒しなきや駄目よ」

「分かつてるつて」

そう言うと紅葉は救急箱の中から絆創膏を取り出し、アザの部分に貼り付けた。

紅葉の母、矢吹洋子は3年前に夫と離婚して以来ずっと身体の調子が悪かつた。あまりにも不調が長引くので病院へ行つたところ、慢性の気管支炎だと診断された。

元々病弱だった洋子の回復力は小学生並に遅く、もはや完全に治る事は難しいだろうと宣告された。

そんな理由から務めていた会社も辞める羽目になり、今は無職である。

生活の生計など立つはずも無く、今では紅葉のアルバイトだけが唯一の希望だった。

しかし、女子高生のアルバイト代と重つのもたかが知れている。女と言う理由だけで肉体的な仕事は雇つてくれず、低給料の接客しか雇つてもらえないのが現状だ。

おまけに洋子は明日から入院しなければならない。そうなると頼みに綱は洋子の貯金だけである。

幸いな事に洋子の預金はそれなりに入つており、入院費はしばらくまかなえる。

しかし食いつぶすといつ現状に変化は無く、金はいつか消えてしまうものだ。

無くなつてしまえば入院費を払つ事もできない。当然にこの家賃だつて払えないだろう。

そうなつてしまつ前に何とかしなければならないのだが、今の現状ではどうにもならなかつた。

離婚した洋子の夫は、またにロクデナシと言つ葉を絵に書いたような男だつた。

そのため養育費など送られてくるはずも無く、紅葉は全て自分のアルバイト代から学費を払つてゐる。

2つのバイトを掛け持ちして、どうにかして食いつないでいるが、それもそろそろ限界だつた。

いくら接客とは言え疲労もある。それに加えて学校での陰湿ないじめが紅葉の精神を蝕んだ。

「紅葉、良いのよ。私がやるから」

「良いから寝ててよ。これが終わつたら私バイト行くからさ。今日は給料日なんだ、楽しみ」

紅葉の笑顔は屈託の無い笑顔だつた。

彼女は全ての用事を済ませると、母に「寝ているように」と言つて聞かせ家を出た。

矢吹紅葉。今年で高校2年生になる女子高生。

紅葉と言つ名前はもはや説明するまでもないと思つが、彼女が生まれた時期は紅葉の綺麗な時期で

それに因んで紅葉と名付けられた。父も母も紅葉の誕生に胸躍らせ、

やがて来る未来に将来の希望を夢見ていた。

だがそんな幸福は10年ほどしか続かなかつた。

夫の仕事に暗雲が立ち込め始めると、生活は一気にみすぼらしいものへと変化した。

それでも夫は懸命に働き続け、家族のために努力を続けた。だがそれでも不運は確実に彼らを襲つた。

夫の同僚が会社の債権を廻り、自分の分だけを奪つて姿を暗ましたのだ。

それによつて夫の勤めていた会社は多大なダメージを受け、当時幹部クラスだつた夫は責任問題を追求され

次々と金を吸収され、とうとう文無しになつてしまつた。

これが幹部ではなく、他のクラスだつたらこれほどの打撃は受けなかつたのだろう。

夫は幹部の重要人物だつたために巨大な責任を問われてしまつた。これによつて夫は会社を去ることを余儀なくされ、事実上のリストラが彼を襲つた。

夫は再起を掛け、その後も懸命に動いたが、不運は不運を呼ぶもので、とある人物の保証人となつてしまい

2億と言つ借金を背負う羽目になつてしまつた。

生きる希望を失つた夫は酒びたりとなり、母の洋子も彼を見かねて離婚を決意。

そして今現在の生活があると言つわけだ。

父親を失つた紅葉だつたが、悲しんでいる暇など無かつた。それと同時に洋子が体調不良に見舞われたのだから。

自分が働かなければ母は満足に入院すら出来ない。それ即ち「救える命も救えない」と言う状況だつた。

だが今日は給料日だ。学校でいじめられ今週末までに20万持つて来いと言わはへいるが
無いものは無いのだ。どうあつても揃えられる金額ではない。

また笑つて殴られて、蹴られて、罵られればそれで終わる。ちよつと痛いけど我慢さえすればそれで済む。

今日貰える給料の半分を予め貯めておいた預金と合計すると、洋子が入院する際に必要な金額を

洋子の預金から引き出す事無く払う事ができる。預金さえ引き出すに入院までこじ付けられれば

後は紅葉の頑張り次第でどうにかなるのだ。

これまでほとんど休日無しで働いてきた金だ。大切に扱わなきゃならない。

母のために・・・。自分をここまで育ててくれた母親のために・・・。

紅葉は仕事が終わり、受け取った給料をバッグに入れると、勤務先のコンビニを後にした。

「給料日なんだってね、今日」

自転車を止めていた駐輪所で突然声を掛けられた。驚いた紅葉の両肩に手が置かれる。

見るとそこには学校のクラスメイト・・・紅葉をいじめているグループ数名が立っていた。

「な、なに・・・何か用?」

「何か用だつて、ずいぶん素つ氣無いじやん。貰つたんでしょう?給料」

「だからなんなの・・・」

「よこしな」

「ふ、ふざけないでーーーどうしてあんたたちに上げなきやならないのよ」

「言つたでしょ?20万持つて来いって」

そう言つた女性徒の隣に、いかにもタチの悪そうな男子生徒3人が姿を現した。手には金属バツドを持っている。

「あんたたちに上げるお金はない・・・つー」

一瞬何が起こつたのか分からなかつた。だがどうこうわけか紅葉は

地面に這い蹲つて いる。

頭から生温い液体が流れるのが分かつた。男子生徒の持つていた金属バッジが頭に命中したのである。

女生徒は紅葉からバッグを取り上げると、封筒に入つた給料を掴み取つた。

「やめて……か、返して……お願ひだから……それが無いとお母さんが……」

「ああ？ お母さんがどうしたつて？」

「お母さん……入院できなくなつちやつ……お願ひだから……返して……」

「うるせえんだよ、このアママ！」

「やつちやつて」

女生徒の言葉が合図となり、紅葉は3人の男たちから殴られた。3人の男たちから殴られたとあつては、もはやどうしようもない。こつちはただの女。どう考へても非力な女なのだ。太刀打ちできるはずが無かつた。

「うう……ぐう……」

「惨めね～こんなに汚れちやつて。可愛そうに」

リーダー格の女が紅葉の顎を掴んでそう言つた。

「あんたのお母さんつて病氣なんでしょ？ 良かつたじやない。これでお母さんは入院できない。」

厄介者の母親が死ねば、あんたも苦労しなくて済むじやないの」

「返して……お金……返して……」

「ダメ～あんたのものは私の物。私はジャイアンであんたはのび太なのよ」

ギヤハハハと言つ歡声が上がつた。これ以上に無いほどの面倒だつた。

「じゃあね、子猫ちゃん」

そう言つと紅葉の給料を奪い、一同は去つて行く。

「返して……お金返して……返してえ…………！」

もはや紅葉の言葉など、連中には届いていなかつた……。

紅葉は自分を呪つた。もし自分が男だったら、こんな惨めな姿になつていなかつたはずだ。

もつと力だつて強かつただろうし、あの連中にだつて負けてなかつたはずだ。

自分が男で強ければ、お母さんだつて守れたはずなのに……。

「いつか・・いつか見てろよ・・・・・殺してやる・・・・・殺してやるからな!!!!」

この瞬間、紅葉の中に鬼が生まれた。

殺し屋と言う存在は知らなかつたわけではない。

その言葉が存在するという事は実在するという何よりの証拠だ。想像も付かない人物だが殺し屋は確実に居る。

紅葉はそう信じていた。自分が手を下せないのなら誰かに頼めば良い。

紅葉はこの世の中に「裏社会」と言つ世界があり、更にその裏側に「魔界」と呼ばれる世界がある事を知つた。

魔界では殺しなど日常茶飯事のように起きているらしい。人が人を殺すことなど当たり前のような世界。

そう言つた魔の世界がある事を紅葉は知つた。

そしてその世界に「殺し屋」が存在する事も彼女は知り得た。彼女はその殺し屋を雇う事を考えた。

だが、得た情報によると殺し屋を雇うためには膨大な金が必要になるらしい。

金額までは分からないが、何十万と言つ世界ではない事は確かだ。動くとしたら何百、いや何千万クラスかもしれない。

そんな金を紅葉が用意できるはずが無い。

しかし、紅葉が得た情報には、殺し屋は最初から金額を提示するわけではなく

殺し屋が依頼主に実際に会つてから金額を決めるといつシステムのようだつた。

紅葉は悩んだ。いくらになるか検討も付かない。だが奪われた金を取り戻さなきやお母さんは入院できない。

そうなれば命に関わつてくる。もはや一刻の猶予も無かつた。そして紅葉は決断し、受話器を手にした。

「もしもし・・・・・」

待ち合わせ場所に現れたのは長身で黒髪に短髪。黒のジャケットを着た、いかにも強そうな男だった。

男は「鉄麗」と名乗つた。どうやら彼は魔界ではかなりの有名人らしく、その手のプロだと言つ。

確かに外見を見る限り、凄まじい風格と威厳が感じられる。見つめられるだけで殺されそうな雰囲気だつた。

無論、この時点ではこの男が魔界で「神殺しのウル」と言つ人物である事を知る善しも無いのだが・・・。

紅葉は事情を話した。依頼できるほどの金は持ち合わせていないが、どうしても奪われた金を取り戻さなきやならない。

母の病の事。そして、何より奪い取つた連中が憎いと言つ事を・・・。

「一つ聞いていいか?」

鉄麗が言つた。

「なんですか?」

「どうしてあんたはいつもそつやつて笑いながら話すんだ?」

「えつ・・・

紅葉は自分では気付いていなかつた。余計な攻撃を受けまいと常に笑つてゐる仕草がここでも出てしまつたようだ。

「えつ・・あの・・そうですか・・・アハハ・・良く分からぬけど・・・そなのがな・・」

「・・・・・」

「『めんさない・・・そ、その・・・えつと・・気持ち悪いですよ
ね・・・『めんなさい・・・』

「いじめられて感情を無くしたか・・・それとも余計な打撃を受け
まいとすると防衛本能か」

「ア、アハハ・・・どうでしょうね・・・そ、その・・・良く分
からないです・・・」

鉄麗の指摘は的確だつた。まだ今日会つたばかりである。にも拘ら
ずこの男は紅葉の心の悲鳴を聞き取つたのである。

「で? 誰を殺して欲しいんだ?」

「えつ・・・あ、あの、でもお金が・・・」

「その事なら後で話そつ、俺はあんたが気に入った。この依頼受け
てやる」

ウルも何かしら感じる事があつたのだろう。彼は無条件で紅葉の依
頼を受けたのだった。

「自分を苦しめた、いじめに加わつた連中から奪われたお金を取り
戻して欲しい。

そしてその連中を皆殺しにして欲しい」

それが紅葉からの依頼だつた。ウルに取つてはまさに朝飯前の仕事
だつた。

紅葉はわざと連中をおびき出した。連中からすれば紅葉は金ズルだ。
何の疑いも無くノコノコと現れた。

そこに登場したのがウルだつた。もつその後は地獄絵図と言えるだ
るべ。

紅葉の依頼どおり、ウルはこれ以上に無いほどの残忍な手口で次々
と血祭りに上げた。

それを見ていた紅葉も、気付けば凶器を手にして、もはや亡骸と化し
た死体に向かつて何度も凶器を振り下ろした。

顔面が潰れ、眼球が飛び出し、口が裂け耳がもぎ取れるまで。何度も

も何度も・・・・。

これで紅葉は立派な殺人鬼となつた。

事が済んだ二人は近くにある空き地にいた。奪われた金は全額戻つた。これでお母さんを入院させる事ができる。

「あ、あの・・お金は・・・その・・・ど、どうすれば・・・私、払えるお金が、その・・・なくて・・・」

「誰も金をよこせなんて言つてないぞ」

「えつ・・・で、でも殺しにはお金が掛かるつて・・・」

ウルは何も言わず持つていたバッグを紅葉の前に投げた。

「これは・・・」

「開けてみる」

言われるがまま、紅葉はバッグを開けた。

「」、これつて・・・・

驚いた事にそこにはいくつもの札束が納まつていた。ざつと見た限りでも3億近くはあるだろう。

「母親の入院費は高く付く。だがそれだけの金があれば死ぬまで面倒が見れるだろ。

お前さえ良ければその金はくれてやる。ただし、条件がある

「じょ、条件・・・・・・?・・」

紅葉は生唾を飲み込んだ。

「確かに俺は本来依頼主からそれなりの報酬を貰う事で殺し屋を続けている。今回お前から金は取らず

逆にこいつして3億もの金を提供している。それにはそれなりの条件がある」

紅葉はもはや驚かなかつた。何故なら紅葉はもう人殺しなのだ。母親に合わせる顔などない。

後は自分の犯行が警察に見つかり、逮捕されるのを待つだけなのだ。失うものなど何も無い。

だから紅葉は怖くなかった。

「条件とはなんですか？」

「簡単だ。俺と一緒に魔界に来い」

あまりにも突飛な話に逆に拍子抜けを食らった。

「魔界に・・・」

「そうだ。お前なら俺の次に強くなれる」

「私が・・・・強く?」

「ああ。魔界に男女は関係ないからな」

紅葉の前に一筋の希望が見えた気がした。

「分かつた。私、魔界に行きます」

「そうか、それじゃ2日後、ここでまた会おう。いろいろとやることがあるだろう。全て済ませておけ」

「うん、分かつた」

それから紅葉は母を入院させ、その費用は3億が納まっている銀行の口座から自動で引き落とされる手続きを取った。

そして今まで育ててくれた母に「また来るから」と言って病院を後にした。

もう一度と戻らない事は紅葉にも分かつていた。

自分はもうこの世界の人間ではない。これから魔界の住人として生きることになるのだから。

紅葉はウルとの約束の場所へ向かつた。

「ずいぶん風変わりしたな。髪切ったのか」

「うん。似合うでしょ?」

少々おどけた紅葉がそう言つた。

「さて、じゃあ行こうか、紅葉

「私は・・・いや、僕はもう紅葉じゃないよ

「?」

「僕の名前は矢吹 紅。」これからよろしくね、ウル

「ああ」

ウルは「ヤリと笑いそう言つた。

「ねえ、僕本当に強くなれるかな？」

「なれるさ。お前なら魔界ノ・2になれる」

「楽しみだな」

その後、ウルの言葉は現実のものとなる。

紅は成長を続け、4年後に見事魔界ノ・2の座を手にする事になる。

そして、JJに「処刑の紅」が誕生したのである。。。

END

アナザー・ストーリー～H派ソード3「魔矢の十字架」

「刑事さん、煙草は持ってるか？」

男の問い掛けに俺は何も言わず首を振った。

「なんだ持つてないのか、元々吸わないのかい？」

「煙草は吸わん。身体に悪いからな」

「フハハハハ、あんた面白い事言つな」

「そうか？」

「ああ。俺からしたら煙草なんかよりも、刑事なんて仕事している方がよっぽど身体に悪いと思うがね」

なかなか説得力のある事を言いやがる。確かに刑事なんてやるよりも、ヘビースモーカーの方が健康だろ？

こちとら年中神経を尖らせ、コイツのよつた悪党を逮捕している。命がいくつあつても足りやしない。

「刑事さん、あんたは今の日本をどう思つ？？」

男は何の前触れもなく、そう尋ねた。

俺の名前は音羽麻矢。ここ東京の湾岸署に勤務する刑事。担当は刑事課。主に殺人や違法物を担当している。

今俺がいるのは都内の某刑務所にある面会室だ。

面会室に来ている用事が今日の前にいるこの男だった。

男の名前はジヤン。中国人の母親と日本の父親との間に生まれたハーフ。

国籍は日本そのため、こうして日本の刑務所に居るわけだ。

無論、刑務所に居るという事は犯罪を犯した罪があるわけで、とりわけジヤンはその中でも重罪を犯した死刑囚だ。

数年前から日本と中国の間で麻薬売買が盛んになり、日本の麻薬組織と中国のマフィアたちが手を組んでいた。

扱われる品のほとんどはドラッグ。それもかなり純度の高い代物ばかりだ。

元々中学ではドラッグの取引が横行しており、その広域範囲は年々拡大の経緯を辿っている。

そのターゲットに日本がカウントされても何らおかしなことではない。

日本の組織と中国のマフィアが組んだ新たな組織「フューネラル」のボスが他ならぬジャンだつた。

日本警察は中国の政府と合同で捜査に当たり、ようやくフューネラルの頭であるジャンを逮捕できたのだ。

ジャン逮捕の経緯には犠牲者も出た。一般市民を含め合計14人もの人間が死亡し、そのうち8人の刑事が殉職している。

これ以上の犠牲者を出すわけには行かない・・・そう思つていた矢先、連中の取引先に潜入捜査として送り込まれていた俺がやつとの思いでジャンを確保。それから援護部隊に連絡を取り、こうして無事に逮捕に至つている。

裁判でジャンは多くの麻薬を売買した事、それに殺人の容疑で立件され、死刑判決が下つた。

だが例えジャンが死刑になつても、フューネラルと言つ組織を壊滅した事にはならない。

未だフューネラルは存在しており、俺たちは今その壊滅を目指し、捜査している。

その最重要化課題が「フューネラルのボス、ジャンの面会」だつた。「なかなか気に入つてゐる。近代化するテクノロジーには少々着いて行けないけどな」

「そうかい、あんたまだ若そうだな。歳いくつだい?」

「今年で26だ」

「若いね~その若さで他の刑事たちの指揮を取るんだろ?異例の昇格つてヤツだな」

「それはどうも」

ジャンの言つてることは的を得てゐる。入所当時から射撃の腕前を買われていた俺は、湾岸署初の最年少昇格を果たした。

それも潜入捜査によりジャンを逮捕した事が大きく影響している。

「俺は死刑囚だ。後はもう死を待つだけだ。だが気をつけることだ、誰もがいつでも死刑になり得る」

「どういう意味だ?」

「例え俺が死んでも組織は存続する。あんた、気を付けた方がいいぜ。俺を捕まえたのがんただつて事は組織の連中は皆テレビを通して知っているからな」

「つまりお前の仲間が復讐に来ると言つた事か」

「へへへ、それで済んだらまだマシだろつがな。特に俺の死刑執行日は気をつけろんだな」

「話にならんな」

俺はそう言つと取調室を出た。

「復讐はこいつだって遠回しにやつて来る。へへ、刑事さん良く覚えときな」

気に止めるような言葉ではなかつた。俺を殺しに来るなら返つて好都合と言つもの。返り討ちにして連中のアジトを聞き出しちやる。その時の俺はそう思つていた。

「お帰り」

「ただいま。郁子はもう寝たかい?」

「ええ、ついさつと早く帰つて来れば良かつたな」

「だつて言つて」

家に帰つた俺に、妻の香織が微笑んだ。

「そうか、もうちょっと早く帰つて来れば良かつたな」

「フフ、代わりに私がしてあげようか?」

「ああ、是非頼むよ」

そう言つと香織は俺の脣にキスをした。

香織とは学生時代からの付き合いだ。高校生の頃に同じサークルで出会つた。その後俺は警察官になるべく警察学校へ入学。

香織は大学には行かず、母親の店である花屋の後を継いだ。

俺が警察学校を卒業し、刑事になつた頃には、既に香織の花屋は店舗を持つまでに大きくなり、ここ最近その店舗の数を増やしつつあった。

その香織との間に生まれたのが娘の郁子だ。今年で3歳になつた。俺は郁子のためなら何で出来る。目に入れても痛くない可愛さとはよく言ったもんだが、まさにその通りだ。

郁子が将来結婚するかと思うと、考えただけで泣けてくる。『冗談じやない。手放してなるものか。

親ばかと言われるかも知れないが、父親は子供を溺愛するものだ。それが娘なら余計に。

「仕事、忙しいの？」

「ああ、例の事件がまだ解決していないからね。明日からまた家を開ける事になりそうだ」

「そう、あまり無理だけはしないでね。郁子のためにも」「分かつてゐる。すまんが俺の居ない間、家を頼む」

「うん」

幸せだった。仕事は大変だが家に帰れば美人の妻が出迎え、娘の郁子がいる。

娘の成長を見守るのがどれだけ樂しいか。家庭を、子供の居る親なら誰もが思う至福の一時だ。

その傍らに妻の香織がいる。これこそが本当の幸せと言つものなのだろう。俺はそれを信じて疑わなかつた。

ましてやその幸福が無惨に引き裂かれる事など、想像もしなかつた。・・。

ジャン逮捕後、フューネラルに関する捜査は暗礁に乗り上げた。

様々な情報が錯綜する中、最も有力視されている情報の一つが「フューネラルは魔界と言う世界に住む殺人鬼の手によつて皆殺しにされた」と言う情報だった。

まだ未確認だが、闇世界をうろついてゴロシキどもが、フューネラル

のアジトに乗り込んでいく一人組みを見たと言つ。

一人は長身で大柄の男で、髪の毛は短髪で皮のジャケットを着ており
もう一人は女と見間違えてしまつほどの美少年だったと言つ。

魔界と言う世界がこの日本に存在する事は知つていた。魔界には法
がない。よつて警察も介入できない禁断の世界。

裏社会、闇世界をも超越した殺戮のみの世界、それが魔界だ。

(この二人組みが後のウルと紅であるが、この時の麻矢は知る善し
も無い)

だがあくまで未確認の情報だ。鵜呑みにする事は出来ない。
捜査本部は動き様が無い状況にシビレを切らし始めていた。

そしてあの日・・・

俺に取つては運命とも呼べるジャンの死刑執行日がやつて来たのだ。
「ひつして人生最後の日を、まさかあんたと迎えるとは思わなかつ
たな」

「すまんな、むさくるしい男で」

「良いつて事よ。むしろ俺は心配してんだぜ、あんたの事をな」

「未確認だがフューネラルは壊滅に陥つたと言つ情報がある。とな
ると幹部の連中はもうこの世にはいない。

つまり俺を憎むのはお前くらいなものだ」

死刑執行当日、俺はジャン発つての要望で執行まで行動を共にする
事となつた。

「へへへ、魔界か」

「そうだ。どうやら知つているようだな」

「俺も伊達に裏社会で生きてないぜ。それくらい知つてゐる。実は俺
も魔界に行く予定だつたんでね」

「ほう、それは初耳だ。お前如きが生き延びられる世界だとは思え
んがな」

「ハハハ！刑事さん、言つね」

「音羽警部」

その時、フューネラル壊滅に関して調べさせていた刑事たちが俺の元へやって来た。

「どうだつた？」

「はい、情報通りフューネラルは壊滅している事実が取れました。やつたのは一人組みの男。

未確認だつた情報通りの風貌だそうです」

「そうか。ジャン、聞いただろ？お前の組織は、」臨終だ。そしてお前ももうすぐそなる

俺がそう言つと死刑執行の指示を取る検察官がジャンの元に現れた。いよいよ死刑実行のときが来たのだ。

そしてジャンは言つた。

「刑事さん、あんた綺麗な奥さんが居るよな。それに可憐い娘がよ」

俺は自分の耳を疑つた。ジャンが俺の家族について知るはずが無いのだ。

「俺だつて一人で魔界へ行こうなんて思つてなかつたぜ。実は知り合いが魔界に住んでてね。

そいつは俺の友人でさ、俺が逮捕された事に相当腹を立ててるんだよ」

ジャンが何を言わんとしているのか理解できなかつた。

「そいつはまだ生きてるぜ。なんたつて魔界で生きてんだからな。今頃何処に居るかな？ああ、そつか、刑事さん、あんたの家に向かつたんだっけ」

「なつ、なに！？」

「クケケケ！言つただろ？刑事さん。復讐はいつだつて遠回しにやつてくる。

何もあんたを殺すことが復讐だとは限らないんだぜ！」

ジャンがそういつた時には既に俺の身体は動いていた。家族が、香織が、そして郁子が危ない！

「ククク・・・俺はちゃんと言つたぜ、あんたが心配だつてな！…それがジャンの最後の言葉だつた。

激しく息を切らせながら、俺は家に辿り着いた。

家のドアを開けるまでもなかつた。刑事の勘が危険を知らせている。

家から漂う雰囲気がいつもと違つていたのだ。

禍々しい殺意の渦。そして血の匂い。俺は我を忘れて家に飛び込んだ。

そして・・・・・

「香織・・・・・郁子・・・・あああああ・・・・」

そこで俺は地獄を見た。変わり果てた妻と郁子の姿。辺り一面血の海。二人の肉体はバラバラにされており、どれが誰の部分なのか判別が付かなかつた。

「嘘だろ・・・・・こんな・・・こんな事があつて良いのか・・・・」

その時、俺の背後で物音がした。誰かがいる事は明らかだつた。もはや迷いはなかつた。ただ頭に浮かんだのは「殺してやる」と言う憎悪だけ。

俺は振り向きざまに持つていた銃を構えた。

相手はやはり男だつた。それが魔界の住人である事は一目瞭然だつた。

あの目は普通の人間の目ではない。血と殺戮に溺れ、我を忘れた殺人マシーン。

俺はヤツの頭目掛けて何度も発砲した。幸い俺の射撃の腕前が活かされ、相手はほぼ即死。

（麻矢の家族を殺した殺人鬼のランクは最下級クラス）

それでも俺は持つてゐる全ての弾丸をヤツに食らわせた。

全ての弾奏が終わると、俺は跪いた。

俺は守れなかつたのだ。家族を、娘を・・・。光り輝く一人の尊い命を守れなかつたのだ。

「うわああああああああああああつ――――！」

その後、俺がどうやって朝を迎えたのかについては、明確に覚えていない。

人体改造を仕事としている店のマスターは

その男がやつてきた時、目を疑つた。男の顔からは生気が失われ、その代わりとして鬼が宿つていた。

そして男はマスターにこう言つた。

「自分の腕を改造して欲しい」と。

男は改造に当たつての細かい詳細をメモしており、それ通りに作つて欲しいと言つた。

「別に構わないが、凄まじい激痛を伴つ事になるが

「構わん。遠慮なくやつてくれ」

マスターの言葉に男はそう答えた。まるで激痛を甘んじて受け入れるようだ。

手術は19時間にも及び、ようやく完成の日の目を見た。

「あなたの要望通り出来たぞ、オリハルコン・オロチだ」

「手間を取らせたな」

そう言うと男は提示された金を置き、店を出た。

「あんた、何処行くんだ？」

そして男は力無く、鬼の形相でこつ答えた。

「魔界へ・・・・と。

E
N
D

アナザー・ストーリー～エピソード4「魅惑、由佳の狂氣」

その入り口はポツカリと口を開いた魔物のようだった。

入り口から奥は真っ暗闇、物音さえしない真の暗みだ。とても女一人で足を向けるような場所ではない。にも関わらず、この入り口の一人の女が立っていた。

「本当にに行くの？」

「ええ」

「私には分からないよ。どうしてこんな事に……」

「それは私だつて同じだよ。ありがとう、真奈美。付き合つてくれて」

「ねえ、由佳。もう一度考え方直そうよ。無謀過ぎるつて女のあんたが魔界に行くなんて」

「ただけどもう手遅れだよ。私は人を殺した。しかも最愛の人を……」

「あの男は結局由佳を騙していたんじゃない。それはくらい分かるでしょ？」

「分かつてる。だけどこの手に掛けたのは事実だから。私はもうこの世界に居られない」

「警察行こう。自首して罪を償つて、それが終わつたらもう一度やり直せば良いじゃない」

「真奈美、私は捕まるのが嫌で魔界に行くんじゃないよ」

「だつたら余計……」

「また人を殺しそうだから魔界へ行くの」

「由佳……」

「私はもう人を殺す快樂を覚えてしました。この手がね、私に言うの。殺せつて」

「……」

「私はもう人間じゃない。人を殺めた。後戻りは出来ないの」

「だけど、だからって何も魔界へ行く必要は無いでしょ」「あるわ。魔界へ行けば私は人を殺さない」

「どうして?」

「魔界には殺人鬼しかいないんだよ。女の私じゃとても闘えない。だから私は人を殺さない。」

だけどこのままこの世界に居たら、私は間違いなく人を殺す」

「自分を止めるために魔界へ?」

「そう。それしかないの」

そう言うと由佳は真奈美の方へ振り返った。

「真奈美、今まで本当にありがとう。私が信用できるのは貴方だけ。だけどこのまま真奈美と一緒に居ると、取り返しの付かない事になりそうだから、私行くよ」

「由佳」

「それじゃ、またね」

そう言い残し、魔界の闇へ消えて行つた由佳は、一度と振り向かなかつた。

事の発端は数ヶ月前に遡る。

由佳には結婚を約束した彼が居た。彼の名前は雪城

裕也

由佳が18歳だったのに對し、裕也は24歳で一流企業に勤務するエリートだった。

裕也との出会いは出来心で参加した合コンがきっかけだった。

二人の共通の知人が、他数名をカツプリングし行なわれた合コンで席が隣同士になつた。

そのため二人は自然と話しあうようになり、気付けば意気投合を果たしていたのだ。

付き合うようになつたのも極自然の成り行きで、気持ちを伝える前に既に身体の関係を持っていた。

今思うと明確な告白は無かつたような気がした。由佳も面と向かって気持ちを伝えた事はなかつたし

裕也も無かつたはずだ。例え愛の告白がなかつたとしても、一人の未来は輝いていたのだ。

幼い頃から愛情に飢えていた由佳は極度の寂しがり屋。自分一人で生きて行けるようなタイプではない。

一方の裕也もどちらかと言えば寂しがり屋で、少々頼りない一面もあつたが、由佳はそんな裕也が好きだった。表面的には気持ちは一致しているはずだった。

少なくとも由佳は裕也との結婚を考えていたし、その後の人生も共にするつもりでいたのだ。だが裕也はそうではなかつた。

元々親の七光りで世間に出了る裕也は我慢と言つもの知らない。おまけに性格は甘つたれで、親の敷いたレールを歩いてきた世間知らずの男。

由佳との初めての性交でその快楽を覚えた裕也は、その後は避妊せずに行はれに走つた。

受け入れる由佳としては、避妊しなければ子を宿すという事は知つていたが

裕也がそれでも良い。あるいはその氣があつてしているものだと解釈していたため

避妊せずのセックスを拒む事はしなかつたのだ。それが仇となつた。避妊せずに一ヶ月が経過した時、由佳は子を宿した。

医者からは「おめでたですよ」と言われ、由佳自身も大いに喜んだ。共働きで、尚且つ由佳が中学生の頃に交通事故で両親は一度に他界。親の愛情などほとんど与えられなかつた由佳にとって、最愛の人の子を宿す事はこれ以上に無いほどの喜びだつた。

だが妊娠した事実を裕也に伝えると、裕也は顔を真つ青にしてこう言つた。

「堕ろしてくれないか?」

それは由佳にとって「死の宣告」と同じ破壊力を持っていた。

結婚の約束をしていたのは事実だが、裕也は明らかに由佳の妊娠についてビビっていた。

突如として突き付けられた現実を拒否したのだ。元々親の七光りで社会に出たような男だ。

当然の反応といえば当然でもあるが、まだ無垢だった由佳にとつて、それはにわかには信じがたい態度だった。

妊娠した事実を告げた翌日から連絡する回数が減つた。

「どうして電話に出ないの？」と問い合わせても「仕事が忙しいんだ」としか言わない。

やがて連絡は来なくなり、毎日のように送っていたメールも、由佳が送らなければ返事が来ない状況になった。

妊娠する前は裕也のほうから五月蠅いほどメールが来たといつのに。その後しばらくすると今度は電話が通じなくなつた。掛けても「おかげになつた電話番号は現在使われておりません」と言つて冷たいアナウンスが流れるだけ。

更に関係を切る行為はエスカレートし、裕也の勤め先に電話しても彼には繋がらなかつた。

電話を受けた相手の反応から見て、おそらく裕也から「いないと伝えてくれ」と言われているであろう事は明白だつた。

自分は捨てられる。宿した子供と一緒に・・・。

まだ18の小娘である。頼るべき存在に捨てられてはどうしたら良いか分からなくなつて当然だ。

シビレを切らした由佳はとうとう彼の会社と自宅を訪れた。

だがそこに彼は居なかつた。会社の上司が現れ「裕也は2日前に退職した」と由佳に告げたのである。

上司の話しづりから察するに、嘘を言つては見えなかつた。どうやら本当に辞めた様である。

その足で自宅にも向かつたが、もはやもぬけの殻だつた。とつくて引っ越しした後であり、自宅は空室になつていた。

逃げられた・・・・。この時まで心の片隅にわずかな希望を持つていた由佳だったが、もはや現実は変わらなかつた。由佳は子供と一緒に捨てられたのである。

その後由佳は子供を堕ろした。

親の居ない由佳はたつた一人で子供を堕ろすという背徳行為をやつてのけた。

勿論、こんな事はしたくなかった。だがまだ二十歳にもならない親の居ない女に、どうやって子供を育てると言つのだ。

人間的にも経済的にも、由佳自身が食べるだけで精一杯なのだ。由佳は自分の本当の気持ちを押し殺し、泣きながら我が子を堕ろした。

「次は別のお母さんの身体に宿つてね

「こんなママでごめんね」

「魂だけになつて、いつか私を殺しに来てね。その時、私は喜んで貴方に殺されるから」

幾度と無く繰り返された自責の念に、由佳の心は大きく傷付き、もはや修復は不可能な状況に陥つていた。

子供を堕ろした由佳にはやるべき事があった。

それは最愛の人、裕也を抹殺する事だった。

犠牲は私たちだけで十分。彼が生きていたら同じ苦しみを味わう人が必ず出てくるだろう。

それだけはなんとしても阻止せねばならなかつた。

由佳は興信所に裕也の行方を調べるようにお願いした。

すると呆気なく裕也は見つかった。驚いたことは裕也は以前住んでいた場所の隣の地区に住んでいたのだ。

しかも、新しい女と一緒に・・・。

鬼畜とはまさにこの事だった。由佳は自宅からあつたけの凶器（

包丁やカッターナイフなどをバッグに詰め夜を待った。

興信所からの情報によると、夜は新しい女と一緒に過ごしているようだった。

由佳は裕也の家に忍び寄り、深い深夜を待ち、行動に移した。案の定、裕也の家から女の喘ぎ声が漏れている。どうやらよろしくやっているらしい。

季節が夏だったせいもあり、裕也の家に窓ガラスは網戸になっていた。

気付かれないようにベランダに侵入すると、由佳は渾身の力を込めて網戸を包丁で引き裂いた。

「きやああああっ！！」

裕也の下で両足を広げていた女が叫んだときにはもう遅かった。

由佳の振り上げた包丁は、女の上に重なっている裕也の背中から、下にいる女の腹部に突き刺さった。

包丁の柄の半分までが裕也の身体に突き刺さっている。相当深く刺さっている証拠だ。

刺さった場所も悪かった。刃はちょうど裕也の心臓を突き破つていたのだ。

ほとんど即死だったが、由佳はそれで手を休める事はしなかった。由佳は何も言わず、ずっと黙つたまま何度も包丁を裕也と女に突き立てた。

血肉が飛び散り、内臓が露になる。口から大量の血が流れ、二人の喉がゴボゴボと嫌な音を立てる。

夜が開け、日差しが部屋に差し込む頃には、もはやそれが人間の原型とは思えないほど、無惨な姿と化していた。

この事件は警察でも大きく取り上げられ、メディアにも伝えられた。だが、未だに犯人は捕まつていない。

自分の元から去つて行く由佳を見つめたが、真奈美は涙を流さなかつた。

「いりかかるしかない」と言つ諦めは真奈美も分かっていたのだから。

魔界の闇に包まれた由佳は、目を閉じ静かに歩いた。

そして思つ。

「もう一度と戻らない。私を愛してくれる人なんていないから」

この3年後、由佳は魔界で魔矢と出会つ事になる・・・。

END

アナザー・ストーリー エピソード5 「聖魔刀が呼びし男、バーサーカー羅刹」

「ぐはっ！！」

「上村道場も話にならへんな～こんなザゴばかりが門下生じやその名が廢るで」

大阪府にある有名道場「上村道場」に突如として現れた「道場破り」は

この道場の主である上村を意図も簡単にねじ伏せた。

「き、貴様・・・・」

「なんや、まだやるんか？止めたほうがええで。ワイが本気になつたらあんさんの首、チヨイや」

焰 羅刹、この道場破りの名は大阪では有名だつた。関西に存在する8つを道場が羅刹の手によつて破壊され

その看板を持つて行かれている。いずれの主は皆大怪我を負わされた挙句に金目のは強奪されていた。

羅刹は上村を見下しながら首を搔つ切るポーズを取つた。

「ほんなら看板持つて行くさかいな。ケケケ、これで9つ目や」

上村は黙つて見つめているしかなかつた。師範代である自分が負けたのである。目の前には門下生が何人も居る。

そんな場で見苦しい事など出来るはずもなかつた。

「それからこの刀貰つて行くで。道場には必ずある言つ真剣 もうワイゴ機嫌や」

主の座つている椅子の後ろに日本刀が携えてある。羅刹はそれを手に取ると鞘を抜いた。

「お前は刀狂か？」

上村が言つた。

「ワイ？ そうやで。刀がごつつ好きやねん。人を斬るのはもっと好きやねんけど」

羅刹がそういつた瞬間、門下生たちが身を引いた。

「これで真剣は9つめや。見てみい、この美しや。最高やな」「刀ごときで満足するため道場破りか。なるほどな」

「なうんや、その言い方。じつつムカつくな」

羅刹は真剣を持ったまま上村に詰め寄った。そして左手で胸倉を掴み、軽々と持ち上げた。

「お前、負けといて何抜かすねん。偉そうやないか」

「ふ、ふん！所詮人を斬つて楽しむだけの狂人なのだらう？..」

「せやから何が言いたいねん。あんまナメた事抜かすようなら口口スで！」

「お前は確かに強い。だが刀だけに魅了された人間など所詮それまで。いくらお前のような男でもあの刀は手に負えないだらうと思つてな」

「あの刀？なんやそれ」

「聖魔刀・・・・」

「セイマトウ？..」

「日本古来より伝わる鋼鉄と、西洋より伝わった聖剣の素材になつてゐるオリハルコンを融合させた聖なる刀。

かのナポレオンやルイ14世ですら扱つ事のできなかつた伝説の名刀だ」

「ほほう~」

「その切れ味は日本刀を軽く凌駕する。だが同時に魔を秘めた魔剣でもある」

「興味ある話やな~何処にあんねん」

「ここ関西にある籠手ヶ裏山脈の奥深く。魔の山と呼ばれる山ノ下に、聖魔刀へと続く洞窟がある」

「ほほう、そうかい」

「うわ！」

羅刹は上村を手放すと歩き出した。じりりと興味を引いたようだ。

「せや、忘れとつたで」

羅刹はそう言つと引き返した。そして上村の頭上で刀を大きく振り

上げた。

「ええ事教えてもらひうたお礼や、その身を持つてじっくり味わえ」「や、止めろ！…ぐはああつ…！」

刀は垂直に振り下ろされ、上村の身体を縦に切り裂き、真つ一ついで割れた。

夥しい鮮血が飛び散る。

「ひ、人殺しだ！！」「

「うわああああつ！」

門下生たちが逃げ惑う。

「ケケケ、聖魔刀か。待つてろ、今ワイが取りに行くさかい」

笠手ヶ裏山脈、通称「天狗山」

その昔天狗が舞い降りた山脈として崇められ、今でも多くの登山家たちが訪れている。

山頂には天狗の銅像が立てられており、周囲の美しい情景を見守っている。

敏捷性に長けている羅刹にとつて登る事は容易だつた。だが魔の岩を破壊し、洞窟を発見するまではかなりの時間を要した。

何せ魔の岩が思いのほか丈夫で、羅刹の抜刀を持つてしても破壊する事ができなかつたのだ。

仕方なく羅刹は抜刀の際に巻き起こる衝撃で徐々に岩を移動させた。そして上村が言つたとおり、岩の下から洞窟が現れた。

「けつたいな場所や。汚れてまつやないか」

ブツブツと愚痴をこぼしながら羅刹は最下層まで降りた。

地上から約30メートル。ようやく下まで降り立つと羅刹は異様な魔の妖氣を感じ取つた。

洞窟はまさにトラップの山だつた。至るところに罠が仕掛けられており侵入者を拒んでいる。

それでも羅刹はなんとか行き止まりの場所まで辿り着くと、その場で目を見張つた。

「こりや・・・天狗やんけ」

そこには氷漬けにされた天狗が立っていた。一体どのようにして凍つているのかは不明だが、腐敗せずにそのままの形で残っている。その天狗の手に禍々しい刀が握られていた。

「あれやな、聖魔刀とか言う刀は」

そう言うと羅刹は持参した日本刀を勢い良く振り上げ、氷ごと斬り裁いた。

氷漬けになっていた天狗が嫌な音を立て地面に倒れると「カラーン」と言う音が響き、羅刹の足元に聖魔刀が転がった。

「ん？ なんやこれ」

そこには一枚の紙切れがあつた。

「古より伝わりし魔剣。扱えるものなら扱つてみろ・・・やと？ 偉そうなこつちや」

まるで馬鹿にしたように聖魔刀を拾い上げ、鞘を抜いたときだつた。

「なんや・・・」

抜き取つた刃と共に、封印されていた闇の力が解放された。

「うおおおつ！！」

天を舞つた闇の力は結集し、頭上から羅刹の身体に入り込む。

「うがあああああああつ！！な、なんやこの疼きは・・・」

闇の力が侵入すると、羅刹の身体は変化を始めた。

全身に至る筋肉が膨張し、体格が一回り大きくなる。白目は真っ赤に染まり、自分で抑えの利かない力が溢れ出る。

「これが、闇の・・・魔剣の本性か・・・！」

聖魔刀とは文字通り魔を秘めた聖なる刀。その魔こそがバーサーカーの力であり

バーサーカーの力を取り込むことの出来ない人間は、魔の力に圧死してしまうのだ。

刀はあくまで表面的な武器に過ぎず、その本性は刀ではなくバーサーカーの力にある。それが聖魔刀の全てである。

「か、かああああああっ！－ぐがががが・・・」

凄まじい激痛とドス黒い闇が心に広がる。

羅刹は倒れ、地面でのた打ち回った。

激痛と闇はその後四ヶ月続き、羅刹はたった一人で四ヶ月もの間、この洞窟で際悩まされたのである・・・。

助けてくれるものなど誰も居ない。孤独な洞窟で。

一年後・・・・・

「ここが魔界の入り口やな。あの組長、けつたいな説明しかせえへんから迷つたやないか」

羅刹の腰には聖魔刀が携えられている。

「ワイの実力、それに聖魔刀の威力を試すには打つてつけの場所や。神殺しのウル、その首はワイが取る！？」

この年、羅刹は魔界に侵入。そしてその魔界でウルたちと出会いゲノムとの壮絶な死闘を繰り広げる運命が待っていた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9783g/>

神殺し

2010年10月9日22時10分発行